ガンダムビルドファイターズ　勝利の栄光をヅダに！

MR.ブシドー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

矢倉　亮にとってそれは偶然であった

父親がたまたま見せてくれたガンダムのアニメに出ていたＭＳに一目惚れしてしまったのだ

父親に頼み込みそのガンプラを買ってもらい、本を見ながら丁寧に組み上げた

組み上げたＭＳの名は・・・ヅダ

駄文ですがそれでもいい方はよろしくお願いします！

目次

本編

ヅダはもうゴーストファイターじゃないんだからな ―――― 1
勝利の栄光を模型部に！ ―――― 14
敵の急所に……噛み付いてみせます！ ―――― 24
エンジンカット！ ―――― 34
貴様には極限の絶望をくれてやろう！ ―――― 43
最後の最後まで……敗北するまで諦めるつもりはねーよ ―――― 53
兄さんが大好きな妹なだけだよ ―――― 60
私達の切り札は貴方よ ―――― 69
俺の反応に敏感に応えてくれる ―――― 77
さあ、次は誰？ ―――― 86
お前の歪みを俺が正してみせる！ ―――― 95
お前の歪みを正すんじゃなく、救ってみせる！ ―――― 102
これでｋｏｈｅｕだからさ ―――― 108
私、頑張ってみます！ ―――― 116
この一撃で……終わり、です……！ ―――― 122

撃ち込む!! ―――――――― 128
あいつは絶対につぶす ―――――――― 136
私の、私だけのエクストリームガンダム！ ―――――――― 142
兄さんのために戦うのはいいかな 147
穿つ！ ―――――――― 154
全力全壊でいくわよ！ ―――――――― 161
食い千切らせてもらったわよ ―――――――― 166
撃たせる訳ねーだろ！ ―――――――― 175
行くぞブレイズ！ ―――――――― 182
婚約者だお♪ ―――――――― 193
もっと私と激しく踊ろうお！ ―――――――― 199
当たれよ！ ―――――――― 204
新型をロールアウトするわよ ―――――――― 210
決着をつけるわよ！ ―――――――― 215
これで、おしまい ―――――――― 222
この瞬間を待ってたんだよ！ ―――――――― 228
スゲー視線が痛いんだけど ―――――――― 238
俺たちももっと加速しないとな 245
私たちがｋｏｍａｎｄａなんだよ 256
俺の思いに答えてみせろ、ＥＸＡＭ！ ―――――――― 263
信頼の名は伊達じゃないよ ―――――――― 269

私はまだＨｅ　ｔｅｒяйｔｅ負けてない！　――――――――――――　275
番外編　夏だ！海だ!!サマーバケーション!!!
君の考えていることはお見通しだったよ　――――――――――――　284

本編

ヅダはもうゴーストファイターじゃないんだからな

「お願い……力を貸して」

「は？」

蒼城学園に入学した矢倉　亮はクラスメイトの女子である御影　愛に呼ばれ、放課後の夕暮れの校舎裏の木の下に二人でいた。

入学してすぐに告白なのか！　っと慌てていたリョウはなんとか平常心でいたのだが……期待していた告白の言葉ではなく、それは力を貸して欲しいと言う言葉であった。

「……力を、貸して欲しいの。部を守るために」

「部を守るため？　どう言うことなんだ？」

がっくりとしていた亮は部を守るためにという所に反応し、聞き返してしまう。

亮は気が優しく、他人のために余計なことによく首を突っ込んでしまう性格なのだ。

「付いて来て」

歩き出した愛に付いて行く。

しばらく歩くとプレハブの中に入り、その中央には巨大なシートに覆われたモノと一人の男子生徒と女子生徒が居た。

「愛ちゃんお帰りー」

「あ、愛お帰りー。彼がそうなのかな？」

「そう」

「えーっと、はじめまして？」

よくわからないまま、首を傾げ挨拶をするリョウ。

女子生徒は恐らく先輩で、男子生徒は同級生だとリボンやネクタイの色で判断できる。

「はじめまして……だね。私は二年の獅子骨　桜だよ」
「ボクは山根　晃。君と愛と同じ一年生だね」
「矢倉　亮ですけど……力を貸して欲しいってどういうことですか？」
「……説明してないのね、愛ちゃん」
「言ったよ。部を守るためにって」

お互いに自己紹介をしてから詳しい内容を聞こうと桜と晃に問いかけたが、キョトンとしてから愛の方を二人同時に見た。
愛にいたってはポテチの袋を開封してポリポリと食べているのだが、その一言に二人はため息をついてがっくりとしてしまう。

「愛ちゃんが任せてって言ったの、信用するんじゃなかったわね……」
「アハハハ……愛は前からああでしたよ先輩。それじゃボクから説明するけどいいかな？」

亮が縦に頷くと、晃はニッコリと笑顔で説明を始めた。

「まずボクらは模型部の部員で……廃部寸前の部活なんだ」
「模型部？　それに廃部寸前のって……」

模型部は亮が興味を持っていた部活動の一つで、昼休みにポスターをじっと見ていたこともあった。
この部に入れば、部屋に飾っているアレももっと上手く作り上げることができるんじゃないか？　と思いながら。
その部が廃部寸前だと聞いて亮は顔をしかめた。

「部員は先輩とボクに愛とここにはいない部長だけで、今度の練習試合に勝たないと廃部なんだ」
「模型部なのに練習試合って可笑しくないか？　普通にコンテストとかじゃ……」
「模型部って言ってもボクらのメインは……これだからね」
「これって……」

シートで覆っていた巨大な何かはガンプラバトルをするための機械である、ガンプラバトルシステムの筐体であった。

「ガンプラバトルのシステムだよ」
「なら練習試合もこれの……」
「そうだね。私たちは今度のガンプラバトルの練習試合に勝たないといけない。そのために君の力を貸してくれないかな？」
「わかりました。力を貸しますけど、俺……初心者ですよ？」
「へ？」
「え？」

亮の発言に晃と桜は硬直し、ギギギと音が鳴りそうな感じで未だにポテチを食べている愛を見た。

「ちょっと愛ちゃんどういうこと！　即戦力じゃないじゃない！」
「だって、模型部のポスターをじっと見てたから」
「あーもー！」
「なんつーか……ごめんなさい」

申し訳なさそうに謝ると、慌てている桜と晃は覚悟を決めた眼でリョウを見た。
その眼はまるで、肉食動物が獲物を目の前にしている時のようなギラギラとした眼である。

「亮くん……貴方、ガンプラは持ってるの？」
「い、一応持ってはいますけど……」

桜は亮の肩をガシッと掴み、スゴいオーラを放ちながら聞いてきた。
そのオーラはまるでニュータイプが放つプレッシャーのような凄みを持っている。

「なら明日持って来て！　練習試合は……明日だから」
「ちょっ、明日って急すぎですよ！　それに操作とかわからないですし!!」
「操作方法とか今から教えるから叩き込みなさい！　いいわね!!」
「……はい」

亮は観念し、大人しく従うことにした。
ガンプラは桜のを借り練習は１９時まで行われ、帰る頃にはヘトヘトになってしまっ

ていた。

「大丈夫？」

「……桜先輩はスパルタ過ぎだ」

「ごめんね。でも数時間であそこまでの機動ができるなんてスゴいよ」

スパルタで行われた練習の成果で、亮の機動はかなり良くなっていた。
もう少し時間があればよかったのだが、運命の練習試合は明日。
これ以上はさすがに無理であった。

「それじゃボクはこっちだからまた明日。ガンプラは忘れないようにね」

桜は学校を出てすぐに別れ、今は晃と愛と三人で帰っていた
晃とも別れると亮は愛と二人きりになってしまう。
話すことなくしばらく歩いていると、いきなり愛が立ち止まる。

「どうかしたのか？」

「明日……練習試合勝ったら、なんでも言うことを一つ聞いてあげる」
「はぁ!?」

立ち止まった愛を心配してか亮も立ち止まりそちらを向くと、いきなりそのような発言をされて亮は驚いてしまう。

「それじゃ私はコッチだから」

爆弾のような発言をして愛はさっさと行ってしまい、一人残された亮はしばらくその場に固まっていた。

しばらくしてから回復し家に着いた亮は夕飯を食べ、風呂に入ると部屋でＧＰベースを設定してから机の上に大事に飾っているヅダを見る。

「まさかこんなことになるなんてな……明日は頼むな」

ヅダを撫でてから亮は就寝するために灯りを消した。

決戦は明日、素人のリョウが作ったヅダだが愛情は負けていないと思いながら眠りに

ついた。
そして翌日、亮はＧＰベースとヅダを大事そうに持って学校に向かう。
途中出会った人に挨拶をしてから普段通り学校で授業を受け、運命の放課後になったのだがこんな日に限って亮は担任に呼ばれ、大幅に遅れてしまっていた。
「あぁもう！　今日に限って……遅れてすみません！」
模型部の部室である扉を開けると既にバトルは行われていた。
相手側のガンダムキュリオスと桜のトールギスⅢのバトルで、見るからに圧されている状態であった。
「亮くん！　遅いよ!!」
「ごめん！　で、それより現状は？」
「ボクも愛も負けちゃって、先輩も……」
「先輩……」
キュリオスは勝負を決めようとトランザムを発動し機体が赤くなる。それに対して

トールギスⅢはヒートロッドを横に振るがかわされ、懐に入り込まれてしまった。
　キュリオスのシールドの先端が開きトールギスⅢを捕らえると、シールドニードルが飛び出しその身体を貫いた。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

　システム音声と共にプラフスキー粒子が解放されフィールドは光の粒となり消滅する。
　フィールドには勝者となった相手のキュリオスと、無惨な姿のトールギスⅢだけが残された。

「ハッハッハッ！　これで終わりかな～？　やっぱりたいしたことないじゃん!!」
「慢心はダメです。ですが……ソチラは全員敗北ということで……おや？　人が増えていますね。ソチラの方も部員ですか？」
「亮くん！　間に合ったのね!!」
「遅れてすみません。俺は矢倉　亮、練習試合なのに遅れてすまない」
「別に構いません。時間が勿体ないので早く始めましょう。最後の相手は私、西河　澪

です」

「わかった。始めよう」

筐体を挟み、亮と相手の西河　澪は向かい合った。

『Ｐｌｅａｓｅ　Ｓｅｔ　Ｙｏｕｒ　ＧＰＢａｓｅ』

バトルシステムが起動するとシステム音声が操作を促し、亮と澪はＧＰベースを筐体にセットした。

筐体からキラキラと輝くプラフスキー粒子が放出されフィールドを形成し、何もなかった筐体の盤面が宇宙となる。

『Ｐｌｅａｓｅ　Ｓｅｔ　Ｙｏｕｒ　ＧＵＮＰＬＡ』

亮はヅダをセットするとバトルシステムがサーチ光でガンプラを包み込む。

光が広がり亮の回りにガンプラを操縦するコンソールが出現し、迷うことなく操縦桿を掴む。

「見るからに貴方のヅダは素組ですね。綺麗に仕上げていますが、そのような機体で私とバトルとは……馬鹿にしているのですか？」

澪は色々と改造されているシナンジュをセット。それは見るからに強いと判断できる出来映えであった。

「確かにこのヅダは素組だよ。だがな……先輩たちのよりも、アンタ達のガンプラよりも性能が劣るだろうな。だけど……負ける気はしないんだよ。ヅダはもうゴーストファイターじゃないんだからな」

「笑わせてくれますね。現実を教えてあげましょう」

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｓｔａｒｔ』

「矢倉　亮、ヅダ、出撃する！」

「西河　澪。シナンジュ・アナザー、出ます」

カタパルトからヅダとシナンジュが発進し、バトルフィールドである宇宙に飛び出した。

勝利の栄光を模型部に！

宇宙に飛び出したヅダに亮は興奮し、場違いにも嬉しく思っていた。
愛するヅダを自分の手で操れることがとても嬉しいのだ。

「っと集中しないとな。この戦いに模型部の未来がかかっているんだし」

亮のヅダは両手で１３５㎜対艦ライフルを持ち、左肩のシールドにシュツルム・ファウスト、脚部にヒート・ホークとザク・マシンガン、両腰にザク・マシンガンのドラムマガジン装備している。
周囲を警戒しつつ進んで行くと、前方からビームが迫ってきた。

「うわっ！」

慌てて回避すると、ビームが来た方向から澪のシナンジュ・アナザーがビーム・ライフルを構えているのが見えた。

シナンジュは赤い彗星の再来と呼ばれるフル・フロンタルの愛機で、驚異的な性能を持っているＭＳだ。

「今の射撃をかわしますか。基本的なことは出来るみたいですね」

慢心……いや、この場合は余裕であるのだろう。

最初のビーム・ライフル一発で簡単に終わらせられるだろうと澪は思っていたのだ。

いくら実力があるからと言っても、それは相手にとって失礼じゃないかと食い付きそうになるが我慢した。

実力で見返してみせる……亮はそう考えたのだ。

澪が余裕そうにして油断している、それが経験値に圧倒的差がある亮にとって唯一の勝機なのかもしれない。

「この程度のことで返答をする余裕もないのですか？」

「そんな訳ねーだろ。その鼻っ面をへし折ってやる」

「いいでしょう。出来るものならやってみなさい…出来るもの、ならね」

澪のシナンジュはビーム・ライフルを連射してくるが、亮のヅダはそれをかわしながらチャンスを窺った。

この距離なら、ヅダはシナンジュの攻撃をかわし続けられる。

「ちょこまかと……いい加減当たりなさい欠陥兵器！」

「当たるかバカ」

その場の射撃ですぐに仕留められると思っていたのだろうが、亮のヅダはかすり傷一つ負わずビーム・ライフルを避け続けた。

そして僅かな隙を見つけ、その瞬間に１３５㎜対艦ライフルを初めて発射する。

「やったか？」

１３５㎜対艦ライフルは見事にシナンジュに当たるが、爆煙で撃墜確認はできなかった。

だがこの一撃で終わるとも思えず警戒を続けると爆煙が晴れ、そこにはシールドを構えているシナンジュがいた。

「タイミングは中々でした。ですが……その程度の火力でこのシナンジュ・アナザーを貫けるとでも?」
「想定以上に堅い訳だな。１３５㎜対艦ライフル食らって無傷とか勘弁しろよ」

艦に対して有効打を与える対艦ライフルをＭＳに対して使ったのだ。
当たればたまったものではないはずなのに、それをシールドで難なく受け止めたことに流石に驚きを隠せなかった。
この対艦ライフルがダメならヅダの最大の武器である〝速さ〟を生かした攻撃しかない。
だがその場合、どれぐらいの負荷まで平気なのかまったくわからないのだ。

「どうしました?　来ないのなら……こちらから行きましょう」
「ッ!!」

澪のシナンジュ・アナザーも速かった。
機体各所のスラスターを使い、隕石を蹴りながらコチラに迫ってくる。迷っている暇

はなかった。
亮は決意して１３５㎜対艦ライフルを放棄しヅダのブーストを解放すると、瞬時に亮のヅダは周りに熱気を纏い背中のバーニアを使い加速した。

「なっ！　速い!?」

これこそヅダの強みであり、弱点でもある真のブースト性能だ。
機体への負荷はとてつもなく、背中に搭載されている土星エンジンはある数値を越えると暴走して自壊する危険性が高い。
だが逆に、その数値の内ならば問題はないということでもある。

「どうした？　お前のシナンジュは欠陥兵器にも追い付けないのか？」
「この私に……欠陥兵器の分際で嘗めるな!!」

シナンジュ・アナザーの後ろに回り込むとヅダは蹴りを入れてから距離を取り、ザク・マシンガンを装備し挑発をしてから背を向け、高速機動に誘い込む。
まさかヅダに蹴りを入れられると思ってなかった澪は、その挑発に乗ってしまい最大

速度でヅダを追いかけた。

「頼む……持ってくれ、ヅダ……」

追ってくる機体こそ違うが、これはＭＳ（エムエス）　ＩＧＬＯＯ（イグルー）のデュバル少佐と同じような行動であった。

ヅダの性能の証明、そして模型部のために……ヅダは加速し続けた。

「バカですね……このまま進み続ければエリアオーバーで終わりです」

「知ってるさ。だから……こうするんだよ！」

ヅダは減速することなく急激な方向転換をし、シナンジュ・アナザーに突撃する。

突然のことにビーム・ライフルを構えようとするが、高速機動中のため照準がブレてヅダの右足だけを吹き飛ばす。

この一撃で撃墜されないのであれば、次はこちらの最大の一撃の番だ。

「な!?」

「勝利の栄光を模型部に！」

左肩のシールド・ピックを展開してシナンジュ・アナザーに突き刺し、減速することなく進み続ける。

「まだだ!!」

しばらく進むと左腕は肩の付け根からもげてしまい、機体はシナンジュの脇を通り抜けてしまう。しかしすぐに反転し、至近距離でザク・マシンガンを撃ち続ける。

ザク・マシンガンは次々と命中し、そして……とうとうシナンジュ・アナザーは爆発した。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

システム音声が鳴り響くと、プラフスキー粒子が解放される。

フィールドの上にはヅダの左肩から先が突き刺さり、至近距離でザク・マシンガンを受け続け敗北したシナンジュ・アナザーと、右足と左腕を失いボロボロになりながらも

勝利したヅダの姿だけ残された。

「私の……シナンジュ・アナザーが……負けた……？」

「……勝った、のか？」

バトルが終わり、亮は勝てたことが信じられないのか操縦桿を持っていたポーズのまま固まっていた。

桜に晃、愛も信じられないのかお互いに顔を見合せ、わぁ！　っと歓声をあげてから二人が亮に抱き付いた。

「やったじゃないの亮くん！」

「本当にヅダでシナンジュに勝ってしまうなんて信じられないよ！」

「ちょ、苦しい！　苦しいから!!」

亮はもみくちゃにされ苦しそうにしてしまう。

愛は二人より遅れて亮に近付く。

「……部を、救ってくれてありがとう」

愛はその瞳を潤ませて亮に抱き付き、その様子を見ていた澪は悔しそうにしながら奥で腕を組んでいた男子生徒に近付き頭を下げる。

「部長……すみません。黒聖学園の名に泥をつけてしまいました……どうか私に退部をご「その必要はない」部、長……？」

「これでお前も自分の弱点がわかっただろう。それを以後に生かせばそれでいい。それに……彼は興味深い。勝とうが負けようが収穫はあった」

「……ありがとうございます部長」

しばらくして解放された亮は笑顔で澪に近付き、右手を突き出した。

「何のつもりですか？　敗北した私に……」

「何のつもりって……握手だよ。お前、強かったぞ」

「……ハァ。次は負けませんから」

澪は亮と握手して、蒼城学園の黒聖高校との練習試合は４戦１勝３敗という結果で幕

を降ろしたが、亮の活躍によってなんとか勝ち取った1勝は大きく、部の存続も決まった。

黒聖高校が帰って行くと、ようやく一息つけた。

「よし、今日は打ち上げだよ！　近くの食べ放題に行こう！」

「そんなお金どこにあるんですか？」

「部費から出すから問題なし！」

桜と晃が騒がしくしている中で、亮は机の上に寝かせた愛機のヅダを見た。

バトル前は新品同然の如く綺麗であったのに、今はその面影はなくボロボロである。

しかし、今はそれが誇らしく思える。

「……お疲れ様、ヅダ。今はゆっくりと休んでくれ」

敵の急所に……噛み付いてみせます！

黒聖高校との練習試合から数日、蒼城学園模型部は今まで通りの活動を続けていた。亮の活躍により廃部の話は亡くなったのだが、部員の数が少ないのも問題となっている。

「まぁ今は……はいヅダの修理終わったよ」

「おお！　ありがとう!!」

晃の手から元通りに修理されたヅダが手渡された。

あの練習試合の翌日、落ち込んでいた亮を見つけた模型部のメンバーは理由を聞いたのだが……ボロボロになってしまったヅダを修理することが出来なかったため落ち込んでいたのだ。

その際に晃が修理してあげると申し出て、亮は申し訳なく思いながらもお願いしていた。その修理がついに終わったのだ。

「亮、よかったね」
「本当だよ……俺のヅダが元通りに……」

亮は嬉しさのあまりに泣いていた。
原作通り爆発しなくてよかったとの安心感、元通りの姿になったことの嬉しさの2つが今更ながら重なったのだ。

「全員の機体修理が完了。ならやることは1つね！」
「バトル……ですね。先輩は本当にバトル好きですけど、修理する僕の身にもなってくださいよ」

桜が笑顔で燃えていると、部室であるプレハブのドアが少し開き中の様子を窺う人物がいた。
全員が首を傾げていると、亮がドアに近づいて全開にする。すると覗いていた人物は驚いて尻餅をついてしまった。

「あ、君は同じクラスの……たしか神通　志織さんだっけ？」

「は、はい……えっと、その……失礼します……」
「ちょっと待てって。ここを覗いていたってことは興味があるんだろ？　逃げなくてもいいって」

立ち上がって去ろうとする志織の手を掴み、中に入ると三人は未だに首を傾げていた。

「ねぇ亮くん。あの短時間でなにがあったの？」
「なにって普通に連れて……って顔真っ赤!?」
「あうあうあう……」
「手、だと思う」

亮は最初は何を言ってるんだ？っと首を傾げて志織を見ると、志織は林檎のように顔を真っ赤にしていた。
亮は手を握っただけでなぜこんなに顔を赤くするのかわからず、愛に言われ手を離すと少しだけ落ち着いたようだ。

「で、彼女が部室を覗いていたの？」
「他にいなかったし多分そうだと思いますよ？」
「ふーん」

桜はジーっと志織を見ているのだが、その視線に志織は脅えて震えていた。
その様子を見て可愛いと思ってしまったのが２名（亮と晃）ほどいたのだが、これは置いておく。

「なにこの小動物的な娘！　可愛いんだけど!!」
「あう～!!」

訂正、３人であった。
桜はぎゅーっと志織のことを抱き締め、志織は顔を再び顔を真っ赤にして逃げようと幼稚にももがく。
晃と亮はお互いに頷きあって、桜を志織から引き剥がすべく協力した。

～１０分後～

無事に引き剥がすことには成功したが、晃と亮はボロボロになり疲れ果てていた。
志織は愛に紅茶と御菓子を出され、オロオロとして視線を御菓子、晃と亮、愛、桜と彷徨(さまよ)わせている。

「大丈夫だよ。飲んで落ち着いて、ね？」
「は、はい……あ、美味しい……」

愛に言われて紅茶を一口飲むと、パァと明るい笑顔になる
それを見て安心した亮は立ち上がると志織に近づいた。

「落ち着いたところで本題いいか？」
「は、はい……」

亮が話しかけるとピシッと背筋を伸ばし、亮は困ったように晃を見るとニコニコと笑顔であった。
愛の方を向くとすでにチョコレートを食べていてこちらを見てすらおらず、桜は……

先ほどの1件で論外、見ることすらしなかった。

「模型部を覗いていたってことは入部したいのか？」

「あの……そうなんですけど……その、いいのか悩んでて……」

「模型部は新入部員大募集中よ！　是非とも今か「話がややこしくなるから先輩は黙っててください」はーい……」

食い付いてきた桜を晃が止めて続きをどうぞと視線で亮に訴え、亮は溜め息をついてから頷く。

「やる気があるなら入部は構わないみたいだぞ？　……って言うか俺、まだ入部届だしてなかった」

「あ、亮くんの入部届なら偽造してだしといたよ？」

「何やってるんですか！　入部するつもりだから別によかったですけど……」

「あ、あの……なら、私も……入部します……」

すでに書いていたのか志織は入部届を取り出し、亮に渡したので一応受け取ると副部

長の桜に渡した。

「はい受け取ったよー。それじゃ……バトルしようか！」

「いやいやいきなり過ぎますよね!?」

受け取ってすぐにバトルをしようとする桜に呆れながらも、今回はするしかないかと志織を見たのだが。

「……意外にやる気な訳な」

「へぅ!?　す、すみません!!」

志織はケースからガンプラを取り出しており、両手で包むように持っていた。

そのガンプラは変わっており、一見すると戦車だ。

「ヒルドルブ……ね。亮くんもだけど、最近はＩＧＬＯＯが流行ってるの？」

「どうなんでしょ？」

志織はモジモジとした様子で亮を見て、亮はなぜかキラキラしていた。
この二人は互いに同志を見つけたといったような目をしている。

「この前の……練習試合観てて、その……私以外にも、いるんだって……それで……」
「なるほどな。ならタッグ戦といくか！」
「は、はい！」

構わないですよね？っと視線で桜を見ると、ニヤリと音が付きそうな笑顔で頷いた

「いいわよ！　私のパートナーは……晃くんしかないわね。愛ちゃんはチョコレート食べてるし」
「僕はどちらかといえばビルダーなんですけど……」
「つべこべ言わない！」

そう言うとガンプラバトルの準備を進め、プラフスキー粒子がフィールドに広がる。
今回のフィールドは砂漠だ。
４人はそれぞれ自分のガンプラをセットし、戦闘準備が整った。

「トールギスⅢ、獅子骨　桜、行くわよ！」
「山根　晃、ストライク、ＩＷＳＰで出撃します！」
「矢倉　亮、ヅダ、出撃する！」
「神通　志織、ヒルドルブ改、出します！」

空中に出現したカタパルトから次々と勢いよく出撃するが、ヒルドルブだけすぐに落下してしまう。が、着地の瞬間に一瞬だけ浮遊して無事着陸をした。
その隣に着陸した亮は驚いていた。
ヒルドルブはモビルタンクと呼ばれる独自のカテゴリーで、スラスターなど一切ないはずなのだ。

「その、改造して……少しだけならスラスター使えるように……したんです……」
「そうなのか……さて、ＭＳ　ＩＧＬＯＯのＭＳの実力を見せてやるとするか」
「は、はい！　敵の急所に……噛み付いてみせます！」
「その意気だ！」

ヅダは砂漠を走り出し、ヒルドルブは走行してその後に続いた。
部内バトル……亮＆志織ＶＳ桜＆晃の勝負の結果はいかに！

エンジンカット！

亮のヅダは志織のヒルドルブと別れ、単機で砂漠を走っていた。

「走りづらいな……かと言って、飛んでいくのもな」

ヅダの真価は宇宙でこそ発揮でき、地上ではそこまで性能を生かせないのであろうと亮は考えている。

警戒しつつ進んで行くと、すぐにトールギスⅢとストライクを発見した。

「見つけたわよ！　さぁ、私とバトルしましょうよぉぉぉぉっ!!」

「先輩はア○ンビーですか!?」

「機体はトールギスⅢだけどね」

桜は叫びながらトールギスⅢはメガ・キャノンを、ストライクは１１５㎜レールガンを同時に発射してきた。それをヅダは回避してからザク・マシンガンを発射しつつ後退

する。

トールギスⅢは火消しの風ことゼクスの搭乗機で、Ａ．Ｃ．年代における戦闘用ＭＳ全ての原型になった機体の３号機。

そしてストライクはＳＥＥＤの主人公、キラ・ヤマトの劇中前半機体で、バックパックを換装することで多様な戦場に対応する汎用機だ。

晃は今回、統合兵装ストライカーパック（Ｉｎｔｅｇｒａｔｅｄ　Ｗｅａｐｏｎｓ　Ｓｔｒｉｋｅｒ　Ｐａｃｋ）の略称であるＩＷＳＰを装備している。

「この、逃がさないわよ！」

「ちょっ、待ってください！　あっちにはヒルドルブが……」

逃げていくヅダをトールギスⅢは追い掛け、ストライクはそれを止めようと右手を伸ばすと右肩を１発の砲弾が貫き、吹き飛ばした。

「晃！」

トールギスⅢは反転すると攻撃を気にしながらストライクを回収し、後退していく。

そこにさらに1発の砲弾が飛んでくるが当たらず、ヅダはそれを見て動きを止めた。

「す、すみません……確実に仕留めれませんでした……」

「いや、充分だよ。ナイスな狙撃だった……早いうちに移動して次のポイントに行ってくれるか？」

「り、了解です！」

後退していった方向を見ると、ヅダは再び走り出す。

早急に追撃し終わらせるのが得策だと考えたのだ。

結果的にすぐに発見することが出来た。

右腕がないストライクだけを。

「ストライクだけ？　……まさか！」

「その発想は早かったけど……遅かったね。最低限、ここで足止めさせてもらうよ！」

ストライクは9．1メートル対艦刀を持つとヅダに急接近し降り下ろした。

ヅダはすぐさま持っていたザク・マシンガンを投げ捨ててヒート・ホークで受け止め

るが、ストライクに蹴られ再び距離ができる。
亮はすぐに志織の援護に行きたかったが、今背を向けると確実に仕留められてしまう。

「なら……手早く倒させてもらうぞ！」
「そう簡単にはいかせないよ！」

ヅダとストライクが戦い始めた少し後で、ヒルドルブとトールギスⅢの戦いが始まろうとしていた

「こそこそ、こそこそ……正々堂々勝負しなさい！」
「え、遠慮させてください！」

トールギスⅢに見つかったヒルドルブはすぐにスモークを散布し、タンク形態のまま曲射榴弾を発射をしながら逃げ始めた。
遠距離戦なら充分に戦えるのだが、流石に近距離戦になると圧倒的にヒルドルブが不利になる。

「こ、来ないでくださーい!」

後退しつつクルクルと回りながら攻撃を回避、曲射榴弾を撃ち続けるもトールギスⅢには当たらず、ついに接近を許してしまう

「この距離ならソレはもう必要ないでしょ!　だから……切り落としてあげるわ!!」

「くぅっ!?　だ、だけどまだ終わっていません!!」

ビームサーベルで３０㎝砲は切り落とされるも、すぐにモビル形態になると2度、３度とショベル・アームユニットで殴った。

「この!　このぉ!!」

「いい加減に……しなさい!!」

ヒルドルブはショベル・アームユニットで殴り続けるも、トールギスⅢがいつまでもそれを許す訳もなくビームサーベルで斬り付けられ、すぐに距離が空けられる。

「さて、貴女に時間をかけるわけにはいかないから……トールギスの最大火力で終わらせてあげるわ!!」

トールギスⅢが右肩のメガ・キャノンを構えると砲身が展開し、２割増しの最大出力モードになる。

「まだ……まだ終われません！　それにきっと……来てくれるはずです！」
「ならその希望を抱えて……消し炭になりなさい！」

ヒルドルブは諦めずにザク・マシンガンを向けて発射しようとするが、それに構わずメガ・キャノンの最大出力モードが放たれようとした瞬間……トールギスⅢの右肩が爆発した。

「え？」
「本当に、来てくれたんですね……」

トールギスⅢが振り向いたそこには、ブーストを解放し熱気を纏って凄まじい速度で接近してくるヅダの姿があった。

「うおぉぉぉぉぉぉっ！」

「く！　このぉ!!」

トールギスⅢはヒートロッドを横に振るうも、ヅダはクルリと回転して紙一重でかわしシールド・ピックを展開。そのままの速度で腹部に突き刺した。

「エンジンカット！　……志織!!」

「は、はい！」

「え？　ちょ、ちょっと!?」

ヅダはエンジンカットをした瞬間に熱気が消えるもそのままの速度でトールギスⅢを放り投げる。そしてヒルドルブは構えていたザク・マシンガンを発射してトールギスⅢを蜂の巣にした。その瞬間にバトルは終了し、プラフスキー粒子が解放される。

「な、なんで此方に追い付いたのよ！　って言うか晃、なんで足止め出来なかったのよ!!」
「い、いやー流石にあの損傷で足止めはやっぱり無理だったと言うか……」
「いや、あれは足止め以前の問題じゃないか？」

実はヅダとストライクの戦いは呆気なく終わっていたのである。
晃の気迫は凄かったのだが……右腕を失ってバランスが崩れていたストライクは砂に足を取られてこけてしまい、そこにヅダのヒート・ホークが降り下ろされ決着がついたのだ。

「うぅ……晃を頼りにした私が馬鹿だったわ……」
「先輩……それ、結構傷付きますから……」

その２人の様子に苦笑いをしていた亮と志織は控え目にハイタッチをした。
志織は恥ずかしそうにしていたが、やっぱり嬉しそうにしていた。

「亮くん、お客さん」

チョコレートを食べ終わっていた愛が帽子を斜めに被った銀色で長髪の少女を連れて来たのを見て、亮は時計を見ると「もうそんな時間だったんだな」っと呟く。

「悪いな美桜。待たせたみたいで」
「いや、そんなに待ってないから大丈夫だよ、兄さん」
「「兄さん!?」」

桜と晃が驚き、志織と愛と亮にいたっては首を傾げていた。
美桜と呼ばれた亮の妹は、その様子を帽子を深く被り眺めていた。

貴様には極限の絶望をくれてやろう！

模型部にやってきた亮の妹である銀髪の少女、美桜。
全員が驚き、髪の色の違いなど疑問を持ったのだが「これから用事があるので明日説明しますよ」っと言って、亮と美桜は帰っていった。
そして翌日の放課後、メンバーは再び部室に集まっていた。

「さぁ説明してもらうわよ！　って言うか……なんでこの娘もちゃっかり交ざってるのよ!!」

桜がビシッと指を指すその先には、椅子に座っている愛の膝の上に座り御菓子を食べている美桜の姿があった。

「……駄目なのかい？」
「駄目じゃないわよ！　むしろ可愛い娘は大歓げ……じゃなくて!!」
「先輩……本音漏れてますよ？」

苦笑いで桜にそう言った晃は1人、作業机で昨日のバトルで損傷した4機の修理を行っていた。

一番損傷が大きいのが右腕が吹き飛んだ晃のストライクで、次が志織のヒルドルブと桜のトールギスⅢである。

逆に損傷が少なかったのは亮のヅダであるのだが……負荷のせいか関節に問題があったので、結局修理はしなくてはならなかった。

「で、でも本当に亮さんの妹さんなんですか？　髪の色も違いますし……」

オドオドとしながら全員にお茶を淹れ配り終えた志織がそう言うと、亮は首を縦に振り肯定する。

「美桜は俺の妹だよ。ただし……義理のって言葉が付くんだけどな」

「義理の……ですか？」

「ああ。俺が産まれてすぐに俺を産んでくれた母さんが亡くなって、父さんが再婚した

今の母さんが連れてたのが美桜なんだよ」
「そう言うわけさ」

美桜は志織が淹れてくれたお茶を一口飲むと、「あちっ」っと言い舌を出してからフーフーと息を吹き掛けて冷まそうとする。
その様子を見て顔を赤くして、興奮している息を荒くする変態（桜）が1名いるのだが……この際無視しておくことになった。

「亮さんって、けっこう……大変なんですね」
「いや、そうでもないぞ？　美桜はけっこうしっかりしてるしな」
「兄さんがだらしないだけじゃないかな？」
「けっこう厳しいんだね……はい、ヅダの修理と補強終わったよ」

歳上ばかりのこの場所で普段通りの美桜に亮はため息をついていると、修理と関節の補強を終えたヅダが晃の手から渡される。

「悪いな晃。修理と補強を頼んで」

「バトルは不得意だからね……これぐらい役にたたないといけないから」

渡されたヅダをあらゆる方向から見ていると、亮は聞こうと思っていた事を思い出す。

「そういえば模型部の部長は見たことないけど……どうなってるんだ？」

「ぶ、部長かい？　部長は、その……先輩お願いします」

「なんでそんな事を私に頼むのかしら……まぁいいけど。それよりティッシュ貰えないかしら？」

「……確かにまずはソレを拭いた方がいいですね」

晃は部長について説明し辛そうにして、桜に説明を頼んだのだが……美桜に興奮していた桜はとうとう鼻血を出していた。

ティッシュを受け取った桜は鼻血を拭き、なぜか愛をチラリと見てから興奮をおさめるため深呼吸をする。

「部長は3年生で……滅多に学校に来ないのよ」

「病弱とかなんですか？」
「違うわよ。部長は……変わり者なのよ」
「変わり者？　それってどういう」

亮は首を傾げてから詳しく聞こうとした瞬間、部室のドアがバンッ！　と大きい音を立てて開かれる。
そこに居たのは漆黒のマントに身を包み、素顔を仮面で隠した見るからに怪しい変態であった。

「久しぶりだな、我が下僕ども！」
「ふ、不審者だ！　志織、急いで１１０番……って気絶してる!?」

いきなりの大きい音にビックリしたのか志織は立ったまま気絶し、亮は自分のスマホを取り出して警察に電話しようとするが止められる。

「亮くん……あの人が模型部の部長で、愛のお兄さんである御影　双雲先輩だよ」
「……嘘、だろ？」

未だに部室の入口で高笑いしている双雲を見て、亮は美桜の手を取ると窓を開けた。

「今日までお世話になりました」

「ま、待って亮くん！　お願いだから逃げないで!!」

「そうよ！　受け入れるのよ!!」

「嫌だぁぁぁぁ！　離してくれぇぇぇぇ!!」

「ヤレヤレだね」

窓から逃げようとする亮を桜と晃が取り押さえ、美桜はその現状に肩をすくめていた。

愛は気絶した志織をソファに寝かせ、双雲を見る。

「お兄ちゃん、お帰りなさい」

「ただいまと言わせてもらおうか！　そして新しい下僕がいるようだな!!　まぁいい……貴様達に土産があるのだ」

双雲は高笑いをしたまま中に入ると亮と志織を見てそう言い、旅行鞄を開け中を漁り出す。

逃げようとしていた亮は晃と桜２人がかりで縄で椅子に拘束され、美桜はもう定位置と言わんばかりに再び愛の膝の上に座っていた。

「まず貴様には……鞭だ！」

「これで１０個目なんだけど？」

「貴様にはボールギャグ！」

「あ、あはは……」

「新たな下僕である貴様達には……三角木馬！」

「それどこから出した!?」

双雲はそれぞれにお土産を渡すと、筐体に近付きニヤリと笑い亮を見る。

「貴様には今から私が入部テストをしてやろう！　感謝するのだな!!」

「なんでだよ!?」

いきなりの発言に驚き、双雲の指示で縄を解かれて亮は自由になる。

「部長は言い出したら聞かないからやるしかないよ……亮くん頑張って」

「俺は昨日もやって連戦なんだけど……」

「連戦など大会が始まれば何時ものことだ！　さぁ、始め……なぜ我が妹は新たな下僕の隣にいる？」

愛は何時の間にか美桜を1人で座らし亮の隣に立ち、その手には自身のガンプラを握り締めていた。

どうやら愛もこのバトルに参加するようだ。

「お兄ちゃんのガンプラ相手に1人で戦うのは、まだキツいと思う。志織ちゃんも気絶してるから私が代理をする」

「いや、でも……いいのか？」

亮が悩んでいると、双雲は再び高笑いする。

「妹が私に反逆するか。悦(こころよ)いぞ、悦いぞー！　さぁ始めようでないか!!」

双雲がバサッとマントを翻すと同時にバトルシステムが起動する。
バトルシステムが決めたフィールドは平坦でサイバーティックな場所であった。

「まったく……模型部に入ってから忙しくて敵わないな。今回も頼むぞ、ヅダ」

亮はいつも通りヅダをセットし、隣に立っている愛は無言でアストレイゴールドフレーム天ミナをセットする。
そして双雲がセットしたガンプラに亮は驚いた。

「嘘だろ……？」
「ハッハッハ！　貴様には極限の絶望をくれてやろう!!」

双雲がセットしたガンプラ……それはエクストリームガンダムであった。
そのエクストリームガンダムは、すっぽりと全身をパワードスーツのような物で身を包みこんでいる。

「あんなのを相手にしないといけないかよ……」
「大丈夫。私と矢倉なら勝てる」
「どこからそんな自信が出てくるんだか」

亮は1度笑ってから気合いを入れ直し、深呼吸をする。

「矢倉　亮、ヅダ、出撃する！」
「御影　愛……アストレイゴールドフレーム天ミナ、行きます」
「エクストリームガンダム、タキオンフェイズで出るぞ!!」

バトルが開始され、空中に出現したカタパルトから各機は飛び出していく。
こうして亮の第三戦目が幕を開けるのであった。

最後の最後まで……敗北するまで諦めるつもりはねーよ

フィールドに降り立ったヅダとアストレイゴールドフレーム天ミナ。
正面を見ると、1本の柱の上にエクストリームガンダム：タキオン・フェイズが巨大な剣――タキオンスライサーを片手に立っていた。

「やっぱりでかいな……アリなのかアレ？」
「ルール上は問題ない……はず？」

隣に立つアストレイゴールドフレーム天ミナの愛に尋ねると疑問系で返され、溜め息をついてから笑い声をあげるエクストリームガンダムを見る
「ハッハッハ！　さぁ、私を楽しませるのだぞ!!」

そう言ってタキオンスライサーを振ると衝撃波がヅダとゴールドフレームを襲う。しかしそれを共に回避し、ヅダは対艦ライフルを放つが難なく防がれてしまう。
ゴールドフレームもトリケロス改に内蔵しているビームライフルを放つ。それも命

中するが、やはり目立ったダメージは与えられなかった。
エクストリームガンダムは理論上にのみ存在する、その名の通り極限のガンダムである。
歴代作品の主役機を融合させたようなシンプルな見た目だが、極度に特化したパワードスーツのようなモノを身に纏う。
タキオン・フェイズはそのパワードスーツのようなモノの1つである。
「堅すぎだろ……」
なんでこうも相手にするのは堅い相手ばかりなんだよっと思いながら、再び対艦ライフルを放つ。
「貴様は私を満足させる程のSではないようだな。ならば、私が真のSを見せてやろう！」
「ッ!?　速い!!」
エクストリームガンダムは動き出すとすぐに間合いを詰め、タキオンスライサーがヅ

ダに降り下ろされる。
周りは終わったかと思ったが、双雲はニヤリと笑った
「反射神経はいいようだな」
「お褒めの言葉どーも」
ヅダは紙一重でタキオンスライサーを避けていた。
亮は考えるより先に操作して、ギリギリ回避したのだ。
「隙有り」
エクストリームガンダムのすぐ後ろに突如ゴールドフレームが姿を表し、エクストリームガンダムの関節を狙いランサーダートを発射する。
ランサーダートは深々と突き刺さり爆発した。さすがに装甲の無い関節には攻撃が通用するようだ。
「爆発とは……我が妹ながら中々のドS！」

「オマケだ！　これも喰らえ!!」

ゴールドフレームに気をとられ、振り向いてしまったエクストリームガンダムの頭部にヅダは対艦ライフルを突き付け零距離発射する。

「ハッハッハ！　愉(たの)しいなぁ！　悦いぞ、悦いぞー!!」

対艦ライフルの一撃はエクストリームガンダムの頭部を半壊させただけに留まり、ヅダはすぐに距離を取ろうとするがタキオンスライサーで対艦ライフルを真っ二つに切り裂かれてしまう。

ヅダは対艦ライフルを投げ捨てると、ゴールドフレームと合流する。

エクストリームガンダムは頭部を半壊、左肩を損傷している程度であった。

「ったく……先が長いな……」

「なら諦める？」

「冗談言うなよ。俺は最後の最後……敗北するまで諦めるつもりはねーよ」

「そう言うと思った」

各々が武器を構え直し、互いにスラスター全開で接近してぶつかり合おうとする瞬間……プラフスキー粒子が解放される。

全員が不思議に思っている中、部室には先程まで居なかった人物が増えていた。

彼女がバトルを強制終了させたのだ。

「真剣勝負に横やりを入れるのは好きではないのだが……下校時間なのでな。前回は部の存続が関わっていたから多目に見たが、今はそうではない」

彼女の名前は大神　冬花。

この蒼城学園の国語教師で、学園内で一番逆らってはいけない人物でもあり……模型部の顧問だ。

冬花の噂は数知れず、いずれも恐ろしい噂ばかりであった。

「ハッハッハ！　大神教諭、久しぶ「フン！」ゴファ!?」

「殴り飛ばした!?」

冬花は双雲をいきなり殴り飛ばした。吹き飛ばされた双雲は部室のドアを破壊し、外でピクピクと痙攣している。

その様子に亮は唖然となっていたが、慣れているのか桜や晃は「またかー」っと言った感じの様子であった。

「ま、まさに……究極の……ド、S……」

「まったく……あまり面倒をかけさせるな。貴様達は早く下校準備をしろ」

「は、はい！　ほら急いで!!」

そう言って双雲は気絶してしまう。

冬花に言われ全員が慌てて下校準備を始める中、亮はチラリと愛を見た。

亮はあんな変態であるが、一応兄である双雲を心配しているんじゃないかと思っていたがそうでもなく、下校準備を終えていつも通りチョコレートを食べ始めていた。

「さて、下校準備を終えたようだな？　ならもう帰るように。あぁ……あの馬鹿は学校側で用があるから心配しなくていいぞ」

誰もが冬花の一撃を喰らった事が心配なのだと思ったが、そんな素直な事を言えるはずもなく、そのまま下校した。

ちなみに気絶していた志織は目を覚ます様子がなかったので、少し恥ずかしく思いつつも仕方なしに亮が背負い、家まで送り届けた。

翌日、変態がボロボロな姿で学校から走り去って行ったらしく、それを聞いた亮は溜め息をついていた。

兄さんが大好きな妹なだけだよ

「カラオケ？」
『うん。今日は部活が休みだし、皆で遊んでみないかって先輩が』
「なるほどね」

部活が休みになった日曜日の朝、亮はＰＣで人気の某ブラウザゲームをしていた。すると着信メロディーが流れたので電話に出ると晃にそう言われた。

『それでどうかな？』
「特に用事もないし行くかな。何時集合なんだ？」
『１０時頃だね。集合場所は模型店の前で……それと先輩が出来れば美桜ちゃんもって……』
「あーわかった」

桜は美桜の事が可愛くて、懐いて欲しいらしく色々な事をしているのだが、全て失敗

している。
亮は少し気になり、美桜に桜の事をどう思っているのか聞いてみたのだが、「嫌いじゃないよ。けど、好きでもないかな。だって……色んな意味で少し怖いんだ」と言っていた。
ちなみに愛にはとても懐いているため、どうしたらそんなに懐かれるのか必死に桜は聞いているらしい。

『あ、これは別件だけど……頼まれているものは明後日ぐらいには出来ると思うよ』
「本当か？　助かるよ」
『うん。それじゃ、また後でね』
「わかった。じゃあな」

亮は電話を切って立ち上がり、〝亮のベッドで寝ている美桜〟を見る。

「美桜、そろそろ起きろ」
「ん……なんだい、兄さん？　私は、もう少し兄さんの匂いに包まれて寝ていたいんだけど……」

美桜は肩を揺すられ眠そうに目を擦りながら目を覚まし、家の中や2人きりの時ではいつも通りな発言をする。
外や他に人がいる時にはキリっとしている美桜だが、実はひどいブラコンで、亮が好きすぎてたまらないのだ。

「まったく……お前も結構アレだよな」
「なんだい？　兄さんの可愛い妹の私が変態だと言いたいのかい兄さんは。私はただの兄さんが大好きな妹なだけだよ」
「ハァ……とにかく、１０時に模型部で集まってカラオケに行くがどうする？」
「兄さんが行くのだろう？　もちろん行くさ」

キリっとなる美桜に亮は溜め息をつくと、本題を言い美桜はすぐに行くと言う。

「なら軽い朝ごはんを作っておくから、自分の部屋で着替えてこい」
「わかった」
「って、なんでここで脱ぎ始めるんだよ！」

自分の部屋で着替えるように言ったはずなのに、なぜか美桜はその場で服を脱ぎ始めたのだ。
美桜は不思議そうに首を傾げてから亮の服しか入っていないはずのタンスの一番下を開けると、その中に美桜の服がギッシリ詰まっていた。
「なんで美桜の服が俺のタンスの中にあるんだよ！　つーか元々あった俺の服はどうしたんだ!!」
「それなら私の部屋のタンスの中にあるよ」
さらりとそれが普通の事のように言う美桜に亮はもう何も言うまいと思い、美桜が完全に脱ぐ前に部屋から出ていくと朝食の支度を始めた。
そして朝食を食べ終え支度を済ませると、約束の時間である１０時前に模型店の前に美桜と行った。すると、志織が挙動不審な様子で１人で立っていた。
「早いな志織。まだ結構時間に余裕あるぞ？」
「ヒャッ!?　や、矢倉さん……？」

「わりぃ、驚かせたみたいだな」

亮は挨拶のつもりで後ろから志織の肩をポンと軽く叩いたのだが、かなり驚かせてしまいすぐに謝る。

「い、いえ。あの……おはよう、ございます……」

「ああ。おはよう」

「Ｄｏｂｒｏｅ　ｕｔｒｏ　神通さん」

美桜のとてもいい発音の言葉に志織はなんと言ったのかがわからず、首を傾げて困った様子で亮を見る。

「ロシア語でおはようって意味だよ。美桜はなぜか結構ロシア語使うんだよ」

「そ、そうなんですか……」

「どうだい？　神通さんも覚えてみないかな？」

「え、遠慮しておきます……」

「Ｔａｋ　ｌｉ　ｅｔｏ，　ｊａｌｋｏ」

志織は苦笑いで美桜の誘いを断り、亮は溜め息をついた。

「まだ集合まで時間あるし、中を見とかないか？」

「私は賛成だよ、兄さん」

「そう、ですね……ご一緒します……」

３人で模型店に入っていくと、店内には数多くのガンプラが置かれている。そして冷房が効いており、丁度いい湿度であった。

「あ、いらっしゃませー……って矢倉先輩!?」

「久しぶりだな、亜御」

元気よく挨拶して驚いたのはこの模型店の店主の一人娘で亮の1歳年下の鳳千　亜御で、亮が通っていた中学の後輩だ。

セミロングの茶髪を一房のポニーテールに纏め、紅白の鉢巻きに店のエプロンをしていた。

「あの、知り合い……なんですか……？」
「ああ、俺の後輩だよ。よく俺の後ろについて回ってたんだよなー」
「そして私の事をよく面倒見てくれる人でもあるね」
「本当に亜御には、いつも助かってるよ」
「い、いえ、そんなことないですよ」

亜御は手をヒラヒラと左右に振り否定するが、頬を朱色に染めて恥ずかしそうにしていた。
そして、なにか思い出したような表情をして美桜を見る。

「美桜ちゃんに頼まれてたの完成したけど……どうする？　今持ってこようか？」
「本当かい？　ならお願いするよ」
「それじゃ少し待ってて！」

パタパタと店内を走り奥に行く亜御を見てから、亮と志織は首を傾げて美桜を見る。

「お前、何を頼んだんだ？」
「戻ってくればわかるさ」
「ふーん？」

戻ってくればわかるかと思い待っていると、亜御は両手で大事そうに何かを抱えて戻って来た。

「はい、頼まれていたガンプラ、ブレイヴよ」

亜御の手によって渡されたのは、美桜の髪色と同じ銀色をしたブレイヴであった。見たところ亜御が苦労してカスタマイズし、作り上げたのだろう。

「хорошо！　予想以上の出来だよ」
「えへへ……これでもこの模型店の一人娘なんだから！　それじゃ、約束通りよろしくね？」
「понимание。わかっているさ」

美桜は亜御から銀色のブレイヴを受け取ると、オマケなのか持ち運び用のケースも受け取り、それに仕舞う。

「悪いな亜御。ちゃんと料金払ったのか、美桜？」
「心配ないさ。それも含めて約束しているから」
「いったい何の約束したんだ？」
「それは兄さんにもｃｅｋｐｅｔさ」
「なんなんだか……」

訳がわからないなっと亮が思っていると店の外に聞き慣れた声が聞こえて来たので、亜御に挨拶し今度お礼すると言いつつ別れ、晃達と合流してカラオケに向かった。

私達の切り札は貴方よ

今現在、亮達蒼城学園模型部は大変盛り上がっていた。
全員集まってカラオケに行くと順番に歌い出し、得点を競ったりしながら賑やかな時間を過ごしていた。

「さてと……そろそろ本題に入りましょうか」

歌い終え、ジュースを一口飲んだ桜がそう切り出す。
いきなりのことで首を傾げる亮と志織。晃はわかっていた様子だが、愛は構わず注文した料理をモリモリ食べていた。

「本題あったんですね、先輩」
「なによ……私が何も考えてないみたいに言わないでよ」

桜は亮を睨み付け、「まぁいいわ」っと溜め息をつきながら言うと、真面目な様子で全

員を見渡す。

「本題っていうのは、来月行われる地区大会についてよ。私達、蒼城高校は毎年出場してるけど毎回初戦敗退しているわ」

「だからこの前の廃部騒動な訳ですね……結果が残せていないから」

この前の黒星高校との練習試合を思い出しながら、亮はそう呟く。

学校側も結果が残せない部活動に部費を出すくらいなら、廃部にしてしまえと思っていたのであろう。

「晃や愛ちゃんはルール知ってるから問題ないと思うけど、新入部員の2人は知らないと思うから説明するわよ?」

そう言って桜から説明された大会のルールはこうであった。

大会はチーム戦であり、各学校で3人1組のチームを組み1対1で戦う。

勝敗は先に2勝した方の勝利となるなど簡単に教えられた。

「なら1番手、2番手に強い人を置いて……3番手は予備って感じですかね？」
「だいたいの学校はそうしてくるわね。逆にしてくる所もたまにあるけど」
「なるほど……」

納得した様子で亮はあることを考えた。
それはあの部長に関してである。

「思ったんですけど、あの変態部長は出ないんですか？」

亮の一言に桜と晃は固まってしまう。
気まずい雰囲気になったことで、これは聞いてはならないことだったようだと亮は悟った。

「えっと……聞いたら不味いことだったですか……？」
「い、いや……あのね？」
「いずれ言わないといけない事だもんね……ボクから言うよ。部長は……大会には出れないんだ」

その一言に、今度は亮と志織が固まってしまった。

まさか大会に出ないのではなく、出れないとは思わなかったからだ。

「あ、あの……もしかして……何か身体的な……問題が……？」

恐る恐る尋ねる志織の言葉に、晃は首を横に振る。

「部長が大会に出れない理由は……留年してるからなんだよ。それも1度や2度じゃなくて……」

「は？」

「え？」

あまりにも予想外の言葉に唖然となる2人に、桜と晃は呆れたように溜め息をついた。

そう、部長である双雲は何度も留年しており、なので高校生の大会などの学生大会に出ることは許されないのだ。

「まさか留年とか……いいんですか、そんな人が部長で？」
「……仕方ないじゃない」
「なら部長は今何歳なんですか？」
「確か……今年で２０歳だよ」
「何回留年してるんだよ……」

今度は亮が溜め息をつき、志織は苦笑いを浮かべていた。
まさか２０歳になるまで高校を留年しているとは、誰も思わないだろう。

「だからといってじゃないけど……私達の切り札は、貴方よ」
「俺が……切り札……？」

桜の真面目な様子で言われた一言に亮は驚いた。
まさか自分が切り札と言われるとは思わなかったのだ。

「私も……信頼してる」

「ボクもだよ。亮くんは強いしね」
「愛、晃……」
愛は料理を食べながらだが静かにそう言い、晃もそれに続く。
その様子を見ていた美桜は微笑んで、嬉しそうにしていた。
「流石だね、兄さんは……こんな短期間でこんなに信頼されてるなんて」
自分の事のように嬉しそうにする美桜の頭を撫でてから、亮は全員を見渡す。
「なら、俺はその信頼にキチンと応えてみせるさ」
そう言うと握り拳を作り、突き出した。
愛、晃、桜、志織の全員は頷き、手を合わせる。
そんな様子を美桜は羨ましそうに眺めていた。
その頃…とある高校でガンプラバトルが行われていた

「し、信じられない……ボク達があんな子供1人に……」

左腕やファングなどを失い、ボロボロな状態のリボーンズガンダムの周囲には仲間であった者達のガンプラが無惨な姿で転がっていた。

「こんな事が許されていいはずがない……ボク達は……」

そう言いかけると、仲間を切り刻んだ小型の鋏(ハサミ)のような物が飛んでくる。

「この……子供風情がッ!!」

GNバスターライフルを向け、引き金を引こうとした瞬間に……腕は切り落とされた。

「な、に……」

彼は驚き、その場から逃げようとするがアチコチを切り刻まれ、トドメと言わんばか

りに大きな鋏に挟まれる。
リボーンズガンダムはゆっくり自らの後ろを振り向き、その悪魔の様なガンダムを至近距離で目撃した。
「このボクが……敗れるなんて……！」
その瞬間鋏は閉じられ、リボーンズガンダムは真っ二つになる。
「キャハ……キャハハハハハハハハハッ！」
悪魔のようなガンダムから少女の笑い声が響き渡り、それに呼応するように血のような紅いＧＮ粒子が翼のように広がった。
亮達が彼女と戦うのは、そう……遠くないのかもしれない。

俺の反応に敏感に応えてくれる

「どうかな、カスタマイズした新しいヅダの性能は？」
「最高だ。普通のヅダより動かし易いし、俺の反応に敏感に応えてくれる」

亮の新しいヅダは見た目はあまり変わっていなかった。
だが装甲を支障をきたさない程度までギリギリまで薄くし、土星エンジンの性能を上げスラスターも強化している。
これにより機動性が上がったが、逆に1歩間違えば爆発の危険性も高まっている。
そして右手には銃身が折り畳まれている対艦ライフル、右肩に新しくヒート・パイルを搭載していた。
対艦ライフルは長いままだと近い間合いに対応出来なかったため、折り畳む事で対応出来るように改造し威力も上がっている。
銃身を展開することでロングバレルとし、遠距離からの狙撃も可能とした。
新たな装備として搭載したヒート・パイルは成形炸薬弾による大量のメタルジェットで装甲を貫き、同時に内部から破壊する武器だ。

実際は危険なため設定での話なのだが、これにより一撃必殺とも言える武器を手にした。

なおザク・マシンガンではなくＭＭＰ８０　９０㎜マシンガンを右足に、ヒート・ホークを左足に搭載している。

そして右肩には通常通りシールドとシールド・ピック、裏にシュツルム・ファウストもある。

「それじゃテストバトルを始めるよ。まずは対艦ライフルをロングバレルモードで対象を狙撃してみて」

「了解」

晃に言われた通りに対艦ライフルの銃身を展開しロングバレルにすると、テスト用に実体化した丸い緑色の機体――ハイモックを狙撃し一撃で仕留める。

「威力も上々だな。遠距離でキチンと撃墜できたし」

「みたいだね。次は機動力を試して見てくれるかな？　敵機に接近して至近距離で対艦ライフルで撃破してみて」

「ＯＫ！」

ヅダは対艦ライフルの銃身を折り畳むと、自由自在に宇宙空間を駆けた。
その速度はブーストを解放していないのに、以前のブーストを解放したヅダと変わらない……いやそれ以上の速度であった。

「ッ！　かなり速いな……」

これでまだ奥の手であるブースト解放が残っているのだ。
機動力はずば抜けて高い機体になっている。

「後ろをとった！」

ハイモックからの攻撃を回避し後ろをとると、対艦ライフルを発射する。

「機動力は想定以上だね。いい傾向だよ。次は……」

晃が次を試験をしようとすると、極太のビームがヅダが襲う。
だがそれを難なく回避すると、ビームが来た方向を睨み付ける。
「いきなり不意討ちを行う……まさにドS!!」
「またアンタかよ……」

新作ヅダを攻撃してきたのは模型部の部長である双雲のエクストリームガンダムで、今回はカルネージフェイズであった。
いつの間にか帰ってきて、乱入してきたのだ。
「ちょ、部長!?　まだテストが……」
「いいさ。実戦テストも悪くないだろ?」
「亮くんまで……まだ予備パーツもないんだからね?」
「わかってる」

ヅダは臨戦態勢をとり、対艦ライフルを構える。

「さぁ私に見せてみせよ！」

そう言うと背部のコンテナから再び極太ビームを発射する。

ヅダはビームをかわすとそのビームに沿うように動き、エクストリームガンダムに迫っていく。

「ほう、なかなか速いではないか。ならこれならどうだ！」

「この程度、今のヅダなら避けれるんだよ！」

ビームが終わると次はミサイルの雨が降り注ぐ。

ヅダは隕石などを蹴りながら変幻自在の機動でミサイルをかわし、接近すると対艦ライフルをエクストリームガンダムの右肩に発射する。

「この前は傷が入らなかったが……やるようになったではないか！　悦いぞ、悦いぞー!!」

対艦ライフルによる一撃はエクストリームガンダムの右肩を完全に破壊していたの

だ。

「お前に誉められても嬉しくねーよ。オマケだ！」

エクストリームガンダムの背後をとると、続けてシュツルム・ファウストを発射して左膝を破壊しそのまま距離を離す。

「ハッハッハ！　楽しくなってきたではないか!!」

「こっちはそうでもねーよ。まぁ、新兵器の威力を試させてもらう！」

ヅダは対艦ライフルを投げ捨てると、右肩に搭載していたヒート・パイルを装備する。

振り向きこちらを見ているエクストリームガンダムはボロボロな状態で、ヅダは無傷でありまだブースト解放もしていない。

「このヅダの最高性能を……確認しておくか！」

「私もそうそう甘くない!!」

ブーストを解放し熱気に包まれるヅダに、エクストリームガンダムはビーム・ライフルを放つ。
ヅダはそれ全てかわし、エクストリームの目の前にたどり着く。
そして右腕に装備したヒート・パイルでエクストリームの胸部を殴り付けると、ヒート・パイルが起動し爆発が起こる。
「……こんなに威力高くていいのか?」
「……これもだけど想定以上の威力だね。部長のエクストリームガンダムがその、無惨な……」
エクストリームガンダムの胸部で起爆したヒート・パイルの威力は2人の想像を遥かに上回り、エクストリームガンダムを一撃で粉砕したのだ。
「と、とにかくバトルを終わらせようか」
バトルを終了させ、プラフスキー粒子を解放させる。

「それじゃ、一回ヅダは預かるね。さっきの機動でどれだけ負荷がかかったかわからないし」
「おう、頼むな。それじゃ美桜が待ってるしそろそろ帰るからな」
「またな！」

亮は晃に手を振り帰って行くなかで、双雲は一言も喋ることなく自分のエクストリームガンダムを見ていた。

「えっと……部長、どうしました？」

あまりにも何時もと違う様子を気になり晃は話しかけると、双雲はいきなり笑いだした。

「ハッハッハ！　悦いぞ、悦いぞー!!　貴様も見たであろう、あのヅダの微かな輝き！」
「……部長？」
「あの下僕ならば〝アレ〟を使いこなせるかもしれんな！」
「あの、部長ー付いていけないんですけどー？」

双雲は晃の疑問に答える事なく、笑いながら部室を出ていってしまう。

「……いったい何だったんだろ？」

部室に1人取り残された晃は、そう呟いて帰り支度を整え帰っていった。

さあ、次は誰?

「紅い悪魔?　なんだよそれ?」
「やっぱり亮くんは知らなかったんだね。最近噂になってるんだよ」
「愛と志織は知ってたのか?」

昼休みに1年生の4人は集まり、一緒に昼食をとっていた。
桜1人を除け者にして後で怒られそうなのだが、一応誘いはしたが桜は委員会の仕事で一緒に食べる事は出来なかったのだ。

「うん。私は知ってたよ?」
「わ、私は知らなかったです……」

話題になっている紅い悪魔とは、ガンプラバトルの大会に出ている高校を次々と訪れバトルを行っているらしく、そのバトルはもはやバトルと呼べず、もはや蹂躙であったらしい。

「なるほどなー出来ることなら来て欲しくないな」
「同感だよ。大会前に機体を壊されるのはなるべく避けたいからね」
「でも……桜先輩は叩きのめしてやるって……前に言ってたよ……？」

相当な実力者であろう相手を叩きのめせる確率は低いだろっと、亮と晃は溜め息をついた。

「あ、あはは……そろそろお昼休み終わりますね」
「だな。そろそろ戻るか」

広げっぱなしの弁当箱などを片付けてから教室に戻り、残りの午後の授業を受ける。
帰りのＳＨＲが終わり、再び１年生組は集合して部室に向かった。

「……？　部室の前に、誰かいる」
「本当だな。美桜……じゃないな。誰かの知り合いか？」

模型部の部室前には1人の少女が立っていた。
年齢はおよそ美桜と同じぐらいであろう。

「君、迷子かな?」
「お兄ちゃん達も、ここの模型部の人なの?」

晃が話しかけると、その少女はゆっくりと振り向きそう言った。

「うん、そうだけど……なにか用事なのかな?」
「そっか……それを聞いて安心した」

少女はニタリと笑い、合図をすると亮達の後ろに大きな男が現れた。
今までどこに隠れていたかはわからないが、いきなり後ろに現れたのだ。

「お兄ちゃん達には私とガンプラバトルしてもらうよ」
「念のために聞いておくけど……拒否権は?」
「あると思う?」

だろうなっと亮は肩をすくめ、全員頷きあって部室に入って行く。
出入口には先ほどの大男が立っており、逃げられない上に部外者は入って来れないようにしていた。

「あら、皆も来たのね」
「先輩!?」

桜は先に部室の中におり、立ち上がると亮達の隣に行き少女と大男を睨み付ける。

「それじゃ全員揃ったから始めましょうか、紅い悪魔さん」
「紅い悪魔って……晃が昼休みに話してた!」
「アハ♪　知ってるなら話は早いよね？　さぁ、バトルしましょうか。いきなり全員でかかって来ても私は構わないよ?」

亮はあの美桜と同じぐらいの少女が、噂になってる紅い悪魔とは思わなかったため驚いていた。

少女はアルケーガンダムのような紅いガンプラを取り出す。
両腕にはＧＮバスターソードを装着し、後ろ側も改造されており、非常に禍々しいガンダムであった。

「噂は聞いてたけど……慢心が過ぎるわよ！　この娘は私１人でやるけどいいわよね？」
「１人ずつなの？　時間がかかるけど、いいよ」

桜と少女は筐体の前に立つとシステムが起動し、プラフスキー粒子がフィールド――海を形成した。
ＧＰベースをセットし、ガンプラもセットする。

「トールギスⅢ、獅子骨　桜で行くわよ！」
「九音　霊香、行くよカースロード」

空中に出現したカタパルトからお互いに飛び出し、バトルが始まる。

「亮くん。しっかり観といてね?」
「わかってる」
亮はこのバトルを食い入るように見ていた。
敵の情報を得るチャンスを見逃すほど、亮は甘くない。
「紅い悪魔なんか私が倒してやるんだ……アラート!?」
突然のアラートに桜は驚いていた。
こちらはまだ捉えていないのに、アチラはもうこちらを捉えているのだ。
紅いビームがトールギスⅢを襲うも、ギリギリのところで回避に成功する。
そのまま進んで行くと、動こうとしていないカースロードを捉えてメガ・キャノンを構える。
「これで終わりよ!」
トールギスⅢが発射しようとした瞬間、メガ・キャノンは2つに切り裂かれてしまう。

突然の事に驚くも、すぐにその場を離れカースロードを見る。

「どう?　ＧＮシザーファングの切れ味は?」

トールギスⅢのメガ・キャノンを切り裂いたのは、小型の鋏のような物であった。
ＧＮシザーファングと呼ばれた武器は、主であるカースロードの左右にあるスカートアーマーに戻っていく。

「いきなりやってくれるじゃないの……けど、まだ終わりじゃないわよ!」

唯一の射撃武器を失ったトールギスⅢだが、桜はまだまだ諦めていなかった。
ビーム・サーベルを取り出すと、それを構える。

「行くわよ!」

トールギスⅢは背部のスーパー・バーニアを全開にし突撃する。
パイロットであったゼクスですら初見では「殺人的な加速だ」と言わせる程の加速で、

エアリーズのマッハ2を遥かに上回りそれは計測不能の速度を誇る。

「アハ♪　逝っちゃって、シザーファング！」

カースロードは再び左右のスカートアーマーからＧＮシザーファングを射出する。
小型である上に、こちらも中々の速度を持っていた。

「1回見れば充分対応できるのよ！」

トールギスⅢはビーム・サーベルで1基のＧＮシザーファングを落とすが、もう1基に左足が切り裂かれてしまう。

「しまっ……」

機体の動きを少し止めてしまっただけで、もう終わりであった。
トールギスⅢは次々とＧＮシザーファングで突き刺された上に切り裂かれてしまう。

「なーんだ。もう終わり?　詰まらないの」

トドメと言わんばかりにＧＮバスターソードを手に取ると、それを投げてトールギスⅢの胸部を貫きバトルの勝敗が決する。

「さぁ、次は誰?」

楽しそうに笑う霊香のその笑みは、とても不気味であった。

そして、そんな霊香を出入口にいる大男は悲しそうに見ているのを、亮は見逃してはいなかった。

お前の歪みを俺が正してみせる！

「俺が行く。構わないよな？」
「……大丈夫なの？」

1歩前に出る亮を愛は心配そうに見上げていた。
亮は安心させるように微笑んで、愛の頭を撫でてから霊香を睨み付ける。

「アハ♪　その視線……ゾクゾクする」
「亮くん、気を付けてね」

霊香はその視線にブルッと身体を震わし、舌舐めずりをする。
亮は晃からヅダ改を受け取ると、再びバトルシステムが起動される。
今度のフィールドは宇宙であり、幸いなことにヅダが一番動けるフィールドであった。

「矢倉　亮、ヅダ改、出撃する！」
「九音　霊香、行くよカースロード」

宇宙空間に飛び出したヅダ改は周囲を警戒していた。
先ほどのバトルで見たＧＮシザーファングは驚異的な性能である。
小型であるがため、油断しているとすぐにその鋏で切り裂かれてしまう。

「……さっきの行動から予測して」

亮は先ほどの１回の戦闘だけで、霊香のカースロードの動きを予測していた。
すぐにヅダを止めると対艦ライフルの銃身を展開し、構える。
とても敵が目視できる距離ではなく、いくら強化した対艦ライフルと言えども射程外であるはずだ。

「黒衣の狩人は言ってたぜ……ビーム兵器は遠距離だと威力が落ちるが、バズーカではないけれど弾の重力軌道を利用すれば……」

ヅダ改は対艦ライフルを発射する。
これは以前、亮が読んでいた黒衣の狩人と言う作品のジオン軍に所属する、ヅダを駆るパイロットであるウォルフガングが言っていた言葉である。
対艦ライフルの銃身を折り畳むと再び進み始める。
今の一撃で落とせるはずもなく、なによりバトルが終了していないのがその証拠である。
そしてしばらく進むと亮は可笑しいと思った。
彼方からの攻撃の予兆がまったくないのだ。
そのまま進んで行くと、左側のスカートアーマーが破壊されているカースロードを捉えた。
攻撃のチャンスはあったはずなのだが、それをしなかったのはなにか訳があるのだろうと考え距離を保ち、警戒したまま止まる。
「なんで鋏を展開して攻撃してこなかったんだ?」
「なんで? そんなの決まってる。お兄ちゃんが気に入ったからだよ。だから……私の手でお兄ちゃんを切り刻んであげる!!」

カースロードはバスターソードを手にヅダ改に迫ってくる。
ヅダ改はヒート・ホークを左手で握り、バスターソードをかわす。
すぐにヒート・ホークを振ろうとするが、咄嗟にカースロードから距離をとった。

「アハ♪　いい判断だねお兄ちゃん」

カースロードの周囲にはいつの間にかシザーファングが展開されていた。
ヅダ改が先ほど距離をとらず攻撃していたら、そのまま切り刻まれて終わっていたであろう。

「ここは連射できない武器よりは……」

対艦ライフルを投げ捨てると右手にザク・マシンガンを、左手にはヒート・ホークを構え警戒する。
無理に突撃すればシザーファングに切り刻まれ、離れていてもラチがあかない。
ならばと亮が考えた行動は1つであった。

「行くぞ、ヅダ……ッ！」

ブーストを解放し熱気を身に纏うと突撃し、ザク・マシンガンを連射する。
狙うのはカースロード本体ではなく、周囲に確認できるシザーファングであった。
次々とシザーファングを落としていき、カースロードに近づいていく。
そしてヒート・ホークを振るうが、バスターソードに阻まれる。

「ゾクゾクする……流石お兄ちゃんだよ!!」
「く！　まだだ!!」

パワーはやはりカースロードの方が高かったため、ヅダ改は弾き飛ばされてしまう。
そこに残っていたシザーファングが襲い、ザク・マシンガンで迎撃するも右足が切り裂かれた。

「クソ！　右足がやられたか!!」

他のスラスターを使い姿勢を整え、ザク・マシンガンを発射し先ほどのシザーファン

グを破壊する。
亮はエンジンをカットし、ヅダ改は熱気から解放された。
「お前は……なんでバトルをしてるんだ？」
「なんで？　決まってるじゃん……楽しいからだよ」
楽しいからと霊香は言ったが、それは普通の楽しいとは違うと亮は思えた。
「そう、楽しい！　相手の機体をズタズタに切り裂いて、ぐちゃぐちゃにして……絶望に歪む顔を見る！　あの快感が最高なのよ！」
「歪んでやがる……」
亮はなぜ美桜と同じぐらいの年齢なのに、なぜここまで歪んでしまったのかわからなかった。
なら……っと亮は一度目を閉じると一度深呼吸し、決意した様子で再び目を開ける。
「お前の歪みを俺が正してみせる！」

「私を正してみせる？　笑わせないでよ……お兄ちゃんにそんなことできる訳ないじゃん！　キャハ、キャハハハハハハハッ!!」

お前の歪みを正すんじゃなく、救ってみせる！

「キャハハハハハハ！　どうしたのお兄ちゃん？　私の歪みを正すんじゃなかったの？」
「言われなくても正してみせる！」

亮のヅダ改と霊香のカースロードのバトルは、ヅダ改が押されていた。
ヅダ改は片足を失いながらも持ち前の機動力でヒット&ウェイを繰り出し、カースロードは1つ1つの動作が大きいのだがシザーファングで隙をカバーする。

「ほらほら、段々動きが鈍くなってるよ？」
「クッ！」

少しずつだがヅダ改の損傷が増えていた。
どうすれば霊香の歪みを正せるか、悩んでいるからである。
ただ勝つだけならなにも悩む必要はないのだが、霊香の歪みを正すならそれだけでは

いけないのだ。

「お兄ちゃんはもう疲れちゃたの？　つまらないなぁ……」

「亮くん！」

カースロードはバスターソードを振るい、ヅダ改はそれをヒート・ホークで防ごうとするがヒート・ホークは弾き飛ばされてしまう。

「終わりだよお兄ちゃん！」

「まだだ！」

続けてバスターソードを振るが、ヅダ改はシールド裏のシュツルム・ファウストを零距離で発射する。

零距離での発射によりカースロードは爆煙に包まれ、装甲が薄いヅダ改はシールドが使い物にならなくなってしまう。

左腕が無事だったのは幸いであり、ヅダ改はカースロードから距離をとりザク・マシンガンを向けたままでいた。

「キャハ♪　今の一撃はなかなかよかったよお兄ちゃん？」
「あの変態のより頑丈なのかよ！」

シュツルム・ファウストの一撃をカースロードは見事に防いでいた。
この前のバトルでは双雲のエクストリームガンダムに対して充分な威力を発揮していたが、カースロードに対してはまだ不足の様であった。

「でも久しぶりだよ？　カースロードにここまでついてきた人は。だから……お兄ちゃんには特別に見せてあげるよ！」
「機体が赤く……」

カースロードは赤く発光していき、紅いＧＮ粒子の翼が広がる。
霊香が使ったのはトランザムシステムである。
粒子を全面開放し機体性能を３倍にまで上げる事ができるシステムであるが、粒子を大量に消費する、いわば諸刃の剣であった。
これを使用したと言うことは、霊香は勝負を決めるつもりなのであろう。

「キャハハハハハハ！　行くよ、お兄ちゃん!!」
「速い!?」

迫ってくる赤いカースロードに亮は敗北を覚悟し、眼を閉じると……声が聞こえた気がした。
微かにだが……亮の耳にはハッキリと届いていた。
亮は眼を開けると振り下ろされるカースロードのバスターソードを紙一重でかわし、左足で蹴りを入れてから距離をとる。

「俺にはハッキリと聞こえたぜ。お前の本音……心の声が……」
「何言ってるのお兄ちゃん？　頭でもイカれたの？」
「お前の歪みを正すんじゃなく……救ってみせる！」
「だから……訳がわからないよお兄ちゃんっ!!」

再び迫ってくるカースロードに、ヅダ改は腰に付けたザク・マシンガンの予備のドラムマガジンを取るとそれを投げた。

「予備のマシンガンを投げて何のつもりか解らないけど……貰ったよ！」
「こっちがな！」

ヅダ改はザク・マシンガンで予備のドラムマガジンを撃ち抜き、それが弾丸の雨となりカースロードの背面を襲った。
そして出来た隙を亮は見逃さず、直ぐ様ヒート・パイルを取る。
ブーストを再び開放し熱気を纏うと、弾丸の雨を受けて隙だらけのカースロードに近づきヒート・パイルを撃ち込んだ。そして鈍い音を立ててカースロードを破壊する。

「そんな……私が、負け……」

亮の勝利でバトルは終わった。
霊香は呆然とし負けた事を信じられずにしていると、亮はゆっくりと歩み寄る。

「こんなのまぐれに決まってる！　もう一度、もう一度私とバトル……」

そう言ってもう一度バトルを挑もうとする霊香を、亮は優しく抱き締めた。
晃や愛、志織の「わぁ」とか「へぅ」とか変な声が聞こえていると、霊香は突然の事に戸惑っている中で亮は背中をさする。

「もう大丈夫。無理はしなくていいからな」

霊香は段々と泣きそうになり、ついに泣き出してしまう。
今までずっと我慢していたのだろう……亮は霊香が泣き止むまでずっとそうしていた。

これでｋｏｎｅｃだからさ

「落ち着いたか？」
「うん……」

しばらくして霊香は落ち着いたが、亮にぎゅーっと抱きついたままであった。
助けを求めるように大男を見たのだが無視される始末で、霊香が満足するまでそうしている事にする。
だが……それがある意味、修羅場に発展しまう事を予想していなかった。

「これは……どういう事だい兄さん？」
「み、美桜？」

部室のドアが開き入ってきた美桜は、振り向いた大男の急所に一撃を食らわせてゆっくり入って来る。
その背後にはニュータイプの発するプレッシャーの様なモノが出ているのを、全員が

感じてしまう。
晃は大男の元に行くと、腰を叩いてあげていた。
「何よ貴女……」
「君こそ誰だい？　それになんで兄さんに抱きついているのかな？」
霊香は亮から離れると、同様のプレッシャーを放つ。
「す、凄いです……わ、私より年下なのにあんなプレッシャーが……」
「……美桜ちゃん、嫉妬？」
志織は２人のプレッシャーに怖がっていたのだが、愛は何時も通りの様子でポテチを食べていた。
桜は……隅で落ち込んだままであった。
「話が進まないね。こうなったら……勝負だよ！」
「望む所よ！　良弘、予備のカースロード！　いつまでもダウンしてるんじゃないわよ

!!」
「ちょっ、止めたげようよ!?」

霊香は先ほどの亮とのバトルでカースロードは大破しているのだが、予備があるらしくそれを持っているらしき大男――良弘に言う。
だが急所をやられていて未だにダウンしているので、蹴りを入れて出させようとした。

～１０分後～

霊香を止めて良弘への蹴りを止めさせてから回復するのを待ち、霊香と美桜のバトルが始まろうとしていた。
待っている間も２人の様子に志織は泣きそうになったり、落ち込んでいた桜を元気付けるのも大変であった。
「さて、それじゃ始めようか?」
「貴女みたいなのが私に勝てると思ってるの?」

亮も美桜が勝てるとは思わなかった。
美桜は初心者であり、対する霊香はかなりの経験を積んでいる。
そうこうしている内に、バトルシステムが起動しフィールドが形成される。
フィールドは前回と同じ宇宙であった。

「九音　霊香、行くよ、カースロード」
「矢倉　美桜、ブレイヴ、出撃する」

宇宙空間に飛び出す2機。
ブレイヴはすぐに変形し飛行形態になると、そのまま宇宙を駆けた。
直ぐに出会った2機は戦闘を始める。
美桜の銀色のブレイヴは変形しＭＳ形態になると、ドレイクハウリングを発射した。
対する霊香のカースロードはドレイクハウリングの一撃を避けると、シザーファングを展開しバスターソードをライフルモードにして3連射するがブレイヴは回避する。

「そこそこやるみたいね！」

「そっちもね。だけど……勝たせてもらうよ」

カースロードは接近しバスターソードを振るう。それをブレイヴはヒラリとかわすと、脚部からＧＮミサイルを発射し至近距離で命中させた。

カースロードは爆煙に包まれたが、直ぐに飛び出して来る。

「中々の一撃だけど、まだまだよ！」

「これぐらいで終わったら逆に困っていたよ」

バスターソードとビーム・サーベルでお互いの攻撃を受け止める。

カースロードは空いている脚で蹴ろうとするが、それはただの蹴りではなく爪先からビーム・サーベルを発振させた蹴りだ。

「これで！」

「やらせないよ」

先にブレイヴがカースロードを蹴りを入れ、変形して飛行形態になり距離をとる。

「この……逃がさないわよ!!」
「別に逃げてる訳じゃないよ」

逃げるブレイヴを追うカースロードだが速度は飛行形態のブレイヴがかなり上回っており、到底追い付けるはずがない。
距離が開く一方で霊香は苛立ち、ついに「トランザム!」と叫ぶ。瞬間、カースロードが赤く発光しＧＮ粒子の翼が広がった。

「あれがトランザム……Ｘｏｐｏｗｏだね」
「なんでそんなに余裕そうなのよ!」
「なんで?　そんなの簡単さ」
「なっ!?」

ブレイヴとカースロードの距離が縮んでいく中で、美桜はクスリと笑った。
あと少しというところでブレイヴは急停止。いきなりの事でカースロードはブレイヴを追い抜いてしまい、とっさに振り向こうとする。

「これでｋｏｎｅｃだからさ」
「う、嘘!?　私が１日に２回も……」

ブレイヴはトライパニッシャーを発射し、カースロードは避ける事が出来ずその赤い光に包まれる。
バトルは美桜の勝利で終了したのだ。
苦戦していた亮や負けてしまった桜もだが、あまりの事でこの場にいる全員が唖然となっていた。

「どうだったかな?」
「とりあえず言える事は……美桜、お前は本当に初心者か?　何処かで練習してたとかじゃなくて」
「そうだけど?」

なんで当たり前の事を聞くんだい?　っと言いたげに美桜は首をかしげ、全員をため息をついた。

「それに毎日、皆の動きを見てるからこんなの当たり前だよ」

美桜はドヤ顔で亮を見て、これは頭を撫でろと言うことかと美桜の頭を撫でた。

「私が1日に2回も負けた……」

それに対して、霊香はかなり落ち込んでいた。

それを慰めようと良弘は美桜の肩をポンと叩くと、霊香に睨み付けられ……

「なんでなのよ！　私が1日に2回も負けるなんて、この！　この！」

霊香は容赦なく良弘に蹴りを入れ、その様子を見て亮を思った事を思わず口にした。

「今日はカオスだな……」

私、頑張ってみます！

「練習試合？　いきなりですね」
「私も今日言われたからね。幸いにも全員の機体は万全だからいいけど。それにしても……」

あの日から数日経ち、亮たちは放課後に部室に集まると桜はそう言ったのだが、チラリと亮の後にいる２人を見る。
そこには小学生ぐらいの２人……美桜と霊香が争っていた。
ほぼ毎日部室に訪れ、霊香が美桜に挑んでいるのだが……美桜は上手い具合に話を摩り替えてバトルは避けているのだ。
「あぁ、霊香に関してはもう大丈夫ですよ」
「だといいんだけど……とにかく練習試合の説明をするわよ」
争っている２人をそのまま放置し、練習試合の説明をするとの事で４人が頷く。

「まず今回の練習試合は大会と同じルールで、不服だけど1年生だけで行うわ。だけど経験積むため、2番手で勝敗が決しても3番手までバトルをするらしいわ。それで順番は……1番手は志織ちゃん」
「わ、私……ですか……？」

名前を呼ばれた志織はビクッと身体を震わせ、不安そうに桜を見た。
亮は志織が1番手なのに納得していた。

「2番手、3番手になるとそのバトルでチームの命運が決まるから、結構プレッシャーがかかるわよ？　1番手ならまだプレッシャーが少ないから、志織ちゃんを選んだけれど……不安？」
「そ、それは……」
「大丈夫だって」
「亮……さん？」

亮は不安そうな桜の肩をポンと叩き、微笑みかけた。

「自信がなくて不安なのかもしれないけどな、志織は強いんだ。だから自信を持てって」
「……は、はい！　私、頑張ってみます!!」

桜はその様子を見て満足げに頷いていたのだが……亮の背後に2名分の黒いオーラが見えた様な気がした。が、桜は見なかったことにした。

「2番手は亮くん。頼むわね？」
「了解しまし……どうしたんだ美桜？　霊香？」
「兄さん、ちょっといいかな？」
「お兄ちゃん、ちょっといい？」

美桜と霊香は亮の左右の腕を掴み、笑顔であるのだが……目が笑っていなかった。
亮は2人に連れて行かれ、桜は溜め息をついて最後の3番手の人物を見る。

「3番手は愛ちゃんだからね？」
「……ん、頑張る」

「なら僕は時間まで皆の機体の最終調整をするね」

愛は名前を呼ばれ御菓子を食べながら頷き、晃は机の上に３人分の機体を並べ確認を始め、各々相手の学校を待った。

ちなみに亮は１０分後に、右腕は美桜に抱きつかれ、左腕は霊香に抱きつかれて戻ってきた。

「まったく、いきなり練習試合とか何を考えているんだ君たちは?」

「申し訳ないです……」

亮達が戻ってきてすぐに今回の相手校の４人が来たのだが、美桜達とさほど身長が変わらない人物に怒られていた。

愛、桜、晃の３人は相手の事を知っている様子であるが、知らない亮達は首を傾げている始末である。

「なぁ、美桜と霊香とかと身長がそんなに変わらないアイツ……誰なんだ?」

「三年生の鬼龍寺　穂香さん。お兄ちゃんの……婚約者」

「ハァ!?　婚約者って……あの変態の?　って言うか三年生!?」

亮はヒソヒソと愛に聞くと衝撃の一言を言われ、思わず大声を出してしまい視線を集めてしまう。

と言うより、穂香からとても睨まれている。

「フッ……まぁ彼の事は本当の事だから否定はしないが……僕の前で身長の話をするな」

「す、すみません……」

まさか美桜達と変わらない身長で歳上だったとは思えず、凄い形相だったため亮はすぐに謝罪した。

「まぁいい……時間が勿体無いから始めよう。準備を始めてくれ」

穂香は腕を組むと端にいつの間にか準備してあった椅子に座り、バトルを促した。

「志織、お前なら大丈夫だからな」
「は、はい！」

筐体を挟みバトルシステムが起動し、プラフスキー粒子により今回のバトルフィールドが形成される。
今回のフィールドは森林であった。

「神通　志織、ヒルドルブ改二、出します！」

志織の新たなヒルドルブが空中に出現したカタパルトから飛び出した。

この一撃で……終わり、です……！

森林に着地したヒルドルブ改二の姿は、普通のヒルドルブとかなり変わっていた。
通常より1回り以上大きくなり、スモークディスチャージャーがあった所にはミサイルポッドを取り付け、装甲もかなり強化されている。
そして何より目を引くのが３０㎝砲を取り除き、代わりに取り付けた４６㎝三連装砲だ。
あの有名な戦艦大和の主砲をヒルドルブに合う様に改造し取り付け、他にもプラフスキー粒子を応用した技術も込められている。
「機体に問題は……ない。よかった……」
改造しすぐに実戦投入だったため、少し不安があったのだが問題が無さそうな事に安堵して微笑む。
「信頼してくれてる……皆さんのためにも……！」

志織は気合いを入れ直し、ヒルドルブ改二はゆっくりと進みだした。
本当はもっとスピードを出したいのが本音であるが、ハッキリと言えば機体が重すぎるのだ。
色々と詰め込んだ上に、装甲も強化しているのだから仕方ないとも言える。

「見つけた……！」

暫く森の中を進むと空中に飛行形態のデルタプラスを発見する。
ヒルドルブ改二は足を止めると、４６㎝三連装砲を向けた。

「三式弾装填……全主砲、斉射……！」

４６㎝三連装砲から放たれた砲弾はデルタプラス目掛けて発射され、それに気付いたデルタプラスは回避機動に入る。
しかし砲弾は拡散してデルタプラスを襲い、機体は落下していった。

「これでダメージを……でも、まだ……終わってないん……ですよねよ？」

今の一斉射で終わってくれてたら嬉しかったのになっと思いながら、ヒルドルブ改二は再び前進していく。

墜落した場所はここからさほど離れてないはずであり、当然デルタプラスも移動するはずである。

「え、えっと……光学迷彩、起動……」

ゆっくりと走行しているヒルドルブ改二の姿を周囲の景色に溶け込ます。

これが新たにヒルドルブ改二に搭載した、プラフスキー粒子を応用したシステムの1つである。

スモークディスチャージャーを除けたのも、これを搭載したからであった。

「見つけた……」

三式弾を喰らい墜落したデルタプラスは人型になり、片膝を突いて警戒していた。

無理に動くより、その場で警戒していた方がいいと思ったのかもしれない。
確かにヒルドルブ改二は走行している時に音が鳴る。
それで判断し攻撃するのであろう。

「音で……こちらに、気付いてる……？」

ヒルドルブ改二は止まるが、既に音で近くにいることを察知しているらしくデルタプラスはビーム・ライフルを構えていた。

「この一撃で……終わり、です……！」

ヒルドルブ改二は曲射榴弾を装填すると、４６㎝三連装砲の照準をデルタプラスに合わせ発射する。
砲弾はデルタプラスに命中し機体を粉砕、バトルが終了した。

「か、勝て……たんですか……？」

志織は勝てた事が信じられないのか、その場で固まったままで亮達を見る。
亮は微笑みながら頷くと、志織は泣き出してしまった。

「え、ちょっ……なんで泣く!?」
「だ、だって……」

亮や晃が必死になり志織をなだめている中、負けたデルタプラスを操る男子生徒は穂香の前で正座をしていた。

「まったく……今のバトルはなんだ？　不甲斐ないにも程がある。君は初心者ではないはずだろう？」

男子生徒はガミガミと説教されていた。
若干男子生徒は嬉しそうにし、興奮しているのが色々な意味でヤバイと思えたのだが……。
桜に見せたら不味いと思い愛に言い、霊香と美桜にも見せない様にしていた。

「ふぅ……今はここまでで良いだろう。次のバトルもあるからな」
「あ、ありがとう、ございます……」

男子生徒は土下座をしてから立ち上がったのだが、満足そうな表情をしていたのを亮は見逃さなかった。

「……俺の周囲には変態しかいないのか？」
「諦めよう、亮くん……」

常識人である亮と晃は溜め息をつき、なんで変態ばかりが集まるのだろうと心から思うのであった。

撃ち込む!!

これからやっと2番手の試合になるのだが、すでに亮は疲れていた。
身体的にではなく、精神的にであるのだが。

「それじゃあ2番手のバトルを始めましょう。貴方が私の相手ね」
「そうだよ」

亮は今まで突っ込まなかったが、この相手とだけは戦いたくはないと思っていた。
なぜなら女子の制服を身に纏い……

ゴリラのような姿をしているからだ。

蒼城学園の誰もがそう思っているのだが、口に出しては言えずにいる。だがどう見てもゴリラである。

今日1日でＳＡＮ値が物凄く削られている気がするが、亮はもう考えないようにした。

「矢倉　亮、ヅダ改、出撃する!」

ヅダ改はフィールドに飛び出し着陸する。

フィールドほ引き継がれるため、そこは志織が戦った森林であるのだが……開始早々に木々が薙ぎ倒される音が周囲に響き渡る。

「な、なんだ……?」

音は次第に近くなり、ヅダ改の目の前に現れたのは……グラビトン・ハンマーを振り回す、全身ピンク色のボルトガンダムであった。

「なんでさ!?」

あまりの事で亮は違う作品の主人公の口癖の様な事を言ってしまう。

ヅダ改は後方にジャンプしグラビトン・ハンマーを避け、対艦ライフルを発射するのだがそれはグラビトン・ハンマーに防がれる。
せめてグラビトン・ハンマーだけでも破壊できれば良かったのだが、さすがに無傷であった。

「ウホホホホ！　そんな豆鉄砲じゃワタシのボルトガンダムちゃんのビューティフルなボディには傷一つつかないわよ！」
「どこがビューティフルなんだよ!!」

ヅダ改は逃げた。ひたすら逃げた。
あんな重量の塊の直撃を喰らった時は装甲の薄いヅダ改だけでなく、どんな機体だろうとひとたまりもないであろう。
かと言って逃げ回っているだけではバトルには勝てない。
そして対艦ライフルを豆鉄砲扱いする相手であるため、まともにダメージを与えられるのはおそらく右肩に搭載しているヒート・パイルだけであろう。

「なら……こうするしかないよな！」

ヅダ改は対艦ライフルをピンク色のボルトガンダムに投げつける。
ピンク色のボルトガンダムはグラビトン・ハンマーで対艦ライフルを破壊するが、ヅダ改は既にザク・マシンガンを装備していた。
「豆どころか、そんな砂粒じゃますます意味がないわよ!」
「だろうな。だから……こうするんだよ!」
ヅダ改はザク・マシンガンを投げ付け、ピンク色のボルトガンダムはそれに気を取られておもわず破壊する。本来なら機体にぶつかろうがどうってことはないのに、だ。
「この瞬間を待っていたんだ!」
「ウホッ!?」
ヅダ改はボルトガンダムがザク・マシンガンに気を取られた瞬間、ボルトガンダムの足下にシュツルム・ファウストを撃ち込んだ。
爆発が起こり、周囲に煙が広がる。

「ど、どこにいるの！」

「ここだよ」

煙はすぐに晴れピンク色のボルトガンダムはヅダ改の姿を探すが、見付けられず声を出すとすでにヅダ改はピンク色のボルトガンダムの真後ろを取っていた。

「ウホー?!　いつの間に!?」

「ヅダ改のスピードをなめるなよ！　撃ち込む!!」

ヅダ改の右腕に装備されたヒート・パイルは鈍い音を立てて撃ち込まれた。必殺の一撃が決まり、勝利が決定する。

「ふう……無事に勝て……」

勝てた事に安堵してから、対戦相手の女ゴリラを見ると……目がハートマークになっていた。

亮は思わず顔がひきつり……1歩下がると、女ゴリラは同時に1歩出てくる。

「ウホ……今の一撃、私のハートまで貫いたわぁ。私と……お付き合いしましょおおおおおお!!」

「全力で遠慮させてもらうッ!!」

こうして、亮と女ゴリラの鬼ごっこが始まった……。

部室を飛び出し全力で走ること10分、亮はどうにか無事に部室に戻って来ていた。

女ゴリラには穂香の一撃（回し蹴り）が炸裂し、厳重に拘束されている。

「なんで、こうなるん……だよ……」

「その……なんだ？　うちの部員がすまなかったな……」

誰もこうなるとは思っていなかったが、あんまりと言えばあんまりの事に普段は謝らない穂香が素直に謝っていた。

かくして、その後の亮は美桜や霊香に慰められていたり、あのデルタプラスを操っていた男子生徒は拘束された女ゴリラを羨ましそうに見ていたりしていたのであった

……。

あいつは絶対につぶす

「勝敗は決しましたが、本日は練習試合なので3番手の試合も行うのでよろしかったですね部長？」
「そうだ。最後の貴様ぐらい勝利してみせろ……だが、あの事については忘れるなよ？」
「かしこまりました」

穂香たちはすでに2回負けており、彼女は目を瞑っていた。
そんな彼女に話しかけたのは身長が高い男子生徒だ。
男子生徒は1礼すると筐体の前に立ち、愛は既に待っていたのだが御菓子を食べていた。

「……話、終わった？」
「お待たせして申し訳ありません。それでは……始めましょう」
「……ん」

互いにガンプラをセットし、再びプラフスキー粒子が満たされる。

「御影　愛、アストレイゴールドフレーム天ミナ、行きます」

フィールドに飛び出したゴールドフレームは、大空を飛びながら相手を捜索する。

しばらく進むと、ピンク色のボルトガンダムがグラビトン・ハンマーで木々を薙ぎ倒し進んでいた場所にトールギスⅡが立っていた。

ゴールドフレームは距離を開け着陸すると、トリケロス改を向ける。

「……どういうつもり？」

「待っていたのですよ、貴女を……この機体を扱うのですから、エレガントにしなければいけないので」

相手がニッコリと笑ったのを見なくてもわかった愛はムカッとした。

理由は愛自身わからないが、ムカッとしたのだ。

「……貴方の笑顔、なんかムカつく」
「それは困りましたね」

クスクスと笑う相手に向けていたトリケロス改からビームを発射する。
トールギスⅡは無駄な動きはせず最小の動きでビームを避け、２人のバトルは本格的に始まった。

「いきなりとは酷くありませんか？」
「……うるさい」

ゴールドフレームはトールギスⅡに接近し近接戦闘を挑んでいるが、全ての攻撃を受け流されてしまう。
トールギスⅡの動きにはあきらかに余裕を感じられる上、ゴールドフレームに一切攻撃してこなかった。

「……なんで、攻撃、してこないの」
「あぁ、すみません。少々考え事をしていまして」

「……それ、相手に対して失礼」
「フフフ……ならそろそろこちらからも攻めさせてもらいましょう」

ゴールドフレームの攻撃の僅かな隙を見切り、腹部に蹴りを入れる。

「クッ！　だけどま「この程度で終わりと終わりと思いました？」え……？」

トールギスⅡはビームサーベルでゴールドフレームの左腕を切り飛ばした。
すぐにトリケロス改を向けビームを発射しようとするが、先に右腕も切り飛ばされる。
これによりゴールドフレームは両腕を失ってしまう。

「まだ、これが……ある！」

ゴールドフレームは背中からマガノシラホコを射出するも難なくかわされてしまい、後ろをとられドーパーガンから放たれた弾丸が背中に命中する。
それから先は一方的な展開であった。

トールギスⅡは決して致命傷を与えず、じわじわとダメージを与えていく。

「そろそろ飽きてきましたね……もう終わりにしましょう」

ドーバーガンから今度はビームが発射され、ゴールドフレームを貫きバトルが終了する。

筐体の上には無傷のトールギスⅡとほぼ原型をとどめていないゴールドフレームが残された。

愛はゴールドフレームを大事そうに抱き締め、美桜が亮の手を握り締めていた。

「бесполезный（ダメだよ）　兄さん……」

亮は怒っているのだ……あの男子生徒に。

噛みつこうとした瞬間に、部室にパンと叩かれた音が響き渡る。

穂香があの男子生徒の頬を打ったのだ。

「僕は言ったはずだ。あの事を忘れるなと」

「……忘れてなどおりませんよ。ですが、やはり部長の考え方は甘い。相手を徹底的に潰し、倒す事が最上のバトルではないでしょうか？」
「お前はもう黙っていろ。申し訳ないな……大丈夫か？」

ゴールドフレームを抱き締めている愛に穂香は話しかけた。
愛は俯いたままで、穂香は溜め息をつき桜を見る。

「……申し訳ないが今日はもう帰らせてもらう。謝罪は追って、また」
「……わかりました」

穂香達は帰り支度をして部室を出て行く。
部室に残った亮達は愛を見守っていた。

「……あいつは絶対につぶす」

そう呟いた亮の言葉は、静かな部室に響き渡った。

私の、私だけのエクストリームガンダム！

あの練習試合の翌日、愛は学校を休んだ。
学校に来ている亮、晃、志織、桜の４人は部活を休みにし、愛の家に行こうという話になったのだが……放課後になってすぐに、亮だけが双雲に拉致されてしまった。
いきなり現れた双雲は亮を荒縄で拘束し、部室まで無理やり連れて来たのだ。

「何のつもりなんだよアンタは！　俺は用事があるんだからこれを解け!!」
「我が妹の所か？　下僕の貴様が行かなくとも、アイツならば大丈夫だ」
亮は拉致した理由を聞こうとするが、双雲は何時もの様子と違っていた。
大人しくなったのを見て双雲はニヤリと笑い拘束を解くと、ガンプラバトルのシステムが起動する。
「貴様だけでなく、各々に課題を与えておいた！　感謝するがいい我が下僕共！」
「いや、アンタに感謝したくねーよ。つーかコレを起動させたって事は……」

「そう、貴様の課題は……私と戦うことだ！」
「アンタとのバトルは前にやっただろ？　だけど……挑まれたからには、そのバトルやってやるよ!!」

互いにＧＰベースとガンプラをセットし、プラフスキー粒子によりフィールドが形成される。
形成されたフィールドは初めて双雲とバトルしたあのフィールドだ。
カタパルトを飛び出し着陸したヅダ改を操る亮が見たエクストリームガンダムは、今までのエクストリームガンダムのようなパワードスーツを着た姿ではなかった。
ヅダ改と同じサイズで右手には大型のライフルのような物、左腕にはダブルオークアンタのシールドのような物、背部には大型のウイング、左右の腰にはフリーダムのようなスカートアーマー、後ろ腰にはキュベレイのスカートアーマー。
それはエクストリームガンダムの全フェイズを小型化し、其々が邪魔をしないように調和したような機体である。
「フハハハハ！　これが私の、私だけのエクストリームガンダム、ディスペアーフェイズ!!」

亮は高笑いする双雲のエクストリームガンダムを見て気を引き締め直した。
慢心している訳ではないが、前回同様に楽には勝てないと感じたのだ。

「さぁ始めるぞ家畜！」
「俺は家畜じゃねぇよ！」

エクストリームガンダムが大型ライフルを撃つと同時に、ヅダ改も動き出す。
大型ライフルから発射されたビームを回避すると、逆にショートバレルの対艦ライフルを発射した。

「さぁ行くがよいぞ、我が下僕共！」

エクストリームガンダムは大型のウイングを広げると飛び立ち、それを回避。そして左腕を振るいポーズを決めると、キュベレイのようなスカートアーマーから小型ファンネル計１６基が出てきてヅダ改を襲う。
ヅダ改は必死に小型ファンネルを避け続け、１基でも減らすため左手のザク・マシン

ガンを撃ち続けた。
ファンネルやファング等を落とす時には、対艦ライフルのような連射の効かない武器は向かない。

「クソ！　なんで当たらないんだよ!!」

ザク・マシンガンから放たれる弾は小型ファンネルに当たっていなかった。
小型ファンネルばかりに気をとられていると、エクストリームガンダムの大型ライフルを回避できない。
なら……っと亮は考えた結果、小型ファンネルを無理矢理突破してエクストリームガンダムを一撃で仕留めることにした。

「ブースト、解放！」

ヅダ改は熱気を纏い一気に加速し、小型ファンネルの攻撃を避け、エクストリームガンダムに接近する。
だがヅダ改は攻撃する直前に回避行動に移った。と、同時にエクストリームガンダム

がタキオンスライサーを振るっていた。
大型ライフルの形は少し変わっており、タキオンスライサーになっていたのだ。
あのまま攻撃していた場合、ヅダ改は真っ二つにされていただろう。

「冗談じゃねーよ……」

ヅダ改は距離をとって着陸するとエンジンカットし、熱気から解放される。そして亮は戻ってきた小型ファンネルを格納するエクストリームガンダムを見てそう呟いた。

兄さんのために戦うのはいいかな

「ハッハッハ！　悦いぞ、悦いぞー!!」
「どうしろって言うんだよ！」

双雲のエクストリームガンダムに対して亮のヅダ改は攻めきれずにいた。
離れれば小型ファンネルやライフルなどでの攻撃が飛んできて、近づけばタキオンスライサーで斬られてしまう。
こうなったら一撃で決められるかわからないが、ヒート・パイルでの一撃しかないかと亮は考える。

「お兄ちゃんを……苛めるなぁッ!!」
「む？　不意討ちとは……貴様、中々のＳ！」
「私もいるよ」

振り下ろされたバスターソードと赤いビームを難なく避けたエクストリームガンダ

ムが見た相手は、霊香のカースロードと美桜のブレイヴであった。
カースロードとブレイヴの2機はヅダ改の隣に着陸する。

「遅いわよ！」
「そっちが速いんだと思うけど？」
「美桜、霊香……なんで2人が乱入してるんだ？」

乱入してきた2人に亮はただ驚いていた。
仲がいいのか悪いのかよくわからない2人だが、最近はよく一緒に行動しているのを目にする。

「ふむ、貴様はロリコンなのだな！」
「違うからな!?」

双雲は美桜と霊香の2人を見て、亮の事をロリコンと判断した。
だが亮はそれを否定はしたのだが……年下からばかりから好かれるので、あまり否定できる気はしない。

「そうだよ。兄さんはロリコンじゃなくてシスコ「それも違う!!」……違うのかい？」

この瞬間の方がバトルしている時より疲れるような気がするのは、気のせいじゃないと亮は感じていた。

そもそもこの美桜と霊香の２人が乱入してくるのは不味いのではないかと思い、双雲のエクストリームガンダムを見たのだが双雲は再び大きな声で笑い出す。

「幼女２人が私と戦おうというのか！　悦いぞ、悦いぞー!!　徹底的に調教してやろうではないか!!」

「言ったわねッ！　切り刻んで、グチャグチャにしてやるんだから!!」

「兄さんは私たちの戦いを見ているといいよ。大丈夫、あんな変態は私が３аКоНчИТь（終わらせる）から」

「あ、おい！」

亮の意見を聞かず、霊香と美桜は双雲に挑んだ。

カースロードとブレイヴはヅダ改の隣から飛び立つと、一直線にエクストリームガン

ダムを目指す。

「行きなさい、シザーファング！」

カースロードの左右のスカートアーマーからシザーファングが展開され、エクストリームガンダムも同時に小型ファンネルを展開した。

ブレイヴは変形し、シザーファングと小型ファンネルの戦闘の中を突き進みながらドレイクハウリングを連射する。

「ハッハッハ！　楽しくなってきたではないか!!」

「その首……貰うよ！」

エクストリームガンダムがドレイクハウリングから放たれたビームを避けている間に、ブレイヴはファンネルを突破して再び変形、正面から斬りかかった。

だがビームサーベルを持っている腕をエクストリームガンダム掴まれて防がれてしまい、美桜は咄嗟にブレイヴの脚部にあるＧＮミサイルを発射しようとする。

「良い判断だが、遅いな!!」

ＧＮミサイルを発射するより先に、展開されていたソードファンネルに脚部を斬られてしまう。

美桜はすぐに掴まれているブレイヴの腕をドレイクハウリングで撃ち抜き破壊してから離れると、カースロードが滑るような動きでエクストリームガンダムの後ろを取る。

「これで終わりね！」

美桜と霊香の連携攻撃は練習したりしていた訳ではないのだが、なぜか息がピッタリであった。

だが双雲はある程度予想していたのか、１人でフッと笑う。

「終わりなのは貴様だったな！」

「ッ！　避けろ霊香!!」

「え？」

バスターソードを振り下ろそうとすると、エクストリームガンダムの背中の大型ウイングから緑色の蝶のような翼が広がる。
エクストリームガンダム版の月光蝶、その名も絶望蝶だ。
その緑色の翼はカースロードを包み込み、直撃を受けたカースロードは一瞬でボロボロになり墜ちていく。

「まさか、私たちの連携攻撃がこうも簡単に……流石に強いね」

美桜はやられてしまったカースロードを見ながら、そう呟く。
絶望蝶が消えると、ブレイヴはいつの間にか小型ファンネルに包囲されていた。

「だけど兄さんのためにもタダでは終わらないよ。トランザム」

ブレイヴはトランザムを発動し、小型ファンネルから放たれるビームを受けながらもエクストリームガンダム目指して直進した。
ドレイクハウリングを射ちながら、美桜は亮のヅダ改をチラリと見る。

「やっぱり、兄さんのために戦うのはいいかな……」
「美桜ッ！」

トランザム状態のブレイヴはエクストリームガンダムに接近すると大爆発を起こした。
美桜のブレイヴは自爆したのだ。
２機は爆煙に包まれ、亮は無意識にヅダ改の左腕を伸ばしていた。

穿つ!

爆煙が晴れると、ソコには左腕を失ったエクストリームガンダムがいた。
亮のヅダは伸ばした手を強く握り締め、エクストリームガンダムを睨み付ける。
「あの二人は中々であったな!　さぁ次は貴様の番だぞ!!」
「ふぅ……美桜と霊香は覚悟を見せた。なら次は……俺の番だよな!」
ヅダ改はブーストを解放し再び熱気を纏う。その熱気は今までよりも激しいように見えた。
機体の限界、自壊するギリギリの所までヅダ改を動かす。
「ほう、覚悟を決めたようだな?　ならば私に見せてみよ!」
ライフルから放たれたビームをギリギリで避けると、ヅダ改はエクストリームガンダムに突撃した。

すぐに小型ファンネルを周囲に展開され、一斉に攻撃される。それは装甲を掠めてしまい、装甲の薄いヅダ改はかなりのダメージを負ってしまった。

「ふん！」

「その程度なら!!」

エクストリームガンダムはライフルをタキオンスライサーに変形させると、それを振るいヅダ改を真っ二つにしようとする。

ヅダ改は避けたつもりであったが胸部装甲を掠めてしまう。しかし、右手に持っていた対艦ライフルをエクストリームガンダムに向かって投げ付けた。

想定外の攻撃に対して反射的にタキオンスライサーで対艦ライフルを斬り裂く。すると、弾丸の雨がエクストリームガンダムを襲った。

霊香のカースロードとの戦いで繰り出した攻撃で、ヅダ改は予備のザク・マシンガンのドラムマガジンを投げ付けそれを撃ち抜いたのだ。

「ハッハッハ！　貴様のその程度のSでは私のエクストリームは動じもしない」

「だろうな。だから……こうするんだよ！」

今までの攻撃で少しだけでも注意を逸らせればよかったのだ。
ヅダ改の最大の一撃を決められる距離にまで接近できれば、後はこの武装を叩き込むだけである。

「穿つ!」

右腕に装備したヒートパイルが起動し鈍い音を立てたが、エクストリームガンダムの右腕を破壊するだけに終わってしまう。
だがこれでエクストリームガンダムは両腕を失った。
ヅダ改は連続してシールド・ピックを展開し、そのままの勢いでエクストリームガンダムの腹部に突き刺す。

「まだだ!」

ヅダ改の後ろには小型ファンネルが展開されており、シールド・ピックはエクストリームガンダムの腹部に突き刺さっている。

シールド・ピックのせいで動きが封じられたと双雲は思ったのだろうが、それは間違いであった。
突如シールドの左右が開き、エクストリームガンダムを挟み込んだのだ。
「な、なんだと!」
「霊香がくれた武装、シールド・シザーだ。これで……終わりなんだよ!」
双雲は急いで小型ファンネルでヅダ改を撃ち抜こうとするが、先にシールド・シザーがエクストリームガンダムを真っ二つに切り裂き、バトルは亮の勝利で終わった。
「今回は二人にかなり助けられたな。ありがとう美桜、霊香」
バトルが終了してから、乱入してきた二人の頭を亮は撫でた。
美桜と霊香は自分のガンプラがボロボロになってしまったが、亮の助けになったということで嬉しそうにしている。
「んじゃ帰るか。助けられたから今日は好きなものを作ってやるよ。勿論、霊香も来る

だろ?」
「勿論よ!」
「兄さんの料理、楽しみだ」

ボロボロになったガンプラを回収し硬直している双雲を一人残して、三人は部室を出ていった。

そして亮たちがガンプラバトルを丁度終えた頃、ロシアでガンプラバトルが行われていた。
雪が降る戦場に浮かんでいるのは小柄な機体――ガンダムＦ９１である。
そして、ガンダムＦ９１に挑んでいるのはデスティニーガンダムであった。
デスティニーガンダムが降り下ろしたアロンダイトの一撃でバトルは終わったと思われたが、ガンダムＦ９１は分身したかのように別の場所に姿を現す。
アロンダイトを降り下ろしたばかりのデスティニーガンダムにガンダムＦ９１のヴェスバーが撃ち込まれ、バトルは終了した。
先ほどのデスティニーガンダムは筐体に保存されている無人機体である。
だが保存されているのはいずれも優秀なファイターの機体であり、易々と勝てるはず

のないモノだ。

「流石お嬢様、百人抜きお疲れ様でございます。社長からも約束通り日本に行く許可が下りました」

ガンダムＦ９１を操っていた茶色の髪をした少女に、白髪混じりの燕尾服を着た執事が一礼して近づいてきた。

少女は無言で頷き、ガンダムＦ９１を見つめる。

「詳しい日程は後日お伝えします。それでは失礼します」

執事が部屋から出ると、少女は棚の上に置いてある写真立てを手に取る。

彼女にとって大切な相手、とても会いたい男性の写真だ。

「もうすぐ会えるお」

そう日本語で彼女が写真に話しかけた。

彼女が日本を訪れるのはそう遠くない事であり、また一つ問題が増えることになる。

全力全壊でいくわよ！

各々がやるべき事をした休日……ついに地区大会の日が訪れた。
蒼城学園の面々は集合する時間と場所を決めており、亮は美桜と共に向かっている。

「それで愛さんは来るのかな？」
「どうだろうな……一応メールで知らせてはあるけどな」

結局、今日まで愛は学校に来ることは一度もなかった。
双雲も心配はいらないと言っていたが、連絡が取れなければ心配にもなる。

「けど、兄さんたちは信じることにしたんだよね？」
「まぁそうだな。愛なら大丈夫だと思ってるからな」

２人は電車を降りると、徒歩で集合場所にすぐにたどり着く。
既に桜、晃、志織の３人は集合場所に居たのだが、そこに愛の姿はなかった。

「遅いわよ！　亮くんに……愛ちゃん？」
「え？」
「……お久しぶり」

亮が後ろを向くとそこにはキャンディを食べている愛の姿があった。
亮と美桜の後をずっと付いていたのだが、なぜかこの２人は気付かなかったのである。

「よかったー元気みたいね」
「……ご心配、おかけしました」

愛がペコリと頭を下げると、桜が抱きついて頬擦りする。
なんだかんだで何時も通りな様子なので、亮たちは微笑んだ。
これで全員（双雲除く）揃ったので、後は会場に乗り込むだけである。

「あ、それよりも愛のガンプラは修理終わったの？」

「……うん。でも、修理と言うより新造……？」

おそらくガンプラが入っているのであろうケースから取り出し、亮たちだけに見せるようにした。

前と変わらず全体的に黒色の装甲をしているが、金色であったフレームが紅くなっている。

どこか龍を思わせるフォルムであるのだが、以前まで背中に付いていたマガノイクタチが存在していなかった。

「へー綺麗な機体ね。名前は？　それに背中の武装はどうしたの？」

「……アストレイロストフレーム。背中は間に合わなかった」

「あ、なら僕用に製作してたあれが使えるかも……」

そう言うと、晃がかなり大きめな自分のケースから一つの武装を取り出した。

それはマガノイクタチに似てはいるが、形状など全てが異なっている。

「サバイヴストライカー……完成型のマガノイクタチにヴォアチュール・リュミエール

を搭載したオリジナルの武装だね」
「……でも、自分用って言ってなかった？」
「うん。だけど……愛のアストレイを少し改造させてもらっていいかな？　これを使うとために最適化したいし」
「……わかった。任せる」

愛は晃にアストレイロストフレームを渡すと、桜はそれを見て頷く。

「とにかくここで話ばかりしてるのもいけないし、会場入りするわよ。晃は愛ちゃんのガンプラを速くしまって」

晃は預かったアストレイロストフレームをケースに入れると、各々が服がキチンとしているか確認してから会場に入って行く。
受付を済ませてから開会式の場に向かうと、そこには同年代の男女が大勢おり、指定された場所に整列した。
美桜は霊香と合流してから別れ、２階の観戦席の方にいる。

『それではガンプラバトル地区大会開会式を行います！』

開催の宣言がされてから、次々と来賓が挨拶していく。

そしてついに……対戦相手の発表になった。

『それでは対戦相手の発表を行います！　抽選、スタート！』

ランダムで出場校の対戦相手が決まった中、亮たちは蒼城学園の名前を探している。

その名前は上の方に存在していた。

「初日、今日の第3試合ね。相手は……卍丞高校？」

「……聞いたことないところですね」

「だとしても全力全壊でいくわよ！」

「さっきの先輩の言葉……漢字が違う気がするのは俺だけか？」

ともかく、蒼城学園の1回戦の相手が決まった。

亮たちは果たしてこの地区大会を勝ち抜いていけるのだろうか。

食い千切らせてもらったわよ

亮たちはその日にバトルがある学校に与えられる控室に居た。
控室にはバトルの情況が判るようにＴＶや、作業机などが設置されている。

「それじゃ第１試合のメンバーを発表するわよ」

記入用紙を持っている桜がそう言うと、最後の点検などの作業を中断して視線が集まる。
晃だけは愛のアストレイロストフレームの改造に集中しているが、作業経過を観る限り試合には間に合わないであろう。

「１番手は私ね。あいにく私は突っ込む事しかできないから、切り込み役は任せてもらうわよ。それで２番手は亮くんだけど……問題ある？」
「問題ないですよ。勝利の栄光を確実にもたらしてみせます」
「最後は……志織ちゃんにお願いするわ。愛ちゃんが間に合うようなら問題なかったん

だけど、作業経過を見る限りね……」
「だ、大丈夫……です！　やってみせますから!!」
志織は緊張しているのか、顔を真っ赤にして珍しく大きな声でそう言った。
これで順番も決まった……後は試合開始まで待つばかりである。
『蒼城学園のメンバーの方はバトルフィールドの方へお願いします』
「出番ね……絶対に勝って、次に繋げるわよ！」
全員が頷き、片付けをしてから控室を出て、バトルフィールドへと向かった。
観客席は全て埋め尽くされ凄い歓声が響き渡っており、志織はかなり怖がっている。
『さぁ本日の第3試合、蒼城学園対卍丞高校になります！　1番手の方は筐体の前へ!!』
桜は自分の愛機を手に筐体の前まで行くと、反対側には男子生徒が同じ様に立っている。
バトル筐体にＧＰベースとガンプラをセットし、プラフスキー粒子が展開されて

フィールド――宇宙を形成した。

「行くわよトールギス……新しくなった貴方の初陣よ！　トールギスⅣ、獅子骨　桜で行くわよ!!」

カタパルトを飛び出した桜のトールギスは、普通のトールギスではなくなっていた。右腕にはリボルビング・ステークを装備し、左腕には三連チェーンガン、両肩には大量のベアリング弾を内蔵している。

全体の装甲もさらに強固になり、背部のスーパーバーニアも改造し今まで以上の加速性能を有しているのだ。

もはや別作品の機体と言える機体になってしまっている。

「良い加速ね！　さてと敵は……見付けた！」

相手の機体はビームライフルとシールドを持ち、灰色と黒色に塗装されたゲルググであった。

カスペン専用ゲルググをモチーフに組み上げられた機体であろう。

「とにかく先手は取らせてもらうわよ！」

トールギスⅣは左腕の三連チェーンガンを発射すると、ゲルググは回避してからビームライフルを発射してくる。

ビームを避け、トールギスⅣはそのまま加速して突撃した。

「初戦だし大盤振る舞いよ！　全弾持っていきなさい!!」

至近距離まで接近するとトールギスⅣの両肩が開き、大量のベアリング弾が発射される。

大量のベアリング弾にゲルググは驚き、慌ててシールドで防ぎ致命傷を避けるも、右腕を失いシールドもボロボロになってしまった。

そして動きが止まったゲルググの胸部に、トールギスⅣは容赦なくリボルビング・ステークを突き刺す。

「フフ……食い千切らせてもらったわよ」

桜は唇をペロッとなめるとリボルビング・ステークが鈍い音を立ててゲルググを貫き、バトルが終了する。

バトルが開始されてすぐの出来事で観客など付いていけておらず、数秒の間が空いてからわぁぁぁぁっと歓声があがった。

「どんなもんよー」

桜はトールギスⅣを持つと此方に見せつけるように突き出した。

かなり意外であった桜の勝利によって、蒼城学園はとてもいいスタートダッシュができた。

だが、まだまだバトルは続く。次は亮の番である。

「次もバッチリ決めてよね」

「わかってますよ、先輩」

亮は自分のヅダ改を見ると頷いて、桜とハイタッチして筐体の前に立った。

初めての公式戦であり、ヅダの存在を証明できる場でもある。
1度深呼吸をしてからＧＰベースとガンプラをセットし、プラフスキー粒子は再び宇宙空間を作り出す。

「矢倉　亮、ヅダ改、出撃する！」

カタパルトから宇宙空間に飛び出したヅダ改はすぐに敵を探す。
だが先にアラートが鳴り響き、メガ粒子の塊がすぐ横を通り抜けていく。
次第にメガ粒子は細くなり、ヅダ改が見た先にはビグロの下に大型のコンテナを搭載したビグ・ラングが現れていた。
周囲にはザク・マシンガンや対艦ロケットなど装備した、多数の駆逐モビルポッド――オッゴの姿もある。

「先輩の時のゲルググといい、ビグ・ラングとオッゴとか……俺と同じ同志かよ」

バトル中でありながら亮はつい微笑んでしまう。
このバトルが終わったら是非とも話し合いたいと思いながら、バトルが本格的に開始

された。
多数のオッゴが動き出し、ヅダに襲いかかる。
「って言うかこんなの有りなのかよ!」
いくらモビルポッドと言えど、1人で多数の相手をするようなモノだ。
オッゴから放たれる弾丸を避けながら、ヅダ改は対艦ライフルを発射する。
的確に1機ずつ落としていかなければビグ・ラングに戻り応急処置して再び戻ってきてしまう。さらにビグ・ラングからの攻撃にも注意しなければならない。
メガ粒子砲が直撃してしまったら、ヅダ改はひとたまりもない。
「ちょこまかしやがって……いい加減に落ちろ!」
対艦ライフルの残弾が少なくなり、痺れを切らしてビグ・ラングに最後の1発を発射した。
最後の1発はビグ・ラングに命中する前に、1機のオッゴが庇い防がれてしまう。
ヅダ改が対艦ライフルを投棄しザク・マシンガンを装備すると同時に、ビグ・ラング

がメガ粒子砲を発射した。

「このタイミングで撃つのかよ！」

ヅダ改はメガ粒子砲を避けるも、射線上にいたオッゴは薙ぎ払われた。
そのビグ・ラングの行動に亮は怒りを覚えてしまう。
ＭＳ　ＩＧＬＯＯの同志だと思えたが、今の攻撃で亮は違うと判断する。
これはガンプラバトルであると解ってはいるのだが、それでも亮は今の攻撃が許せないのだ。
残りのオッゴをザク・マシンガンで撃墜するとヅダ改はザク・マシンガンを手放す。
そしてヒート・パイルを装備すると同時に熱気を纏った。

「……終わらせてやる」

ビグ・ラングは対艦ミサイルを発射してくるが、突破してから一気にビグ・ラングに接近すると真っ正面からヒート・パイルを打ち込むのではなく、真上からヒート・パイルを打ち込んだ。

しかしヒート・パイルは鈍い音を立ててビグ・ラングに命中したのだが、一撃で決められなかった。
意外に硬いビグ・ラングに驚くも、続けてヒート・パイルを使用してバトルが終了する。

『初日の第3試合、卍丞高校と蒼城学園のバトルは蒼城学園が先に2勝したので蒼城学園の勝利となります』

アナウンスにより会場に歓声が沸き上がった。
亮もヅダ改を回収すると筐体から離れ模型部の仲間の方に行くと、全員とハイタッチをして喜びを分かち合う。
まずはストレートで初戦を突破出来た。
2回戦もこのようにすんなりと決まればいいのだが、そう甘くはないであろう。

撃たせる訳ねーだろ！

「っと言う訳で次の試合の1番手は志織ちゃんね」
「いや、いきなり過ぎでしょ先輩」

1回戦が終わった次の日、蒼城学園の面々は部室に集まっていた。
そしていきなり桜のこの発言である。
実は先日のバトルでトールギスⅣの不具合も見付かった上に、あまり弾もないのにベアリング弾も使い果たしてしまっていたのだ。
なので次のバトルは志織を1番手にし、同じく2番手に亮で3番手に愛の順番にしたのだ。
愛の機体も最終調整さえ済めば実戦に投入できる。
「後、亮くんの新型も使用可能だよ。地上限定だし……凄いマニアックかな？」
そう言って晃が取り出したのは紫色のイフリートであった。

両肩と臀部に計１０本のヒート・ダート、両腕には３連装ガトリング砲、両脚部に６連装ミサイルポッドと２本のヒート・ソード。

ＥＸＡＭシステムに加えて強力なジャミング機能を搭載している。

イフリート改、イフリート・ナハト、イフリート・シュナイドの３つを組み合わせた機体――イフリート・ブレイズだ。

カラーリングは夜戦等の事を考えて、イフリート・ナハトの紫色が採用されている。

「おー助かったよ。にしても……少し大きくないか？」

「うん、いくら同じ機体だからって詰め込んだらこうなったんだ」

そう、イフリート・ブレイズは元の機体よりも一回り以上大きいのだ。

しかし脚部の大出力バーニアもかなりカスタマイズされており、機動性はどのイフリートをも凌駕している。

「それと、こっちが愛ちゃんのアストレイロストフレーム聖（ひじり）だよ」

さらに晃は愛のアストレイロストフレーム聖を取り出した。

頭部はドライグヘッドに変更し、左腕にビームクローを内蔵しているシールド、背中には晃のオリジナルであるサバイヴストライカーを搭載している。

「へー、かなり綺麗な機体ね……なら試運転がてら2人でバトルしてみたら？　相手はコンピューターでも使って」

「そうですね……愛はどうする？」

「……うん、やる」

亮と愛は筐体の前に並び立つとバトルシステムが起動する。砂漠のフィールドを形成され、互いにＧＰベースとガンプラをセットした。

「矢倉　亮、イフリート・ブレイズ、出撃する！」

「……御影　愛、アストレイロストフレーム聖、行きます」

カタパルトから飛び出したイフリート・ブレイズは地上をホバリングで移動し、アストレイロストフレーム聖はその上空を飛んでいる。

アストレイロストフレーム聖の動きは、とても楽しそうな上に生き生きとしていた。

「……見つけた」
「早いな!?」

イフリート・ブレイズのセンサーではまだ敵を捉えていないが、アストレイロストフレーム聖のセンサーは確かに敵を捉えていた。
敵はブルーデスティニー1号機とアストレイゴールドフレーム天ミナである。

「……先行する」
「え、ちょっと待てよ！」

アストレイロストフレーム聖はサバイヴストライカーの翼から光の翼を展開し、爆発的な加速で残像を残し一気に間合いを詰めにかかった。
ヅダならば追い付けただろうが、今の機体はイフリートであるため付いていける訳がない。
先に敵の所にたどり着いたアストレイロストフレーム聖はアストレイゴールドフレーム天ミナと戦闘を開始した。

ＡＩとは言え愛にとってかつての愛機とのバトル……思うところがあるのだろう。
そんなアストレイロストフレーム聖をブルーデスティニー1号機がロックオンし、撃とうとした瞬間にブルーデスティニー1号機の腕が斬り落とされた。

「撃たせる訳ねーだろ！」

亮のイフリート・ブレイズである。
強力なジャマーのステルス能力により、アストレイロストフレーム聖に気を取られているブルーデステニー1号機の腕をヒート・ソードで斬り落としたのだ。
イフリート・ブレイズは続けてブルーデスティニー1号機の頭部に蹴りを入れ、体勢を崩させた所に脚部の6連装ミサイルポッドのミサイルを全弾発射する。
ブルーデスティニー1号機はミサイルを全弾受けて行動不能になった。

「中々の性能だなコイツ……さてと、愛の方はどうなんだ？」

空中ではアストレイロストフレーム聖とアストレイゴールドフレーム天ミナが未だ戦っていた。

だがアストレイロストフレーム聖の方が有利であると、これだけはハッキリとわかった。

「……天ミナ、今までありがとう。これで……終わり」

そう愛が呟くのが聞こえると、アストレイロストフレーム聖は決めにかかった。

突進してくるアストレイゴールドフレーム天ミナのタイミングに合わせ、ロストフレーム聖を中心にフィールドが広がる。

それが当たった瞬間にアストレイゴールドフレーム天ミナの動きは鈍り、アストレイロストフレーム聖は左腕に装備されたビームクローで相手の胸を突き刺した。

ビームクローをすぐに引き抜き連続して蹴りを入れ、最後の止めにかかと落としを決めアストレイゴールドフレーム天ミナを地面に叩き落とす。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

音声と共にバトルは終わる。

イフリート・ブレイズとアストレイロストフレーム聖の性能は、二人の想像以上で

あった。

この先、大会はさらに厳しくなるであろう。

戦力増加は非常にありがたい事であった……だがそれ以前に、２回戦の後にあんな事が起こるとは誰も予想してはいなかったのだ。

行くぞブレイズ!

色々（双雲がいきなり帰って来て、再びお土産渡されたり）とあって、あっという間に地区大会第２回戦当日となった。

今日は第１試合のため全員が早めに集まり、念入りに準備をしている。

「っと言うかヒルドルブ変わり過ぎじゃないか?」

「そ、そうでしょうか……」

１番手である志織の愛機であるヒルドルブを見たのだが、その姿はかなり変わっていた。

っと言うよりもヒルドルブではなく、桜と同じく別作品の機体になっている。

見るからに分厚い装甲、両腕には複数のマシンガンを束ねたオートキャノン、肩には何やら武器が内蔵されており背中にはアーム、ミサイルカーゴ、レールの３つで構成された非常に危険な匂いがする装備を装着していた。

「確かに……ヒルドルブだったってわかる部分は脚部と色だけ……かな？」

この装備には流石の晃も微苦笑していた。

蒼城学園模型部は段々と変な方向に進み始めているような気がしてならない。

『それでは第２回戦第１試合を始めます！　１番手の方は筐体前へ！』

「そ、それじゃあ……行ってきます……」

「おう、頑張れよ！」

見送られてから志織は筐体の前へ行き、深呼吸をするとＧＰベースとガンプラをセットする。

チームの流れを決める重要な一戦……志織はかなり緊張していた。

プラフスキー粒子でフィールド――アフリカ砂漠が形成される。

「神通　志織、ヒルドルブ・グングニール、出します」

カタパルトから飛び出したヒルドルブ・グングニールはグルグル回りながら着地をし

た。
見た目の割りに動きが機敏過ぎて、会場から「おぉー」っと歓声が上がる。
「全システム問題なし……行くよ、グングニール」
ヒルドルブ・グングニールは動き出し、双方はすぐにお互いに見付けた。
敵機は伏せの姿勢で走行しているオレンジ色の機体――ラゴゥである。
ヒルドルブ・グングニールは両腕のオートキャノンをラゴゥに向け……発射した。
『そんなのってあり?!』
その弾幕はとてつもなく、あまりの事にラゴゥを操縦している人物も驚いて、離れつつ逃げ回っている。
さらに追い討ちをかけるように、両肩からはミサイルが発射される。
この弾幕が酷すぎると思っていると弾切れなのか弾幕が薄くなり、ラゴゥの操縦者はチャンスと思い反転し向かうのだが、ヒルドルブ・グングニールは恐ろしい準備を開始していた。

背中に搭載されているパーツが組み立てられ、それは大空に向けられる。
あ、これは間に合わないかな？　っとラゴゥの操縦者は思ったが、自分のラゴゥのスピードを信じて突撃したのだが……無慈悲にそれは放たれる。
そして空高く撃ち上げられたミサイルはラゴゥ目掛け、落下してしてきた。

『うん……無理♪』

ラゴゥの操縦者はアッサリ諦めた。
ミサイルは避けたのだが、広範囲の爆風に呑まれてしまう。
それを見ていた亮たち蒼城学園の各々は……志織が搭載した武器にかなり引いてしまった。
あの装備だけは変更した方がいいのではないかと、真面目に考えてしまっている。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

ヒルドルブ・グングニールを回収して戻って来た志織は亮たちの様子を見て……不安になってしまう。

亮は志織の肩にポンっと手を置いてからすぐに筐体に向かった。
今回は地上戦なためヅダ改ではなく、イフリート・ブレイズの出番である。

『さ、さぁ次は2番手のバトルになります!』
「矢倉　亮、イフリート・ブレイズ、出撃する!」

イフリート・ブレイズはカタパルトを飛び出し、ホバリングしながらフィールドのギリギリな所を移動し始めた。
イフリート・ブレイズのステルス能力を生かし、闇討ちするつもりなのだが……この砂漠のフィールドでは隠れる所がまったくなく、正面での戦いになるであろう。
それでも少しでも有利に進めるために遠回りして、後ろから襲おうと考えているのだ。
目視でなければこのイフリート・ブレイズは見付からないはず……なのだが、すぐに見付かってしまった。
流石に砂漠に紫色は目立ってしまう。
敵機はフルアーマースレイヴ・レイスであった。

「今回のバトルは弾幕重視なのか？」

イフリート・ブレイズを見付けたフルアーマースレイブ・レイスは、背部７５㎜ガトリング砲とミサイルを遠慮なく発射してきた。

もっと距離が近ければイフリート・ブレイズにも出来ることがあるのだが、距離が遠ければフルアーマースレイブ・レイスの独壇場である。

「なら……やるしかないよな？　行くぞブレイズ！」

《ＥＸＡＭシステム、スタンバイ》

イフリート・ブレイズのカメラが赤くなり、動きが変わる。

イフリート改やブルーデスティニーシリーズに搭載されている、ニュータイプに打倒・駆逐するために作られたシステムだ。

イフリート改では短時間でオーバーヒートしてしまうため、長時間扱う事ができないのはイフリート・ブレイズでも変わらない。

「だから……一気に決めさせて貰うぞ！」

フルアーマースレイブ・レイスの背部７５㎜ガトリング砲を避けながら、ミサイルはヒート・ソードで斬り落とし接近して行く。

あまりの勢いで接近された事にフルアーマースレイブ・レイスは後ろに逃げようとするが、それよりも先にイフリート・ブレイズのヒート・ソードが背部７５㎜ガトリング砲を斬り裂いた。

「ここからは……俺のターンだッ!」

逃げようとするフルアーマースレイブ・レイスを逃がさず、左右のヒート・ソードを交互に振るいどんどん斬り刻んでいく。

亮にいたぶる趣味はないため、フルアーマースレイブ・レイスの武装を全て斬ると胴体を真っ二つに斬り裂いた。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

『勝者は蒼城学園！　前回も含めて４連勝だー!!』

亮はガッツポーズをして勝利に喜び、戻ると晃とハイタッチする。
連勝の波に乗れている蒼城学園はすぐに第2試合があるため、片付けをすると持ち場を空けてからロビーに移動した。

「Поздравляю（おめでとう）、兄さん。志織さんも流石だね」
「流石お兄ちゃんたちね！」

ロビーでは既に美桜と霊香が待っており、亮を見付けると勢い良く抱きつく。
そんな二人の頭を亮が撫でると、ニコニコと嬉しそうであった。

「蒼城学園の模型部の皆さまですね？」

ロビーで話をしていると、見知らぬ白髪混じりの男性が亮たちに話しかけてきた。
男性は燕尾服を着ておりここでは場外れな気もするが、動き一つ一つが違う。

「そうですけど、貴方は誰ですか？　っと言うか何の用なんです？」
「失礼しました。私の名はアンドレイと言う者で、本日は主がお呼びですので是非とも

御同行をお願いしたく思いまして」
「主？　……っと言うか見知らぬ人に付いていくと思ってるんですか？」

晃が最もらしい事を言うが、誘拐ならこんな人が多い所でする訳もないだろうと思い、何より蒼城学園全員と言うこともないであろう。
亮だけは主っと言う言葉に嫌な予感がしたが、真実を確かめるには付いて行くしかない。

「たぶん大丈夫だよ。付いて行こう」
「り、亮くん!?　本当に大丈夫なの？」
「俺の予想が正しければ……ですけどね。でも行くしかないでしょ先輩」

桜は亮の言葉に溜め息をつき、「仕方ないわね」っと呟いた。

「付いて行きますけど……本当に大丈夫なんですよね？」
「はい。それでは皆さま此方に……」

アンドレイが先導して駐車場に向かうと……そこには1台の高級車が止まっていた。

「り、リムジンとか……嘘でしょ?」

そう、駐車場に止まっていたのはリムジンであった。

お抱え運転手が運転することを前提とした大型の乗用車であり、セレブの必須アイテムではないかと思われる物だ。

「どうぞ皆さま」

アンドレイがドアを開け、恐る恐る順番に中に入って行ったのだが、桜や晃に霊香は非常にソワソワしている。

逆に亮や美桜は非常に落ち着いており、愛にいたっては何時も通りであるのだが。

リムジンは目的地を目指して動き出した。

「愛ちゃんはともかく……なんで亮くんたちは落ち着いてるの?」

「だいたい予想がついてるからと……過去に同じような経験があるからですよ、先輩」

「いったいどんな人生歩んでるのよ……」

リムジンはしばらく走り続け、とある建物の前で止まる。

「皆さま、到着致しました」

「う、嘘……」

「ここってこの辺で一番高いレストランじゃ……」

目的地はこの辺では一番有名で高いレストランで、普通ならば一生の内に来ることがあるかわからない店である。

アンドレイに案内されてエレベーターで最上階まで行くと、亮と美桜にとって予想通りの人物が待っていた。

「やっぱりお前かよ……アーニャ」

「久しぶりだお亮♪」

婚約者だお♪

とりあえず亮たちは準備された席に座る。目の前にはいかにも美味しそうな料理が並べられていた。

アーニャは綺麗に手馴れた様子で食べているのだが、他のメンバーはそうにもいかず……特に桜や志織、晃は手をつけられずにいる。

「どうしたお？　私が払うから遠慮せず食べていいんだお？」

「そ、そう言われてもね？　マナーとか全くわからないし……」

「そんな事なら気にしなくていいお。好きに食べていいんだお」

そう言われても、すぐに順応できる3人ではなかった。

亮や美桜は少しは馴れている様子で食べており、愛にいたっては何時も通り黙々と食べている。

「そ、それで……貴女は誰なの？　目的は何？」

流石に食べられないと思った桜はアーニャに質問をした。
アーニャはきょとんとしてから、口元をナプキンで拭うと微笑んだ。
「自己紹介を忘れてたお。私の名前はアーニャ・ベリャーエフで……亮の婚約者だお♪」
「「こ、婚約者ぁぁぁぁっ!?」」
アーニャの想定外の一言に桜と晃は思わず大声を出してしまう。
アーニャは2人の反応にニコニコとして楽しそうにしており、桜と晃は口をパクパクとしていた。
「訂正しておくけど嘘だからな?」
「Не лож(じゃない)ь!」
美桜はアーニャと亮のやり取りを見て、食事をしながらやれやれと肩を竦めてしまう。
志織にいたっては、何故か気を失っていた。

「何時も言ってるけど、兄さんは渡さないよ？」
「別に美桜の許可は求めてないお？」

アーニャと美桜の間で火花がバチバチと散っているのだが、机がバンッ！　と叩かれて視線が机を叩いた人物に集まった。
机を叩いたのは……何と大人しくご飯をモリモリ食べていた愛であるのだが、何時も通り無表情でありながらものすごいプレッシャーを放っている。

「……美桜ちゃんも、貴女も自分勝手。矢倉は……亮は私が貰う」
「はぁ!?」

亮は愛が話を終わらせるのだと思っていたのだが……さらに油を注ぐ。
っと言うよりも、愛も争いに参加表明したのだ。
これは流石に愛以外もさらに驚いてしまうのだが……1つだけ気になる事があった。

「なぁアーニャ……酒は出してないだろうな？」

「へ？　ликｅｒ酒は出してないも思うお？」
「ならなんで……愛の顔が赤くてフラフラしてんだよ！」

よく見ると愛の顔は赤くなっており、少しフラフラとしていた。
そして微妙にアルコールの匂いがしており、流石にこれは言い訳ができないであろう。
アーニャは慌てて店員に確認すると……アルコールが入った飲み物が出ていた事が判明した。
「も、申し訳ありません！　こちらの新人の不手際でお客様にご迷惑を!!」

すぐに店主らしき人物が出てきて、酒を持ってきた新人らしい人物と頭を下げていた。
愛はしばらく色々な事を言ったりしていたが、水を飲ませたら大人しくなり今は寝ている。
「私は別に構わないですけど……以後、こんなことがないようにしてくださいね？」

桜は店主と店員を対応しており、亮やアーニャ達は椅子に座って待っていた。
しばらくして桜が戻って来て、溜め息をつく。

「とりあえず……愛ちゃんを連れて帰りましょうか。もう遅いし、子供組も眠そうだしね」
「ですね。美桜と霊香、大丈夫か？」

美桜と霊香は眠そうに目を擦っていた。
時間も9時を回っており、美桜は既に寝ている時間である。

「なら皆送るお」

アーニャが手をパンパンと手を叩くと、複数の黒服の男性が集まる。
呼んでからすぐに集まる素早さは、驚くべきほど早かった。

「皆を家に送るお。あ、亮……明日、よく通ってる模型店で待ってるお♪」

黒服達は頷くと丁寧に先導して、亮は最後に出ようとするとアーニャはそう声をかける。

亮が振り返りアーニャの方を見たのだが、アーニャの姿は既にそこにはなかった。

もっと私と激しく踊ろうお！

翌日になり、亮はアーニャに言われた通り、亜御の家であるよく通ってる模型店に向かっていた。

勿論、美桜も付いて来ているのだが、亮は嫌な予感ばかりしている。

「で、こうなる訳だな」

亜御の家である模型店に着くと……予想通り、周囲をアーニャの雇っている黒服達が固めていた。

恐らくアーニャは店内にいるのだろう。

「矢倉様とその妹様ですね？　中で御嬢様がお待ちです」

黒服が出入口のドアを開け亮と美桜が店内に入ると、涙目の亜御とアーニャが待っていた。

「せ、先輩――!」
「っとと……どうしたんだ?」

亜御は我慢できなかったのか泣きながら亮に抱き付き、アーニャの後ろには黒い炎のようなものが見えたような気がした。
亮はとりあえず亜御の頭を撫でると、美桜が空いてる方の腕の袖を引っ張るので同じように頭を撫でる。

「コホンッ!　待ってたお亮」
「呼ばれたからには来るけどな……何があったら亜御がこんな風になるんだ?」
「それは秘密だお♪　それよりも、早速始めようお……ガンプラバトル」

そう言うと、アーニャはガンダムＦ９１のガンプラを取り出した。
出来栄えからしてかなり高性能な機体であることが予想できる。

「ったく……仕方ねーな。挑まれたからにはやってやるよ」

「それでこそ亮だお♪」

アーニャの手下が準備を進めていく中で、美桜が亮の服の裾を引っ張った。
美桜の顔は変化が乏しいはずなのだが、亮からすれば心配しているということがすぐにわかる。

「大丈夫だよ。アーニャだって俺が大会中っていうことわかってるだろうしな」
「……だといいんだけど」

亮はアーニャと筐体を挟み反対側に立ち、愛機であるヅダ改を取り出す。
ガンダムＦ９１が相手ならば、イフリート・ブレイズよりも高い機動力を持つヅダの方がいいであろう。
バトルシステムが起動し、バトルフィールドである宇宙がプラフスキー粒子によって形成される。

「矢倉　亮、ヅダ改、出撃する！」
「アーニャ・ベリャーエフ……ガンダムＦ９１ミチエーリ、行くお♪」

カタパルトから宇宙空間に飛び出したヅダ改。今回は対艦ライフルは装備しておらず、右手にはザク・マシンガンを装備していた。
動きが速いガンダムＦ９１ミチエーリに対しては、連射が効かない武器より連射の効くザク・マシンガンの方がいいと判断したのだ。

「……見つけた!」

ヅダ改の前方に右手にビーム・ライフルを持ち、左肩にビーム・ランチャーを担いでいるガンダムＦ９１ミチエーリが接近してきていた。
ガンダムＦ９１ミチエーリのアーニャもこちらに気づいているのだろう。
ヅダ改目掛けてビーム・ランチャーを３連射し、ヅダ改はバレルロールしながらビームを回避するとシュツルム・ファウストを発射した。

「そんな遅いの当たらないお!」
「だろうな。だからこうするんだよ!」
「ヲッ?!」

ガンダムＦ９１ミチエーリはシュツルム・ファウストを回避しようとするが、ヅダ改が放ったザク・マシンガンの弾がシュツルム・ファウストに当たり爆発させる。
爆発に巻き込まれたガンダムＦ９１ミチエーリはビーム・ランチャーを失ってしまう。機体の装甲は汚れた程度であったが武器を１つ奪うことができた。

「流石だお亮……いきなり激しくて、身体が火照ってきたお♪」
「お前も変態かよ！　いや、わかってたけどな!!」

アーニャの相変わらずの発言に亮は少し引いてしまうも、律儀にツッコミを入れた。
変わっていないことを喜ぶべきなのだろうが、亮的に言えばああいった所は変わっていて欲しかった。

「さぁ、もっと私と激しく踊ろうお！」
「出来れば遠慮したいけどな……」

すでに亮は精神的に疲れてしまったが、バトルはまだ始まったばかりなのであった。

当たれよ！

ガンダムＦ９１ミチエーリとヅダ改の戦闘は、亮のＳＡＮ値をガリガリと削っていた。

主にアーニャの発言が原因なのだが……それでも亮は必死にバトルをしている。

「やっぱり亮とのダンスは楽しいお！」

「俺は楽しくねーよ！」

アーニャはお嬢様のはずなのだが、色々な意味で美桜の教育に悪い発言を連発していた。

美桜は持ち前のポーカーフェイスで悟られないようにしているが、亜御は顔を真っ赤にして俯いている。

「当たれよ！」

ヅダ改はザク・マシンガンを撃ち続けていた。
戦況はヅダ改の方が押されているのだ。
中々の高機動機のヅダ改なのだが、アーニャのガンダムＦ９１ミチエーリの方が機動力や火力が高い。
しかも、実弾兵装ばかりのヅダはこのままでは全て撃ち尽くしてしまう。
「このままだとジリ貧……ならやるしかないな！」
ヅダ改のメインカメラが強く輝き、機体は熱気を纏い加速した。
ブーストを解放したのだ。
関節にかかる負荷や土星エンジンの限界ギリギリで動き続け、ガンダムＦ９１ミエチーリを翻弄する。
「とった！」
ヅダ改はガンダムＦ９１ミエチーリの後ろを取り、左手に所持していたヒート・ホークを振り下ろすと……相手はまるでそこにはいなかったかの様に消える。

慌てて周囲を確認すると、今度は後方から迫って来ているガンダムＦ９１ミエチーリを発見し、すかさずザク・マシンガンを発射するのだが先程と同様に当たったと思った瞬間に消えてしまう。

「質量を持った残像……ＭＥＰＥかよ」

「流石だお、亮……本当なら使う気はなかったのに、使わせるなんて」

落ちついて周囲を見ると、そこには金色の光を纏ったガンダムＦ９１ミエチーリが数機いた。

質量を持った残像――ＭＥＰＥはガンダムＦ９１が最大稼動モードの時に塗装が剥離してセンサーが誤認してしまい、相手はまるで分身したかの様に捉えてしまうのだ。

そしてヅダ改のすぐ後ろにガンダムＦ９１ミエチーリが現れた。ビーム・ライフルを構え、その銃口には粒子が集まっていく。

「させるかよ！」

すぐさまヒート・ホークを振るうが空を斬る。

そしてガンダムＦ９１ミエチーリはヅダ改の右側に現れるとビーム・ライフルを発射し、ヅダ改は避けようとするも右肩が持っていかれてしまう。これによって射撃武器であるザク・マシンガンと一撃必殺の武器であるヒート・パイルを失ってしまった。

ガンダムＦ９１ミエチーリは攻撃の手を緩めず、ヅダ改はダメージが増えていき、じわりじわりと追い詰められていった。

「ほらほらどうしたお？　このまま終わる亮じゃないはずお!!」

「お前に……言われるまでもねぇよ!!」

ヅダ改は残された左肩のシールドの武器であるシールド・ピックを起動させ、自分の背後へと振り向きながら突き出した。

「ヲッ!?」

「そこから来ると思ってたんだよ！」

シールド・ピックは突如現れたガンダムＦ９１ミエチーリの胸部を貫いた。

亮の攻撃がこのまま終わる訳もなく、シールド・シザーも起動させ逃がさぬように挟

み込み、ガンダムＦ９１ミチエーリを頭上へと持ち上げる。

「切り裂けぇぇぇぇぇぇ！」

シールド・シザーはガンダムＦ９１ミエチーリを真っ二つに切り裂き、アーニャとのバトルが終了した。

ヅダ改の損傷は大きいが、辛くも勝利できたのだ。

「ｘｏｐｏｍｏ（すぱらしい）！　流石は兄さんだね」

「先輩、流石です！」

美桜と亜御は勝利を祝福してくれたが、亮は素直に喜べなかった。

今回はアーニャがどう攻撃してくるかがとっさに予測できたから勝てたが、次もそうやって勝てるかわからない。

この先のバトルは激化していくはず……亮がどうするべきか悩んでいると、アーニャがタックルの如く抱きついてきた。

倒れはしなかったが体勢を少し崩しながらも、亮はアーニャを抱き止める。

「っと……危ねーだ「やっぱり亮は凄いお！」人の話を聞け！」

アーニャは亮の胸に顔を埋め、亜御と美桜はその様子を羨ましそうに見て、亮は本日何度目になるかわからない溜め息をついた。

新型をロールアウトするわよ

アーニャとのバトルの翌日、亮のクラスにアーニャが転入してきた。
見た目は美少女とも呼べるアーニャにクラスの男子中が喜び、歓喜したのだが……

「亮の婚約者だお♪」

この一言でクラス中が凍り付き、男子の視線が亮に集まった。
亮はマズイと思い教室から逃げようとしたのだが……クラス中の男子に回り込まれて、逃げ場を失ってしまう。
男子たちの思いを知ってか、知らずか……アーニャはニコニコと笑顔で立っている。
ちなみに愛はモクモクと甘いお菓子を食べている。

「さーて……矢倉～詳しく話を聞かせてもらおうか～？」

「ちょっ、今から一時間目だろ？　授業の邪魔したら駄目だと思うぞ？」
「それなら問題ないぞー先生が婚約者発言の時に泣きながら走ってどっか行ったし」

ちなみに亮のクラスの担任は年齢＝彼女いない歴で、独身であるために生徒に婚約者がいるのが耐えられなかったのであろう。

実はアーニャが勝手に言っているだけなのだが、それを知らないクラス中の男子と担任を敵にまわしてしまい、一時間目の授業はその誤解を解く時間に費やした。

そんな波乱な午前中であったが、その日1日の授業が終わるとアーニャや美桜、霊香を含む模型部の全員が部室に集合していた。

アーニャに関しては本日付で模型部に正式に入部したことになっている。

「全員いるわねー？　なら……次の試合に向けてミーティングするわよ！」
「本当にいきなりっすね……」
「とにかく、黙ってこれを観てもらうわよ」

桜はＴＶ（アーニャが持ってきた）の隣に立ち、ＤＶＤプレーヤー（これもアーニャが持ってきた）にディスクを入れる。

ＴＶに映し出されのは……女子制服に身を包んだゴリラであった。
それを観た亮は席から落ちかけ、口をぱくぱくさせてＴＶを指差す。
「な、ななな……」
「……？　亮はいったいどうしたお？」
「あー理由はまた今度説明するとして……とにかく次の相手は彼女たちよ」
よく観ると、女ゴリラの後ろには穂香や愛にとっての仇とも言える男子生徒が立っている。
いつも無表情の愛も、あの男子生徒が見えた瞬間に険しい表情になったように見えた。
「１度バトルしたからわかると思うけど……強いわよ、彼女たちは。アーニャちゃんが調べてくれたからわかったことけど、メスゴリラは亮くんに負けてから武者修行に出てたらしいわ」
映像は流れ続け、あのメスゴリラのピンク色のボルトガンダムや男子生徒のトールギ

スⅡが連勝して映像が終わった。
　確かにピンク色のボルトガンダムは色々な意味でレベルアップしているのがわかり、トールギスⅡの戦い方はまるで変わっていない。
「全部この２人で勝ち上がってるから鬼龍寺さんの機体情報は少ないけど……少なくとも私たちの誰よりも強いわよ。勝てるかもしれないのは亮くんぐらいね。だから少しでも勝てる確率を上げるために晃には無理言ったけど、亮くんのヅダの新型をロールアウトするわよ」
「って事は俺が３番手って事っすか？　それより新型とか……聞いてないですよ？」
「まぁ伝えてなかったからね。改よりピーキーな機体だよ？　だけど……まだ完成度は６０％ぐらいかな。もっとも、その段階で改より性能はいいはずだけど。アーニャさんにも手伝ってもらってるから、もう少しはいけると思うよ」
「亮のために頑張るお！」
　それを聞いて新型のヅダに期待出来そうだなっと亮は思うが、ふと愛の方を見ると……

「とてもЖ燃えているeниeね」

美桜の言った通り、愛はとても燃えていた。

仕方なくもあるのだが、張り切りすぎて空回りしなければいいのだが。

「来る順番は変わらないとして……防御面や火力面を考えてメスゴリラは私が相手するわ。愛ちゃんはアイツにリベンジ、亮くんはさっき言った通りね」

「……了解」

「わかりました」

愛と亮は桜の言葉に頷き、其々がやるべき事を始めた。

決着をつけるわよ！

大会当日、亮たちはアーニャのリムジンで会場に向かい、控え室にて出番が来るのを待っていた。

本当は前回などと同じく現地集合にしようとしたのだが、今回の大会に出ることができないアーニャがせめてサポートしたいと言うことで、色々とサポートしてもらう事になっている。

だが……お金持ちのサポートは亮たちが考えていたサポートとかなり違っていた。

何から何まで一流でお金がかかっているため、亮や美桜は少しは慣れてはいるが庶民的な桜たちは戸惑ってしまい、アーニャは懇願されてなるべく普通なサポートぐらいになった。

そして桜は例のゴリラ女と向かい合っている。

「私の相手は貴女なのね。私の王子様出ないのは残念だけど……あの方以外、私のビューティフルなボルトガンダムちゃんに傷つけられないわよ！　ウホホホホ!!」

「それはどうかしらね？　私の杭に貫けない物はないわよ？」

お互いに牽制し合い、ガンプラバトルのシステムが起動してプラフスキー粒子が今回のバトルフィールドである月面を形成する。

「トールギスⅣ、獅子骨　桜で行くわよ!!」

バトルフィールドに飛び出したトールギスⅣとあの時よりカスタマイズされているピンク色のボルトガンダム。

左腕はＭＳが掴めるぐらい大きく、かなり異様な機体になっていた。

「ウホホホホ！　さぁ始めるわよ、ボルトガンダムヴィーナス!!」

「そんなゴツゴツなのが何処がヴィーナスなのよ！　って嘘!?」

ボルトガンダムヴィーナスは左腕を殴るように突き出すと、巨大な左腕はまるでロケットパンチのようにトールギスⅣに飛んで来た。

桜は意表を突かれてしまうがギリギリの所で左腕をかわし、左腕の三連チェーンガン

を放つがボルトガンダムヴィーナスは正面から受けるも全くダメージがなく、あの巨大な左腕も元通りに戻った。

「やっぱり三連チェーンガンだと無理なようね！　なら……突っ込む!!」

「そう簡単にはいかないわよ！」

トールギスⅣはブーストを全開にして突撃すると、ボルトガンダムヴィーナスは４門のバルカン砲で牽制射撃を始めた。

４門のバルカン砲をトールギスⅣは正面から受けるも、持ち前の厚い装甲で防ぎつつ無視して突撃する。

「この距離！　貰ったわよ!!」

「ウホホホホ！　この距離は私の距離でもあるのよ！」

ボルトガンダムヴィーナスに接近したトールギスⅣは右腕のリボルビング・ステークで貫こうとするが、桜は勝負を急ぎ過ぎてしまった。

リボルビング・ステークがボルトガンダムヴィーナスに当たる直前に、ボルトガンダ

ムヴィーナスは右肩の鉄球を射出し、それはトールギスⅣの左肩に命中。左肩を完全に破壊してしまう。
左肩を破壊されバランスを崩したトールギスⅣに追い討ちをかけるように、ボルトガンダムヴィーナスはビーム・チェーンで射出した鉄球を捉えた。

「まだこれが残ってるわよ！」

ボルトガンダムヴィーナスがグラビトン・ハンマーを振り回す前に、トールギスⅣは右肩を開きベアリング弾を発射する。
流石のボルトガンダムヴィーナスも近距離で発射されたベアリング弾に驚き、巨大な左腕でガードして致命傷は免れるも左腕はボロボロになってしまった。
トールギスⅣとボルトガンダムヴィーナスはお互いに距離を取り睨み合った。

「ウホホ！　私の王子様程じゃないけど、貴女もやるようね！」
「お褒めに預かり光栄だけど、貴女も修行してたって情報は嘘じゃないみたいね」
「私の王子様との戦いのために会得したのだけど、貴女には見せるに値する相手……私の全力を持って相手をするわよ！　ウゥゥゥゥゥゥッホォォォォォォォォッ!!」

叫びと共にボルトガンダムヴィーナスの足元はひび割れ全身は金色に光り輝きだす。
明鏡止水の境地に達した時に発動する事ができるハイパーモードである。

「必殺！　ガイア……クラッシャァァァァァァッ!!」

ボルトガンダムヴィーナスは足元を殴ると、地面は巨大な針山のように隆起してトールギスⅣに襲いかかった。
このバトルを見ている誰もが勝敗が決したと思ったが、それはまだ早かった。

「ハァァァァァァッ!」

桜は巧みにトールギスⅣを操り、ガイア・クラッシャーで隆起した巨大な針山の僅かな隙間を縫うように高速移動していた。

「その腕……貰うわよッ!!」

大技を使用して動きが止まっているボルトガンダムヴィーナスに接近したトールギスⅣは、リボルビング・ステークを使用する。
一撃だけではボルトガンダムヴィーナスの巨大な左腕は貫けず、トールギスⅣは続けて二撃目を打ち込み完全に破壊する。
トールギスⅣはそのまま通り過ぎて行き、振り向いて色が元通りになったボルトガンダムヴィーナスと睨み会う。

「お互いに損傷具合からして後一撃ってところね……さぁ決着をつけるわよ！」
「望むところよ！　ウゥゥゥゥゥゥッホォォォォォォォォォッ!!」

背部のスーパーバーニアを吹かして接近するトールギスⅣと、再びハイパーモードで金色に光り輝き待ち構えるボルトガンダムヴィーナス。
トールギスⅣは右腕のリボルビング・ステークがボルトガンダムヴィーナスの胸部を貫き、ボルトガンダムヴィーナスの右腕がトールギスⅣの胸部を貫く。
この２機はお互いに同時に胸部を貫いたのだ。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

会場は静まり返り、バトルの結果が発表されるのを待った。

『け、結果は今大会初の引き分けだーー！』

発表されたバトルの結果に歓声が上がり、こうして第一バトルは終了した。

これで、おしまい

「勝てなかったわ……ごめんなさいね、皆」
「大丈夫ですよ先輩。後は俺達で何とかしますから」

申し訳なさそうに戻って来た桜に亮はそう告げた。
勝てはしなかったが、負けてもいないためまだ勝負の行方はわからないのだ。
そして何より次のファイターはリベンジに静かに燃えている愛である。

「……それじゃ、行ってくる」
「あんまり力むなよ？　聖と普段のお前なら絶対に勝てる」

チョコレートを一口食べた愛は静かに立ち上がり筐体に向かう前に、亮は愛に一言声をかける。愛は静かに頷き、筐体へと近づいて行った。
筐体の反対側には既に微笑んでいる例の相手が待っていた。

「お久し振りですね。あの時より、少しは成長されたのですか？」

相手の問いかけに答えず瞳を閉じ、自分の内から語りかけてくる黒い何かを抑え込んでいた。

先ほど亮に言われた言葉を思い返し微笑んだのだが、誰にも気付かれなかった。

「……話すことはない。早く始めよう」

「いいでしょう。こちらも余計な手間は少ない方がいいですしね」

２人はガンプラをセットし、再びプラフスキー粒子がフィールドを形成する。

フィールドは同じ月面で先ほどのバトルの影響が残っており、隆起した巨大な針山があった。

「……御影　愛、アストレイロストフレーム聖、行きます」

月面に飛び出したロストフレームは直ぐに相手のトールギスⅡを発見する。

前回同様に待っているような事はなく、トールギスⅡも飛んで来ていた。

「……天ミナの仇、とらせてもらう」
「できますかね？　あの時、手も足も出なかったのに」

トールギスⅡはドーバーガンからビームを放ち、ロストフレームはそれを難なくかわすとトリケロス改からお返しとばかりにビームを発射した。
ロストフレームから放たれたビームはトールギスⅡに当たる事はなかったが、わかりきっていた事であった。

「……行くよ、聖」

愛がそう呟くとロストフレームのアンテナからビームが放出される。
アストレイレッドドラゴンの頭部ユニットである、ミラージュコロイドによる制御機能とセンサーを強化するドライグヘッドによる物だ。
そしてロストフレームは同時に背部のサバイヴストライカーから、光の翼であるヴォワチュール・リュミエールも使用して残像を残しつつ移動する。

「なるほど。中々の機体性能のようですが……その程度では私は倒せませんよ」

トールギスⅡは再びロストフレームを狙いドーバーガンを狙いビームを放つが、残像を残しつつ移動するロストフレームにビームは当たる事なく、みるみる距離が縮まっていく。

ロストフレームとトールギスⅡの距離が近距離戦の間合いになると、ロストフレームは両腰からビームアンカーを射出した。

「クッ！　まさかアンカーとは……ですが！」

「……遅い」

ビームアンカーはトールギスⅡの左肩に突き刺さり、その左肩をもぎ取ってしまう。

直ぐ様トールギスⅡがドーバーガンからビームを放ち反撃してくるが、残像を残しつつ移動するロストフレームにかすりもしなかった。

「この短期間でここまで……ッ!!」

トールギスⅡは左肩を失った事でシールドとシールド裏に格納していたビーム・サーベルを失ってしまい、残されている武器はドーバーガンのみであった。
何とか距離を取ろうとトールギスⅡは背部のスーパーバーニアをフル稼働させるが、ヴォワチュール・リュミエールを使用しドライグヘッドによりセンサー等が強化されているロストフレームから逃れる事は出来なかった。

「……すぐに終わらせる」

ロストフレームはヴォワチュール・リュミエールを解除すると、今度はミラージュコロイドを起動して姿を消してしまう。
トールギスⅡは姿を消したロストフレームを警戒し、背後を特に警戒したのだが……その予想を反しすぐ目の前にロストフレームは姿を現した。

「……これで、おしまい」
「そんな……バカな……!?」

ロストフレーム左腕に装備されたビームクロー内蔵シールドからビームクローを展

開し、トールギスⅡの腹部に何度も突き刺す。
そして終わりとばかりにトールギスⅡの上へ飛び上がり、トリケロス改で唐竹割りにしてトールギスⅡを撃破した。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

天ミナの仇を取りリベンジを成功したことに、愛は嬉しそうに微笑んだ。

この瞬間を待ってたんだよ！

「調整はここまで、かな……後は頼んだよ亮くん」
「これが新型のヅダ……」

晃はギリギリまで調整していた黒色の新型のヅダを亮に手渡した。
晃が今できる限りの全てを注ぎ込んだガンプラである。

「機体名はヅダＶＤ。まだ未完成の部分があるけど、機体性能は今までで一番いいよ。ぶっつけ本番になるけど大丈夫かな？」
「ぶっつけ本番には馴れてるから大丈夫だよ」

晃はヅダＶＤを渡す時に耳打ちをし、亮は頷く。戻って来た愛とハイタッチを交わし、筐体の前に立つと穂香が既に待っていた。

「まさかこの段階で僕まで回ってくるとはね……君たちを侮っていたよ」

「油断とか、慢心をしてると足下をすくわれるっすよ?」
「ならせいぜいすくってみるんだな」

お互いにガンプラをセットすると再びプラフスキー粒子が月面を形成する。

「矢倉　亮、ヅダＶＤ、出撃する!」

カタパルトから飛び出すと、前方からは緑色の粒子を放出するガンプラが接近してくる。

両肩にはダブルオークアンタのＧＮソードビットがマウントされている、ＧＮシールドを装備しているダブルオーガンダム。

「クアンタムライザー!……気に食わないが彼が僕のために考えたガンプラだ。徹底的にやらせてもらうぞ」
「やれるもんならやってみろ!」

クアンタムライザーはＧＮシールドにマウントしたＧＮソードビット、計１２基を射

出し左右の腰にマウントしていたＧＮソードＶを両手に持つと、ライフルモードでビームを放ってきた。
全方位から襲い掛かるソードビットと放たれるビームを紙一重で避けるもそれらは表面を掠めていく。しかしヅダＶＤは速度を緩めることなく、一直線にクアンタムライザーに接近していく。

「この距離なら！」
「こちらの距離でもある！」

射程距離まで接近したヅダＶＤは右手に持ったビーム・マシンガンを発射する。それと同時に左手に持った大型のシールド――六型丙が形を変え、クローになった。
対してクアンタムライザーは右手に持ったＧＮソードＶをソードモードにし、左手に持ったＧＮソードＶはライフルモードのままビームを放つ。そしてお互いに近接戦闘の間合いまで近づいていった。
ヅダＶＤを両断しようと襲い掛かるＧＮソードＶを六型丙のクローモードで受け止める。僅かに動きが止まったヅダＶＤの隙を見逃さず、ソードビットが襲い掛かった。

「やられるかよ！」

背後から迫るソードビットがヅダＶＤに当たる前にクアンタムライザーの腹部に蹴りをいれ、上方に加速してソードビットを回避する。

クアンタムライザーが体勢を立て直すと同時にソードビットはＧＮシールドへと戻っていった。

「やはり君はそれなりにやるみたいだな。だから……少しだが全力を出してあげよう」

再び計１２基のソードビットを展開すると、それらはクアンタムライザーの周りを回り始める。

すると徐々に粒子の放出量が増え、穂香が小声で「トランザム」と言うと、クアンタムライザーは赤く発光した。

「そっちがそのつもりなら……行くぞヅダ！」

クアンタムライザーがトランザムを発動させたのを確認すると、ヅダＶＤも負けじとブースト解放をして熱気を纏う。

ヅダ改より安定しているのだが、それでも１つのミスでエンジンが暴走して自爆してしまう危険性は高い。

お互い同時に動き出して武器をぶつけ合うが……ヅダＶＤの方がクアンタムライザーに押されていた。

計１２基のソードビットによる全方位からの攻撃、２本のＧＮソードＶによる連撃……まだ致命傷は受けてはいないのだが、このままでは負けてしまう。

「ほらどうした！　君の実力はその程度なのか!!」

「クソ！　まだだ!!」

亮の脳裏には一瞬、相手のトランザムの終了まで耐え切れば……との考えがよぎったが、この猛攻にヅダＶＤが耐えきれる確率は低い。今も限界ギリギリの機動をしているのだ。

「……この程度のようだな。君には期待していたけれど、時間をかけることも無意

味のようだ。次の一撃で決めよう」

半分の6基のソードビットがクアンタムライザーの元に戻って行き、右手に持っているＧＮソードＶへと集まっていく。

「これで……終わりだッ!!」

バスターライフルモードのＧＮソードＶをヅダＶＤに向け、そこから極太のビームが放たれた。ビームはそのまま月面に当たり、それを振り回して月を斬り裂いていく。

大量の砂埃が舞い上がり、クアンタムライザーは同時にトランザムを解除して、ソードビットもＧＮシールドへと戻っていった。

「呆気ないものだな……」

舞い上がっている砂埃を見つめ、穂香は期待していた分落胆してしまう。

会場中がもう終わったと思っていたが、蒼城学園のメンバーはまだ亮の事を信じていた。

まだ終わっていないと。
その瞬間……砂埃の中から先ほどより熱い熱気を纏い、あちこちから放電を放つヅダＶＤが現れた。
そのスピードは先ほどより速く、クアンタムライザーとの間合いを一瞬で詰める。
晃がヅダＶＤに組み込んだ新機能……ヅダＶＤの限界を超えて加速するシステム、アンリミテッド・オーバー・ブースト――ＡＯＢ。

「この瞬間を待ってたんだよ！」

ヅダＶＤの右手には改良型ヒート・パイル――電が握られており、突撃のスピードを維持したまま電をクアンタムライザーに撃ち込んだ。

「なるほど……僕も少し油断してたみたいだな」
「チッ……少しズレたのかよ！」

電の一撃はクアンタムライザーの左肩を奪ったが、向こうはまだ戦える状態なのに対してヅダＶＤは電を撃ち込んだ状態で止まってしまい、メインカメラからも光は失われ

ていた。
一瞬だが限界を超えた性能を発揮したＡＯＢの代償で、全ての機能が停止してしまったのだ。
「フッ……今の一撃で全てを使いきったようだな。先ほどの言葉は撤回しよう……君は僕の予想以上だったよ」
トランザム使用後で性能が極端に落ちているクアンタムライザーはゆっくりとヅダＶＤに近づき、右手に持ったＧＮソードＶを振り上げた。
「頼む……動いてくれヅダ！　こんな所で……まだ、まだ終われないんだよ!!」
「これで終わりだ！」
その亮の声に応えてか……メインカメラに再び光が灯り、ヅダＶＤは弾切れの電を投げ捨て降り下ろされようとしていたＧＮソードＶを持ったその右腕を掴んでいた。
ヅダＶＤはクアンタムライザーを蹴飛ばし、何時まで動いてくれるかわからないためとっておきの新兵器である武器を左肩のハンガーユニットから取り出す。

「クッ！　ソードビット!!」
「斬り裂けぇぇぇぇぇぇぇッ!!」

　左手に持った新兵器を振りながらトリガーを引いた瞬間、高出力のビーム刃がソードビットとクアンタムライザーをまとめて斬り裂いた。

「俺の……勝ちだ……」
「ああ……君の、勝ちだな」

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ』

　会場からは今まで以上の歓声が上がり、激闘を見せてくれた二人を称える。穂香は負けたはずなのに満足そうにしており、ゆっくりとした足取りで亮に近づき握手を求めてきた。

「見事に足元をすくわれてしまったよ。私たちに勝ったんだから、絶対に優勝するんだ

ぞ？」

「優勝してみせますよ。ヅダの勇姿を世界に届けたいですから」

亮と穂香はしっかりと握手をして、そこで今回のバトルの終了が告げられた。蒼城学園の勝利という結果と共に……。

スゲー視線が痛いんだけど

大会の翌日、亮たち模型部は活動を休み各々がやるべき事をしていた。
トールギスⅣはボルトガンダムヴィーナスと相討ちで大破したためほぼ全てを修理で、ヅダＶＤはあちこちを損傷している上にＡＯＢの使用した事で何処にどのような負荷が生じているかわからないためオーバーホールすることになっている。

「で、どうしてこうなってんだよ」
「たまには付き合ってくれてもいいと思うお？」

普通なら亮の隣にピッタリついている美桜や霊香の姿はなく、亮とアーニャは２人きりでデパートに来ている。
美桜と霊香はこの日だけはどうして外せない用事があるらしく、２人はとても悔しそうにしていた。
アーニャは亮と２人きりという事でとても嬉しそうにしており、小声で「Дａｔａ（データ）」と呟き、触角のように１本だけ跳ねているアホ毛がピコピコと反応して左右

に揺れている。

「ったく……ん？」

「？　どうしたお？」

亮はいきなり立ち止まりアーニャは首を傾げる。亮はある方向を指差すと、そこにはセミショートの艶やかな黒髪をした女子学生とオレンジ色のポニーテールの女子学生がいた。

アーニャが首を傾げていると亮は近付いて行き、アーニャも少し遅れて後を追いかける。

「どうもお久しぶりですね」

「美桜ちゃんのお兄さん？」

亮が挨拶したのは静岡で行われた全国レディースガンプラコンテストの本選に出場し、優勝したファイター――七種（さえぐさ）　真幸（まさき）……またの名を勝利の女神（アテナ）と呼ばれる人物であった。

◇

亮たちはデパート内にあるカフェに移動していた。
あのまま立ち話でも良かったのだが、折角なのでカフェでゆっくり話をしようという事になったのだ。
もう1つ理由はあるのだが……それはカフェに来ても変わらなかった。
むしろカフェに来た方が先ほどより酷くなっている。

「……スゲー視線が痛いんだけど」

男が1人に対して美女が3人……この状況を目の前にして妬(ねた)まない男がいるのだろうか？
ちなみに、長いオレンジ色の髪をポニーテールにした女子学生は夜天嬢雅(やてんじょうが)　八々(やや)と言い、少し変わった口調をしていた。

「今回は大会優勝おめでとうって言わせてもらうよ」

「ありがとうございます。そういう美桜ちゃんのお兄さんも頑張ってるみたいですね」

各々が頼んだ物を飲みながらお互いの結果を称えあっていた。

「お主もガンプラバトルをしておるのじゃな」

「ああ。えっと、夜天……」

「呼び辛いようなら八々でよいぞ」

「ならお言葉に甘えて八々さんって呼ばせてもら「うがーっ!!」いきなりどうしたんだよアーニャ?」

真幸と八々と話をしているとアーニャがいきなり立ち上がり、吠えた。

アーニャは不機嫌そうな顔をして、ビシッと真幸たちを指差した。

「Леди(貴女), кто(たち)! 私たちとガンプラバトルするお!」

「いきなり何言ってんだよアーニャ!?」

いきなりのアーニャの発言に亮は驚き、真幸と八々はポカーンとしていた。

「それに〝たち〟って俺は今日使えるヅダは持って来てねーぞ！」
「……使えぬヅダは持って来ておるのか？」

亮の使えるヅダを持って来ていない発言に八々はツッコミを入れるが、一応亮の鞄の中には先ほど購入したガンプラの箱……もちろんヅダであるのだが、持っているのだ。

「それは心配無用お」

アーニャが手をパンパンと叩くと何処からともなく黒服たちが現れ、ガンダムＦ９１ミチエーリと晃に預けているはずのヅダＶＤを持って来ていた。

「なんでヅダＶＤがあるんだよ!?」
「製作を手伝ったから、それを複製するのも簡単だお。もちろんスペックはこの前のバトルで使ったのと同じだお♪」
「はぁ……ガンプラあるなら俺は構わないけど、そっちはどうする？」

亮は溜め息をつくと真幸と八々の方をチラリと見る。

「儂は武士じゃ！　挑まれたバトルは承けるぞ！　の、真幸！」

「うん！」

２人は準備は出来ていると言わんばかりに各々のガンプラを取り出し、亮は仕方ないと言わんばかりにアーニャ複製のヅダＶＤを手に取る。

「なら一致、レディース優勝ファイターの実力を見せてもらうか！」

「私と亮と組むんだお！　負けるはずがないお!!」

４人はこのカフェに設置されている筐体の所に行き、ＧＰベースをセットする。

放出されたプラフスキー粒子は軌道エレベーター付近の宇宙を形成した。

「矢倉　亮、ヅダＶＤ、出撃する！」

「アーニャ・ベリャーエフ……ガンダムＦ９１ミチエーリ、行くお♪」

「ガンダムアテナ、七種　真幸！　勝利を切り拓く！」

「夜天嬢雅　八々！　ウイングガンダムフェングファン！　推して参る！」

４機のガンプラがカタパルトから宇宙空間に飛び出し、あり得なかったであろうバトルの火蓋が切られた。

俺たちももっと加速しないとな

「にしても……今回の武装は重いな」
「亮の好みに合わせてみたつもりだお？　名前も晃に聞いて統一してるお」

今回のヅダＶＤの武装は右手に特徴のないシンプルな実弾ライフル――吹雪、左手に大きめなシールドで裏にはサブアームを付け、左右にシュツルム・ファウストを２発装備している盾――五月雨、右肩のハンガーはヒート・パイル――電、左肩のハンガーには近接武器――叢雲を装備している。
電以外はアーニャが新しく作った装備である。

「っと話してる内に捕捉したな。行くぞアーニャ！」
「ヲ！」

ヅダＶＤとガンダムＦ９１ミチエーリは迫ってくるガンダムアテナとウイングガンダムファングフェンを捕捉し、お互いに戦闘機動へと移った。

亮のヅダＶＤは八々のウイングガンダムファングフェンと、アーニャのガンダムＦ９１ミチエーリは真幸のガンダムアテナとバトルを始める。

ウイングガンダムファングフェンは迫ってくるヅダＶＤにバスターライフルに向けて撃つが、ヅダＶＤは最小限の動きで避け、お返しとばかりに吹雪を連射する。

「やっぱり当たるわけないよな！」

「そのような単純な射撃は当たらぬぞ！」

遠距離での戦闘はウイングガンダムファングフェンが持つ高火力のバスターライフルに分があるため、ヅダＶＤは一気に加速して接近して行く。

「ここまで近づけば……その長物は使えねーだろ！」

「じゃが儂にも近接武器はある！」

ウイングガンダムファングフェンは素早い動作でビームソードを両手に持ち替え挑んでくるが、ヅダＶＤはシュツルム・ファウストを１発放ち、それを吹雪で撃ち抜き爆発を起こした。

「小癪な真似をするの！　じゃが、その場しのぎの爆発如きで儂は怯まぬぞ!!」
「一手じゃ終わらねーよ！　二手、三手先まで考えておくのが普通だろ!!」

爆煙の中から続けてシュツルム・ファウストが飛び出てくるがウイングガンダムファングフェンは慌てず避け、さらにヅダＶＤが叢雲を手にして飛び出してくる。

「うおぉぉぉぉぉ！」
「そのような攻撃も当たらぬぞ！」

亮は雄叫びを上げながら叢雲で斬りかかり、ウイングガンダムファングフェンは後方に避けようとする。
が、亮は後方に避けようとするウイングガンダムファングフェンにニヤリと笑い……完璧に避けられると思えた瞬間に、叢雲の刀身が伸びた。

「何!?」

先ほどまでの倍以上の刀身となった叢雲はウイングガンダムファングフェンの胸部を斬り裂くが、それは上部だけであり致命傷となる一撃ではなかった。
ウイングガンダムファングフェンの機動性は高く、亮の予測より後方に逃げられていたのだ。

「今のを避けるのかよ……」
「あれには少し驚いたぞ。じゃが、儂を倒すには少し足りなかったの」

ヅダＶＤを超える長さとなった叢雲をサブアームとサブグリップ等で支え、亮は八々とウイングガンダムファングフェンに感心した。
油断や慢心があれば今の一撃で倒せたのだろうが、八々にはそれがなく胸部を少し斬った程度で終わったのだ。

「なら……俺たちももっと加速しないとな、ヅダ!!」

ヅダＶＤは熱気を纏いウイングガンダムファングフェンへと再び近付いた。

◇

そして同じ頃、アーニャのガンダムＦ９１ミチエーリと真幸のガンダムアテナは高機動戦を繰り広げていた。

お互いに撃ち合い接近しては離れ、接近しては離れを繰り返している。

「中々やるお！　だけど……亮の方がもっとИнтенсивный（激しかった）был（た）お！」

「だから私はロシア語わからないのぉ～！」

美桜の時も同じような事を言っていた真幸だが、アーニャと美桜はある意味似た者同士なので仕方がないとも言える。

ガンダムアテナと少し距離が開いた瞬間に、ガンダムＦ９１ミチエーリは左側のヴェスパーでガンダムアテナを狙い撃つ。

高速で貫通力のあるモードで撃ったヴェスパーだが、ガンダムアテナには当たらなかった。

「ちまちまとするのは性に合わないお。だから……一気に行くお！」

ガンダムＦ９１ミチエーリはビームライフルを投げ捨てると、後ろ腰に装備していた多目的攻撃兵装であるクジャクを手にする。

「一斉射だお！」

「そんな射撃なんか！」

クジャクをスマッシャーモードにしてビームを一斉に発射するが、それはガンダムアテナに当たらず再び接近を許してしまう。

「これで！」

「当たらないお」

ＧＮブレードによる一撃を左腕のビームシールドで受け止め、右足でガンダムアテナを蹴り飛ばす。

ガンダムＦ９１ミチエーリはクジャクをバスターモードにすると、お返しとばかりに斬りかかる。

「トランザムッ!!」

当たると思われた瞬間にガンダムアテナのツインアイが力強く輝き、その場から消え去ってしまう。

そしてガンダムＦ９１ミチエーリが振り向いた先には、赤く発光したガンダムアテナがいた。

「そっちがそのつもりなら……こっちも行くお、ミチエーリ!」

ガンダムＦ９１ミチエーリも金色に発光すると同時に、赤く発光したガンダムアテナとお互いに動き出した。

互いに残像を残しつつ、先ほどより激しくぶつかりあう。

だが、アーニャはまともにぶつかりあう気は更々なかった。

ガンダムＦ９１ミチエーリの質量を持った残像は、センサーだけでなく肉眼すら欺瞞する。

「ど、とれが本物なのよぉ！」
「これで終わらせてみせるお！」

ガンダムＦ９１ミチエーリの質量を持った残像はガンダムアテナを取り囲み、一斉にガンダムアテナに襲いかかった。
アーニャはこれは避けきれないだろうと思ったが、ガンダムアテナは再びアーニャの目の前からその姿を消した。

「ど、どこに行ったお！」

先ほどと違いガンダムアテナの姿は周囲になく、ガンダムＦ９１ミチエーリはその場に止まり周囲を見回している。
そして次の瞬間……ガンダムＦ９１ミチエーリの右腕は斬り飛ばされた。

「ど、どういう事だお!?」
「これで、終わり！」

次々とパーツを斬り飛ばされ、最後に胴体が斬られてしまう。
同時にガンダムアテナはトランザムを解除して元の色に戻る。

「アーニャがやられたか……流石優勝ファイターだな」

先ほどまで八々のウイングガンダムファングフェンと戦っていた、亮のボロボロになったヅダＶＤが近づいて来た。
吹雪を失い……電は残り１発、五月雨と叢雲もボロボロ。
対してガンダムアテナはほぼ無傷。トランザムを使用したため粒子の残量は少ないであろうが、ヅダＶＤもそこは同じなため不利である。
だが亮は笑っている……この不利な状態を楽しんでいるのだ。

「さて……このバトルを楽しもうぜ」
「負けないわよ！」

ヅダＶＤはガンダムアテナに叢雲の切っ先を向け、ガンダムアテナもＧＮブレードをヅダＶＤへと向ける。

互いに動かず、武器を向け合ったままでいた。
そして次の瞬間……同時に動き出した。

『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』

しかし制限時間が来たためバトルシステムが強制終了し、互いのガンプラがその場に倒れ込んでしまう。
公共の場であるここの筐体は制限時間が設けられており、仕方のないことであるのだが……不完全燃焼である。

「……とりあえず次の人に交代するか」
「そうですね」

とりあえずガンプラを回収してから会計を済ませ、店外に出る。

「いい経験になったよ。機会があれば今度はキチンとバトルしてみたいな」
「私もです。美桜ちゃんと霊香ちゃんともまたバトルしたいですし」

引き分けとなった亮と真幸は互いに再戦を約束しているが、ヤられてしまったアーニャは落ち込み八々は次は負けないと意気込んでいた。

「それじゃまた会おうな」
「はい。美桜ちゃんと霊香ちゃんによろしく伝えてください」
「次は負けぬからな！」

落ち込んでいるアーニャを除き、別れの挨拶を済ませた。
その後、美桜と霊香に真幸たちと会った事を伝えると、なぜか今まで以上に怒られてしまったのだった。

私たちがｋｏｍａｎｄａなんだよ

「それにしても珍しいな。美桜が俺たちを呼ぶって」
「……でも、亮だけにはわがまま言ってない？」

亮、愛、志織は学校が終わってから、美桜に頼まれて模型店に向かっていた。
桜と晃とアーニャがいないのは各々のガンプラの修理のためで、晃はその手伝いをさせられているのだ。

「でも……なんで美桜ちゃんは3人で絶対に来る様に言ってたのでしょうか……？」
「美桜はたまに飛んでもない事を思い付くからな」

そうこうしている内に模型店に到着すると、亜御の両親に挨拶してから3人は奥にある筐体の部屋に向かう。
筐体のある部屋では美桜が1人で待っており、亮たちが入って来たことに気付いた美桜は帽子を被り直してから近づいた。

「思ったより早かったね、兄さん」
「で、俺たちを呼んだ理由は何なんだ美桜？　ここに来る様に言ったって事はガンプラバトル関連とは思うけど」
「それは全員揃ってから話すよ。まだ霊香たちが来てないから」
「……たち？」

少なくとも霊香を含めてもう1人ほど来る予定があると言う事だ。
愛と志織は首を傾げているが、亮に関しては霊香以外に来るかも知れない人物について予想が出来ていた。

「まぁ……待つまでもなく来たみたいだね」

模型店の入り口から聞き覚えのある声が聞こえ、霊香と金髪の少女が入って来た。

「何で美桜は先に行ってるのよ！　この子は全く起きないし!!」
「く～……」

「仕方ないんじゃないかな？　誰かが予約しないといけないし……君がじゃんけんで負けたんじゃないか」

相変わらず仲がいいのか悪いのかわからない美桜と霊香で、愛と志織は見知った２人に１人ほど増えているので亮の方を見ていた。

「あの金髪は里崎　莉菜。美桜とずっと同じクラスの友人だよ」

「……亮の周りは小学生ばかり？」

「それは否定させてもらっておくぞ。美桜、これで全員なのか？」

「Д（そうだよ）ａ。それで兄さんたちにお願いなんだけど……私たちと戦って欲しいんだ」

「み、美桜ちゃんたちと……ですか……？」

美桜は真面目な様子で亮たちにバトルを申し込んだ。

高校生対小学生のバトルはやる前から結果が見えていそうなバトルなのだが、霊香はこの前まで高校生のファイターを倒して来た紅い悪魔であり、美桜はそんな霊香に勝ったりしている。

実力がわからないのは未だに寝ている莉菜ぐらいであろうが、美桜と霊香がメンバー

に誘うぐらいなのだから実力はあるのだろう。

「ちなみにバトルの方法は3対3のチームバトルだよ。今度の大会ではその方法らしいんだ」

「って事はお前たち3人は……」

「そう、私たちはｋｏｍａｎｄａ（チーム）なんだよ」

美桜は自慢気に説明していると、霊香は部屋にあるベンチに莉菜を座らせて頬をペチペチと叩いて起こそうとしていた。

「チーム名はマールィソルダートだよ。それで、私たちのバトルを受けてくれるかい、兄さん？」

「俺は売られたバトルは買ってやるよ。例えそれが実の妹からだとしてもな」

「……私も構わない」

「え、えっと……右に同じく、です……」

美桜は微笑むと缶コーヒー（ブラック）をどこからか取り出し霊香にパスすると、そ

れをキャッチした霊香が莉菜に無理矢理飲ませた。
　飲ませ終え霊香はゴミ箱に缶を捨てると同時に、莉菜があくびをしながらゆっくりと立ち上がる。
「ふぁ～……むにゃむにゃ……あ、おはようございます？」
「いや、もう夕方だからな？」
　目を覚ました莉菜は亮たちに挨拶をしてから身体を伸ばし、周囲をキョロキョロと見回してた。
「……ここは何処ですか？」
「今日はお兄ちゃんたちとガンプラバトルするって、キチンと説明したじゃない！」
「……そうでしたね。寝起きで忘れてました」
「莉菜が寝起きで悪いが、早速始めるとするか？」
「そうだね。時間の余裕は余りないからね。無理を言って、今は此処を貸し借りにしてもらってるし」

６人は各々筐体の前に３人ずつのチームで並び、バトルシステムが起動してプラフスキー粒子が放出される。
今回形成されたフィードバックはトリトン基地である。
「さてと……久しぶりに出番だぞブレイズ」
「……地上で良かった……です」
「……確かに、ヒルドルブには宇宙は……辛い？」

そんなやり取りをしながら各々がガンプラを取り出し、亮は久しぶりにイフリート・ブレイズを取り出していた。
ふと気になり志織の方をチラリと見ると、その手には普通の戦車のようなヒルドルブの姿があった。
流石にあの兵器は取り外したのであろうが……ヒルドルブの脚回りの先端に凄く尖っている物が見えるのだ。
亮はこの時、そういえば志織のヒルドルブにはブースターが付いてたようなっと思い返していた。

「流石にあれはないよな……？」

「……どうかした？」
「いや、何でもない」

亮は顔を振ってその考えを振り払い、イフリート・ブレイズをセットする。

「矢倉　亮、イフリート・ブレイズ、出撃する！」
「……御影　愛、アストレイロストフレーム聖、行きます」
「神通　志織、ヒルドルブ・センチュリオン、出します！」

俺の思いに答えてみせろ、ＥＸＡＭ！

「さてと……アイツらの機体をわかってる範囲で確認するか」

各々着地したイフリート・ブレイズとアストレイロストフレーム聖、ヒルドルブ・センチュリオンは隠れながら移動していた。

「……わかってるのは美桜ちゃんのブレイヴ、霊香ちゃんのカースロード」

「莉菜に関してはアイツの性格からして遠距離支援型の機体だろうな。って言うか隠れている意味がないな……ヒルドルブのキャタピラの音が……」

「ご、ごめんなさい……」

物陰に隠れながら移動しているのだが、ヒルドルブ・センチュリオンのキャタピラの音などが響き、あまり隠れながら移動している意味がなかった。

「って訳で俺はブレイズの特性を生かすのを考えて単独で動くぞ?」

「……もう遅いかも」
「それってどういう……ってそう言う事か！」

愛がそう言うと、言いたい事に気付いた亮は素早くその場から横に跳躍する。
愛のロストフレーム聖はヒルドルブ・センチュリオンを押して、続いてその場を離れた。
すると今まで３機がいた所をピンク色のビームが通過する。

「外しましたか」

ビームが来た方を向くと緑色の粒子を後方に放出しながらＧＮスナイパーライフルを構えている、漆黒のデュナメスがそこにいた。

「キャハハハハハ！　私もいるよお兄ちゃんたち!!」
「……忘れてた訳じゃ、ないけど？」

霊香のカースロードも飛び出して来ると、同時にサイドスカートからシザーファング

を放出してくる。
　それを聖はトリケロス改からビームを放ち迎撃していく。
「って事は……次はお前が来るんだよな美桜！」
「その通りだよ兄さん！」
　イフリート・ブレイズはヒート・ソードを抜くと頭上で交差させ、同時に銀色のガンダムが現れ右腕のソードが振り下ろされた。
　銀色のガンダムはすぐさまイフリート・ブレイズから離れ、亮はその姿をハッキリと確認する。
　一言で言ってしまえば銀色のアヴァランチエクシアのようだが、所々ガンダムアストレアであろうパーツが使われている。
「それがお前の新しい機体って事か美桜」
「そうだね。彼女に作って貰ったブレイヴじゃなくて、莉菜と不本意ながら霊香に教わりながら私が作ったガンプラ……ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナだよ」

愛と戦いながら霊香が「なんで不本意なのよ！」っと文句を言っていたが、それは聞き流した。
油断出来ないと思いつつ両手に持ったヒート・ソードを構え、莉菜を警戒しつつ美桜が動くのを待つ。

「撃ちます！」

まず先に動いたのは志織のヒルドルブ・センチュリオンであった。
全力で後退しながら３０㎝砲からＨＥ弾を発射し、漆黒のデュナメスはそれを回避してからヒルドルブ・センチュリオンを狙撃する。

「私は彼方を仕止めます。ガンダムサイレント・ゲイル、目標を狙撃します」

漆黒のデュナメス……ガンダムサイレント・ゲイルは、ＧＮスナイパーライフルⅡ―ＳＧをヒルドルブ・センチュリオンに向けて発射する。
ヒルドルブ・センチュリオンは回転しながらビームを避けつつ全速で後退していき、ガンダムサイレント・ゲイルは追撃しながらＧＮスナイパーライフルⅡ―ＳＧを撃ち続

ける。

「これでタイマン……って形になるな。準備はいいか美桜！」
「それはこっちの台詞かな、兄さん……ｙｐａａａａａａ！」

日ごろの美桜では考えられない声を出し右腕のＧＮソード改を横凪ぎに振るう。イフリート・ブレイズはヒート・ソードで受け止めると同時、ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナは左腕に装備したプロトＧＮソード改を展開して振った。
イフリート・ブレイズはプロトＧＮソード改を紙一重で避けると脚部のミサイルを発射するが、軽やかな身のこなしで至近距離のミサイルを避けられてしまう。

「なるほど。美桜自身の好みに合わせて作った機体か……かなりやるみたいだな」
「でもまだまだ作り方が甘かったみたいだね。莉奈の機体や彼女が作った機体に比べると感覚のズレがあったりするよ」
「そんだけの動きをしておいて感覚のズレがあるって冗談だろ……」

正直に言って美桜は強いと亮は思っている。

まだまだ経験不足な部分などがあるが、自分と同じぐらいの経験を積めばおそらく負けるであろうと亮は思えるのだ。

「まぁ。そう思えるからって妹に負け る訳にはいかないんだけどな！」

「私たちもДля目的のためцелей負ける訳にはいかないよ」

「行くぞ、ブレイズ！　俺の思いに答えてみせろ、ＥＸＡＭ！」

信頼の名は伊達じゃないよ

イフリート・ブレイズとガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナはまったく同じタイミングで動きだし、ヒート・ソードとプロトＧＮソード改をぶつけ合った。

「貰ったよ！」
「させるかよ!!」

ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナは右腕に装備しているＧＮソード改をライフルモードにして撃とうとするが、イフリート・ブレイズがその右腕を蹴り上げる。
そして僅かに出来た隙を攻めるように脚部のミサイルを発射するがクルリと回転して避けられ、ガンダムヴェールヌイとイフリート・ブレイズの距離が再び開く。

「ったく……キリがねぇな。これだからお前みたいな天才タイプは苦手なんだよ」
「私は兄さんのこと大好きだけどね」
「そう言う話じゃねーよ！」

射撃武装が貧弱なイフリート・ブレイズでは距離を開けているとかなり不利である。
美桜もイフリート・ブレイズの特徴を理解しているため、近すぎず遠すぎずの距離を保ち攻撃してくる。
使い続けられる射撃武器は両腕の三連装ガトリングガンしかなく、ハッキリと言って焼け石に水程度であるためダメージを与えられているかすらわからない。
ＥＸＡＭシステムを発動してこれなのだ。
美桜はまだトランザムを残している……正直不利である。

「無茶を承知で突っ込むぞ、ブレイズ!!」

ヒート・ソードを前で交差させスラスター全開でガンダムヴェールヌイに突撃し、美桜は慌ててＧＮソード改をライフルモードにしてビームを放つ。
放たれたビームを交差させたヒート・ソードで防ぎきり、その勢いのままガンダムヴェールヌイ目掛けてヒート・ソードを振るう。

「兄さんらしい行動だけど……その動きはｐｒｏｇｎｏｓｅ（予測）出来てたよ」

「どういう意……ック!?」

何か危険な予感がし咄嗟に回避行動に移るが、イフリート・ブレイズの左肩が撃ち抜かれた。

「このチャンス、逃がさないよ!」

「やられるかよ!」

左肩を撃ち抜かれたことで体勢を崩したイフリート・ブレイズに追い討ちをかけようと、ガンダムヴェールヌイはＧＮソード改をソードモードにして斬りかかる。

ＧＮソード改はイフリート・ブレイズの右肩を捉え、続けざまにプロトＧＮソード改を突き出し……イフリート・ブレイズの胸部を貫いた。

「信頼の名は伊達じゃないよ」

プロトＧＮソード改を抜くと同時に、イフリート・ブレイズは力無くその場に崩れ落ちてしまう。

「兄さんの初黒星は……私が貰ったよ」

美桜はイフリート・ブレイズの後方に隠すように置かれているガンダムサイレント・ゲイルのＧＮスナイパーライフルを見てから、その場を離れる。

亮の行動パターンを予測し、予め隠すように仕掛けておいたのだ。

同じタイミングで志織と莉奈、愛と霊香の勝負も決着がついていた。

「……霊香ちゃん……前より強くなってたけど、まだまだ」

「くーやーしーー！　なんで勝てないのよ!!」

ロストフレーム聖はカースロードのシザーファングを全て落とし、カースロードの胴体にはランサーダートが突き刺さっていた。

「予想外過ぎました……まさかヒルドルブにブースターが付いてて、それで先端にパイルとは……」

「こ、これがヒルドルブ・センチュリオンの力です！　それと……ごめんなさい……ッ！

愛さん!!」

ガンダムサイレント・ゲイルは壁にめり込んでおり、動けなくなったところにヒルドルブ・センチュリオンが両手に持っていたザク・マシンガンを撃ち込まれ、穴だらけになっていた。

志織はやり過ぎたと思ってしまい思わず謝ってしまうが、同時に亮のイフリート・ブレイズの反応が無くなったことに気づいた。

普段なら考えられない志織の声に愛は頷いてからヒルドルブ・センチュリオンの隣にロストフレーム聖が着地する。

幸いにも二人の戦っていた場所は近かったのだ。

「……気づいている。亮が負けるとは思わなかった」

「ですね……こんなことってやっぱりあるんですね」

二人は亮なら負けないと思っていたため、こんなどんでん返しが起こるとは思っていなかったのだ。

そんな二人の元に、ゆっくりと美桜が操るガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナが舞い

降りて来る。

「さて……最後のバトルを始めようじゃないか」

舞い降りたガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナと美桜は二人にＧＮソード改を向け、挑発的な笑みを浮かべていた。

私はまだＨｅ　ｔｅｐяйｔｅ負けてない！

ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナとロストフレーム聖は同時に動き出した。
お互いに近接戦闘を挑むため接近する中でヒルドルブ・センチュリオンは後方に下がり、援護射撃の準備を進める。

「こ、これだと撃てません……」

美桜も志織が援護射撃のために下がることはわかっていたため、ロストフレーム聖と戦いながらもかならずといって良いほど射線上にロストフレーム聖が来るように動いていた。
ヒルドルブ・センチュリオンもその場に止まって射撃をするはずもないく、美桜はロストフレーム聖とヒルドルブ・センチュリオンの両方の動きを把握して戦っているのだ。

「……美桜ちゃん、本当に小学生？」

「ｅｃｔｅｃｔｂｅＨｈｏじゃないか。それにお姉ちゃんたちの動きはほぼ毎日観ていたからね。次にどう繰るかは予想できるよ」

ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナはロストフレーム聖と距離を開けることなく近距離で戦っていた。

この距離でロストフレーム聖から最大限注意するのは両腰に装備されているビーム・アンカーのみと言っていいため、手数で勝るガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナの方が有利である。

もちろん愛も志織からの援護射撃のために射線や距離を一旦開けようとするのだが、美桜がそれを許すはずもなく次第に押され始めていた……のだがガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナはロストフレーム聖に蹴りを入れると一旦距離をとったのだ。

突然の行動に愛や志織は驚くも、ここは体制を立て直すためにも２人はガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナなから離れていく。

「……まさかここに来てこんなことになるなんてね」

離れていく２機を見送って美桜はガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナの左腕を見て１

人で呟いた。
愛と志織には気付かれていないからこそ離れていったのであろうが、あのまま戦っていた場合ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナの左腕が抜けてしまうかもしれなかったのだ。
莉奈と霊香から教わりながら作ったとは言え初めて自身の手で作り上げたガンプラであるため、初歩的なミスをしてしまったのだ。
「さて、この左腕の事を隠したままお姉ちゃんたちとの戦闘か。それに一度見失ってしまってるから狙撃と奇襲に注意しないといけないね」
美桜は周囲に気を配りながら頭の中で複数の戦術パターンを考え始める。
そして複数の戦術パターンから美桜が最善と思える戦術パターンを絞り混み、組み合わせてから行動に移した。
美桜はあえて遮蔽物が全くない上空に飛び上がり身をさらけ出したのだ。
見失ってしまったのならあえて自分から身をさらし、相手の方から見つけてもらうつもりなのだ。
どの方向からどのタイミングで攻撃がくるのかわからないが、美桜の戦術パターン通

りでくるのであれば……

「やっぱりこのＴａйＭＩＮＧ（タイミング）できたね！」

美桜はヒルドルブ・センチュリオンから放たれたＡＰＦＳＤＳ（装弾筒付翼安定徹甲）弾を抜けかけていた左腕をだけを犠牲にして、本体へ被弾しないように動いた。

「愛さん！」

「……わかってる」

ドライグヘッドを発動してアンテナからビームを放っているロストフレーム聖はガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナの後方に姿を表し、ヴォワチュール・リュミエールによりビームの翼を広げつつ残像を残し急速に接近すし……左腕のビーム・クローを突きだした。

これで決まったと愛は思ったのだが……ビーム・クローがガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナに当たる直前、ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナはその場から姿を消した。

「……かわされた?だけど……」

ドライグヘッドによって強化されたセンサーにより見失ったはずのガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナをすぐに発見するが、赤く発光している姿は先ほどまでと違い軽装になっていたのだ。

「ガンダムヴェールヌイ・ラヴィーナ改めて……ガンダムヴェールヌイ、出撃するよ」

強化装備であるラヴィーナユニットをパージしたこの姿こそ、ガンダムヴェールヌイの真の姿である。

ガンダムヴェールヌイはＧＮソード改の切っ先をロストフレーム聖に向けると同時に、お互いに動き出した。

ロストフレーム聖は先ほどとは違いヴォワチュール・リュミエールを発動しているため動きが格段に速くなり、対するガンダムヴェールヌイもトランザムを発動しているためかなり速くなっている。

その中でヒルドルブ・センチュリオンだけが取り残されているが、先ほどまでと違い次の狙撃のタイミングを待っていた。

近づいたままでの戦闘ではなく、ぶつかっては離れるの繰り返しの戦闘になっている。

この戦闘なら狙撃するタイミングあるはずと、そのタイミングを見極めているのだ。

「……今です！」

ガンダムヴェールヌイとロストフレーム聖が離れた瞬間、待っていたタイミングを見極めＡＰＦＳＤＳ（装弾筒付翼安定徹甲）弾を発射する。

「流石に２対１は部が悪いね」

「……でも、余裕そう」

そう言いつつも美桜はヒルドルブ・センチュリオンの攻撃をかわすが、その直後にロストフレーム聖が攻撃を仕掛けてくる。

ガンダムヴェールヌイは攻撃を受け止めるが上から攻撃であったためと、トランザムが切れた上に体制が悪かったため地面に落下してしまう。

「チャンスです！」
「志織お姉ちゃんが接近してくるのかい？」

ヒルドルブ・センチュリオンはタンク形態からモビル形態に変形すると、あえてガンダムヴェールヌイに接近する。
ガンダムヴェールヌイは近接型の機体でヒルドルブ・センチュリオンは遠距離型であるのだが、離れていたら有効打はなかなか撃ち込めない……ならあえて近くずく。
流石の美桜もヒルドルブ・センチュリオンが接近してくるのは想定外であろう。

「……追い込む」

愛のロストフレーム聖も上空からガンダムヴェールヌイ目掛けて一気に降下していく。
２機が一気にガンダムヴェールヌイに接近してくる。
トランザムが切れた上に２対１のこの状況……絶望的この上無いのだが、美桜は不適な笑みを浮かべた。

「私はまだＨｅ（負）　ｔｅｒяйｔｅ（けてない）！」

ガンダムヴェールヌイのツインアイが力強く輝くと同時に背中のＧＮドライブ安全装置が解除され、オーバーブーストモードになる。

飛び上がると同時にＧＮソード改を前方に突きだしロストフレーム聖の胸部を貫き、ロストフレーム聖のビームクローはガンダムヴェールヌイの左肩付近を貫く。

「愛お姉ちゃんもとったよ」

「もらいます！」

後は志織お姉ちゃんだけっと言おうとした瞬間に接近していたヒルドルブ・センチュリオンの砲撃で、ガンダムヴェールヌイはバラバラになってしまう

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄ』

バトルは終わり結果として亮たちの方が勝利したのだが、満足いく結果ではなかった。

ハッキリと言えば美桜1人に亮と愛の2人も負けたのだ。
亮はイフリート・ブレイズを手に取ると美桜に近づき、頭を優しく撫でた。

「兄さん?」
「お前のおかげで俺の足りない所とか気づいたよ。ありがとな」

そう言ってから先に模型店を1人で先に出ていった。
莉菜はキョトンとして霊香は「私の頭を撫でてよ!」っと言っていたが、既に店を後にしていた亮にその言葉は届かなかった。

「えっと、大丈夫……なんでしょうか……?」
「兄さんなら大丈夫だよ。私に負けたからと言ってやさぐれないよ」

志織はオロオロと心配そうにしているが美桜の自信ありげに言った言葉に少しだけ安心した。

番外編　夏だ！海だ!!サマーバケーション!!!
君の考えていることはお見通しだったよ

亮たち蒼城学園のメンバーは豪華な船でとある島に来ていた。
その島は貴族御用達のような島で三泊四日でアーニャが金に物をいわせて貸し切りで借りたのだ。

「気持ち悪い……」
「兄さん、大丈夫かい？」
「お兄ちゃん大丈夫なの？」

亮は顔を青白くしながら船のデッキで吐いており、美桜に背中を擦ってもらい、霊香は心配そうにしていた。
何を隠そう亮は船酔いしやすいらしいのだ。

「亮～氷貰ってきたお」

「サンキュー……アーニャ……」

亮はアーニャから氷を受け取ると口の中に含み、ゆっくりと舐めた。

二日酔いの人にお冷やを飲ませるているのと同じような感じで、口から喉にかけて冷たさで交感神経が刺激され、副交感神経が過敏に働いていた状態をニュートラルな状態にしてくれるのだ（豆知識）。

「それにしても亮が船に弱いとは思わなかったお。あと少しで島につくからそこまで辛抱してほしいお」

「りょーかい……」

流石のアーニャも今の常態の亮に激しく接するようなことはなく、美桜に看病を任せていた。

「まーったく情けないわねーそれでも男なの？」

「先輩、そこは流石に男とか女とか関係ないんじゃ……」

桜は両手を腰に当てて呆れた様子で亮を見て、そんな桜を晃は苦笑いで見ていた。
ちなみに志織はオロオロしており愛はいつも通りの様子で備え付けであった果物をずーっと食べ続けていた。

「島が見えてきたおー」

アーニャがそう言うと目的の島が見え、全員（亮を除く）が島をみて歓声が上がる。

「どうでもいいから……早く陸に……」

全員は島に降りてから黒服の人たちが荷物を各自の部屋まで運び（亮は黒服の人たちが医務室に運んで行った）、残った元気なメンバーは更衣室で着替えを行った。
数十分後……なんとか回復した亮は遅れてから水着に着替えてからビーチに向かう。

「俺としたことがまさかあそこまでダウンするとか……っと全員元気だなー」

遅れてビーチに行った亮が見たのはそれぞれ元気にはしゃぎ回っている。

美桜と霊香はスクール水着で胸元には平仮名で「みおう」「れいか」と書かれており（これは亮が書いたのだが漢字で書こうとしたら２人に怒られた）、お互いに水を掛け合って遊んでいた。

志織はフリル付きのピンク色のビキニを来て両手でボールを持ち、黄色いビキニを来た愛と遊んでいる。

桜は髪の色と同じパレオを来てビーチパラソルの下でビーチチェアに横になっている。

晃も桜とは別のビーチパラソルの下にいるのだが、ガンプラを作っており（男の水着は説明しても誰得になるのかわからないため省く）、アーニャの姿だけ見かけられなかった。

「あ、お兄ちゃん！」

「兄さん。もう大丈夫なのかい？」

真っ先に気づいた小学生組の２人はお互いに水を掛け合うのを止め、亮の元に駆け寄って抱き付いた。

「ああ、問題ないよ。それより1人足りない……って言うよりかはアーニャだけがいないようみたいだけど、アイツは何処に行ったんだ？」
「彼女かい？彼女のなら……」

美桜が海の方を指を差すと同時にザブァーっと白と黒のシマシマの全身水着？を着てゴーグル等を付けた見覚えの髪の色をした人物……アーニャが現れた。

「ヲ？亮、元気になったみたいお？」
「あ、ああ……で、お前のその水着……」

ハッキリと言って残念な水着であった。
アーニャは可愛いと言っていい容姿をしているため、水着がここまで残念となると……色々と台無しである。

「あら復活したの。これで全員揃ったみたいね」

亮が復活したのに遅れて気づいた桜は立ち上がってから亮に近づこうとしたが、晃が

亮が来たことに気付かずにずっとガンプラをいじっていたので桜が晃にゲンゴツをして集合する。

「っと言う訳で始めましょうか」

「いや、毎度の事ながらいきなり過ぎますよね先輩」

「私たちが集まったって事はやることは1つよ!それは……ガンプラバトルよ!」

全員がやっぱりかーって感じになっているとアーニャが指パッチンして、何時もの感じで黒服たちがバトルシステムを準備した。

「今回は普通のガンプラバトルだと面白味がないからこんなのなんてどうお?」

アーニャがそう言うと黒服たちが後ろで「ガンプラビーチバレー」と書かれた看板を持っていた。

「ガンプラビーチバレー?」

「そうだお!何時も普通にバトルヲしてるからたまにこういった変わった趣向のバトル

は面白そうだお!!」

　アーニャは興奮しているのがアホ毛がビュンビュンも動いており、アーニャ以外は微妙な表情をしていた。

「私がお金だしてるんだからこれぐらいのワガママは言ってもいいと思うお!」

「拒否はしてないから大丈夫だよ。ほらチーム分けとかあるんだろ?」

「もちろんだお!」

　これまた黒服の人が割り箸が入っている入れ物をもってきた。

(フッフッフ……これは私と亮が組めるように仕組んであるんだお!これだ私と亮のラブラブパワーを見せつけてやるお!!)

　くじ引きの結果、チーム分けは……桜&アーニャ、愛&志織、晃&霊香、亮&美桜となる。

　アーニャはとてつもなく落ち込んでいた。

亮とチームを組めるように仕組んだはずなのに、何故か組めなかったのだ。
そんなアーニャを美桜は微笑みながら見ていた。

（君の考えることはお見通しだったよ）